
蓮田市

荒川附遺跡II

国道122号道路改築事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

-VII-

2007

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 発掘区全景（空中写真合成）



1 遺跡遠景（南から北）



2 C区全景（空中写真）



1 B区全景（南から）



2 C区全景（北から）



1 第60号住居跡出土遺物



2 第35号住居跡出土遺物



1 第63号住居跡出土鍛冶関連遺物



2 焼成粘土塊（第40号土壤）



3 焼成粘土塊（第16号土壤）



4 鍛造剥片（第63号住居跡）



5 勾玉・耳環・帶金具・土製紡錘車

巻頭図版 6



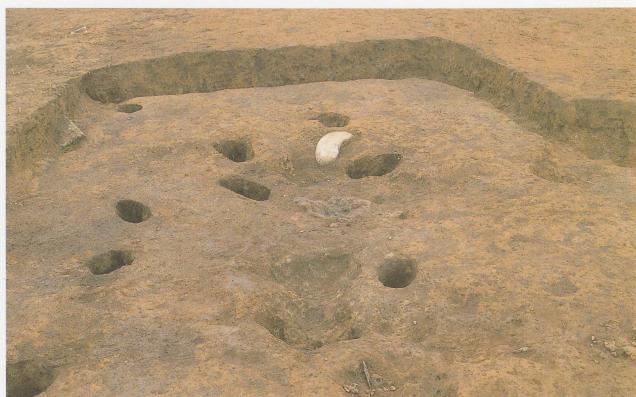
1 第63号住居跡遺物出土状況



2 第63号住居跡遺物出土状況



3 第63号住居跡鍛冶炉



4 第63号住居跡鍛冶炉



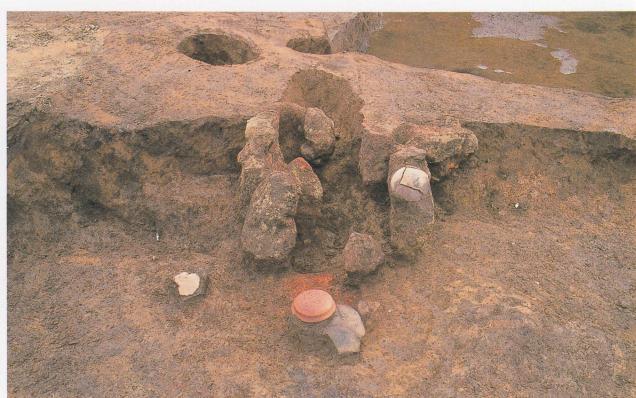
5 第63号住居跡鍛冶炉



6 第18号住居跡カマド



7 第23号住居跡カマド



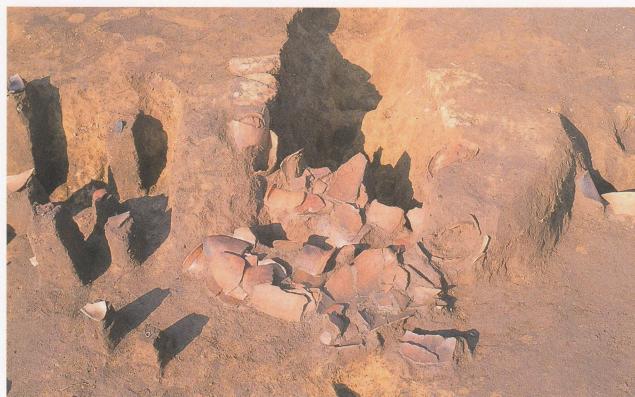
8 第25号住居跡カマド



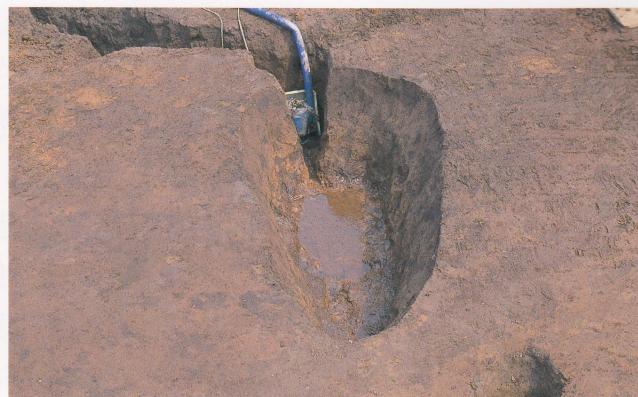
1 第37号住居跡カマド



2 第60号住居跡遺物出土状況



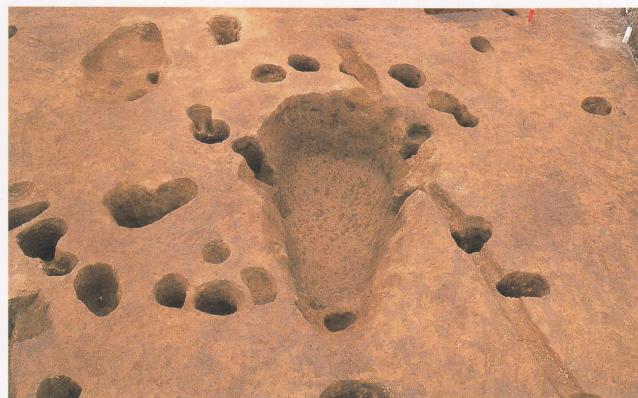
3 第60号住居跡カマド



4 第2号土壙 (土師器焼成壙)



5 第4号土壙断面 (土師器焼成壙)



6 第11号土壙 (土師器焼成壙)



7 第11号土壙底面



8 第16号土壙 (土師器焼成壙)



1 第16号土壤断面



2 第16号土壤



3 第16号土壤断面



4 第18号土壤（土師器焼成壙）



5 第18号土壤土層断面



6 第40号土壤（土師器焼成壙）



7 第40号土壤炭化材出土状況



8 第47号土壤（土師器焼成壙）

序

埼玉県は、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念として掲げ、環境への負荷の低減に十分配慮しつつ、誰もが安心・安全・快適に通行できる道路空間の形成を推進しています。この基本理念のもと、県民の豊かな交流や活発な経済活動を支える「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」を目指し、バイパスの整備や拡幅による幹線道路の整備、市街地を迂回する環状道路の整備などさまざまな取り組みを実施しています。一般国道122号蓮田岩槻バイパスの建設もそのひとつです。

一般国道122号は、県東部および中央地域の産業・経済の発展を担う主要幹線道路です。蓮田岩槻バイパスは昭和43年度から整備が進められ、平成18年6月に全線開通いたしました。これにより、慢性的な渋滞に悩まされていた蓮田市内の交通アクセスは飛躍的に改善されました。

蓮田市内には国指定史跡に新たに指定された黒浜貝塚をはじめ、当時の海岸線に沿って縄文時代の遺跡が多数存在することが知られています。その後も、各時代にわたり多くの遺跡がつくられ、まさに埋蔵文化財の宝庫といえるでしょう。

一般国道122号蓮田岩槻バイパス事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として荒川附遺跡があり、その取り扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代中期～平安時代にかけて営まれた集落跡がみつかりました。鉄器を製作した当時の鍛冶屋（鍛冶工房）や土師器を焼いた窯跡（土師器焼成場）が発見され、荒川附遺跡が「ものづくり」に関わるムラであったことがわかつてまいりました。

本書はこれらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力をいただきました埼玉県県土整備部道路街路課、杉戸県土整備事務所、蓮田市教育委員会並びに地元関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 福 田 陽 充

例 言

- 1 本書は、埼玉県蓮田市に所在する荒川附遺跡第20次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。

荒川附遺跡第20次（県遺跡番号82-020）
略号 A R KWD K 20
平成13・14年度
蓮田市関山3丁目12番地他
指示通知 平成14年3月8日付け 教文第2-123号
- 3 発掘調査は、一般国道122号蓮田岩槻バイパス建設（国道122号道路改築）事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 一般国道122号蓮田岩槻バイパス建設事業に伴い、刊行された発掘調査報告書は以下のとおりである。
 - ・1983『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』（国道122号道路改築）国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－I－ 事業団報告書第24集
 - ・1984『久台』国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－II－ 事業団報告書第36集
 - ・1984『閔戸足利』国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－III－ 事業団報告書第40集
 - ・1985『ささら（II）』国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－IV－ 事業団報告書第47集
 - ・1992『荒川附遺跡』国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－V－ 事業団報告書第112集
 - ・1995『堂山公園／久台』国道122号線バイパ

- ス関係埋蔵文化財発掘調査報告－VI－ 事業団報告書第168集
- ・2007『久台遺跡III』国道122号道路改築事業関係埋蔵文化財発掘調査報告－VII－ 事業団報告書第339集
 - 5 本事業は、第I-3章の組織により実施した。発掘調査は、平成14年3月1日～平成15年1月31日まで実施した。平成14年3月1日～平成14年3月31日までは昼間孝志が、平成14年4月1日～平成15年1月31日までは富田和夫・池谷考史が担当して実施した。
整理・報告書作成事業は、平成18年4月10日～平成19年3月23日まで、富田が担当して実施した。
 - 6 遺跡の基準点測量及び空中写真撮影は株式会社ムサシノ、株式会社東日本朝日航洋に委託して実施した。
 - 7 発掘調査時の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
 - 8 出土品の整理・図版作成は富田が行い、新屋雅明・瀧瀬芳之・大谷徹・栗岡潤・上野真由美・岡田勇介・大和田瞳・矢田美知子・吉田美子の協力、齊藤直美的補助を受けた。
 - 9 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、縄文土器は新屋、石器は上野・矢田、鉄器は瀧瀬、製鉄関連遺物は栗岡、瓦は齊藤、他は富田が行った。
 - 10 本書の編集は富田が行った。
 - 11 本書に掲載した資料は、平成19年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 - 12 本書の作成にあたり、下記の方々、機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）

蓮田市教育委員会 江口桂 大塚孝司
奥野麦生 栗岡眞理子 黒済和彦 小宮雪晴
田中和之 鶴間正昭 寺内正明 德澤啓一

凡 例

1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

K-7グリッド北西杭の座標は、X=-1330.000 m、Y=-15910.000 m。北緯 $35^{\circ} 59' 16.3728''$ 、東経 $139^{\circ} 39' 24.7134''$ である。

K-7グリッドの世界測地系による換算値はX=-974.4228 m、Y=-16203.1269 m。北緯 $35^{\circ} 59' 27.89771''$ 、東経 $139^{\circ} 39' 13.06002''$ である。

2 調査で使用したグリッドは国土標準平面直角座標に基づく 10×10 mの範囲を1グリッドとし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばR-8グリッド等と呼称した。

4 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

S J…豎穴住居跡 S D…溝・堀状遺構

S E…井戸跡 S K…土壙 Pit…小穴・柱穴

5 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、一部例外もある。

全測図 1:200

遺構図 1:60 遺構拡大図 1:30

土師器・須恵器など 1:4

土器拓影図・石器・土製品（土錘・土玉等） 1:3

鉄器・小型製品（耳環・勾玉・ミニチュア土器など） 1:2

6 遺物で断面を黒塗りしたものは須恵器を示す。また、彩色された土器についてはその範囲に網を掛けて示した（赤彩10%・黒色処理30%）。

7 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。

8 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・高台付き坏（椀）は高台坏（椀）と表記した。

・口径・器高・底径はcm単位である。

・（ ）内の数値は推定値を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-一片岩 C-角閃石 D-長石 E-石英 F-軽石 G-砂粒子 H-赤色粒子 I-白色粒子 J-白色針状物質 K-黒色粒子 L-その他

・残存は残存率を差し、残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No.、推定される須恵器産地などを記した。

・備考欄の（床+ α ）は出土高を示し、床面から α cm高い位置から出土したことを表す。

9 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50000及び1/25000地形図、蓮田市都市計画図1/2500を使用した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

| | | | |
|------------------------|-----|------------------------|-----|
| I 発掘調査の概要 | 1 | 5. 道路跡..... | 231 |
| 1. 発掘調査に至る経過 | 1 | 6. 谷部整地層 | 232 |
| 2. 発掘調査・報告書作成の経過 | 2 | 7. 井戸跡 | 232 |
| 3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織 .. | 3 | 8. ピット | 234 |
| II 遺跡の立地と環境 | 4 | 9. その他の遺物 | 238 |
| III 遺跡の概要 | 9 | V 調査のまとめ | 241 |
| IV 遺構と遺物 | 21 | 1. 荒川附遺跡20次の土器様相 | 241 |
| 1. 竪穴住居跡 | 21 | 2. 集落構成について | 249 |
| 2. 土壙 | 206 | 3. 土師器焼成壙について | 252 |
| 3. 土師器焼成壙 | 215 | 4. まとめ | 254 |
| 4. 溝跡 | 221 | | |

写真図版

挿図目次

| | | | |
|---------------------|----|----------------------|----|
| 第1図 調査区分割図 | 2 | 第37図 第11号住居跡出土遺物 | 43 |
| 第2図 遺跡の位置と埼玉県の地形 | 4 | 第38図 第12号住居跡 | 44 |
| 第3図 周辺遺跡分布図 | 6 | 第39図 第12号住居跡出土遺物 | 44 |
| 第4図 基本層序 | 10 | 第40図 第13号住居跡 | 45 |
| 第5図 荒川附遺跡と周辺の地形 | 11 | 第41図 第13号住居跡出土遺物 | 46 |
| 第6図 荒川附遺跡全体図 | 12 | 第42図 第14号住居跡 | 47 |
| 第7図 全体図区割り図 | 13 | 第43図 第14号住居跡出土遺物 | 48 |
| 第8図 荒川附遺跡20次全体図(1) | 15 | 第44図 第15号住居跡 | 49 |
| 第9図 荒川附遺跡20次全体図(2) | 16 | 第45図 第15号住居跡出土遺物 | 49 |
| 第10図 荒川附遺跡20次全体図(3) | 17 | 第46図 第16号住居跡 | 50 |
| 第11図 荒川附遺跡20次全体図(4) | 18 | 第47図 第16号住居跡出土遺物 | 50 |
| 第12図 荒川附遺跡20次全体図(5) | 19 | 第48図 第17号住居跡 | 52 |
| 第13図 荒川附遺跡20次全体図(6) | 20 | 第49図 第17号住居跡出土遺物 | 53 |
| 第14図 第1・2号住居跡 | 21 | 第50図 第18号住居跡 | 54 |
| 第15図 第1号住居跡出土遺物 | 22 | 第51図 第18号住居跡第1・2号カマド | 55 |
| 第16図 第2号住居跡出土遺物 | 24 | 第52図 第18号住居跡出土遺物 | 56 |
| 第17図 第3・4号住居跡 | 25 | 第53図 第19号住居跡 | 57 |
| 第18図 第3号住居跡出土遺物 | 26 | 第54図 第19号住居跡出土遺物 | 58 |
| 第19図 第4号住居跡出土遺物 | 27 | 第55図 第20号住居跡 | 60 |
| 第20図 第3・4号住居跡出土遺物 | 27 | 第56図 第20号住居跡出土遺物 | 61 |
| 第21図 第5号住居跡 | 28 | 第57図 第21号住居跡 | 62 |
| 第22図 第5号住居跡出土遺物 | 29 | 第58図 第22号住居跡 | 63 |
| 第23図 第6号住居跡 | 29 | 第59図 第22号住居跡出土遺物 | 64 |
| 第24図 第6号住居跡出土遺物 | 30 | 第60図 第23号住居跡 | 66 |
| 第25図 第7号住居跡 | 31 | 第61図 第23号住居跡カマド | 67 |
| 第26図 第7号住居跡出土遺物 | 32 | 第62図 第23号住居跡出土遺物(1) | 68 |
| 第27図 第8号住居跡 | 33 | 第63図 第23号住居跡出土遺物(2) | 69 |
| 第28図 第8号住居跡出土遺物 | 33 | 第64図 第24号住居跡 | 70 |
| 第29図 第9号住居跡 | 34 | 第65図 第24号住居跡出土遺物(1) | 71 |
| 第30図 第9号住居跡第1号カマド | 35 | 第66図 第24号住居跡出土遺物(2) | 72 |
| 第31図 第9号住居跡出土遺物(1) | 36 | 第67図 第25号住居跡 | 73 |
| 第32図 第9号住居跡出土遺物(2) | 37 | 第68図 第25号住居跡カマド | 74 |
| 第33図 第10号住居跡 | 39 | 第69図 第25号住居跡出土遺物 | 75 |
| 第34図 第10号住居跡第1号カマド | 40 | 第70図 第26号住居跡 | 76 |
| 第35図 第10号住居跡出土遺物 | 41 | 第71図 第26号住居跡出土遺物 | 77 |
| 第36図 第11号住居跡 | 42 | 第72図 第27号住居跡 | 79 |

| | | |
|-------|----------------|-----|
| 第73図 | 第27号住居跡カマド | 80 |
| 第74図 | 第27号住居跡出土遺物 | 81 |
| 第75図 | 第28・54号住居跡 | 82 |
| 第76図 | 第28号住居跡出土遺物 | 83 |
| 第77図 | 第29号住居跡・カマド | 84 |
| 第78図 | 第29号住居跡出土遺物(1) | 85 |
| 第79図 | 第29号住居跡出土遺物(2) | 86 |
| 第80図 | 第30号住居跡 | 87 |
| 第81図 | 第30号住居跡出土遺物 | 88 |
| 第82図 | 第31号住居跡 | 90 |
| 第83図 | 第31号住居跡出土遺物 | 90 |
| 第84図 | 第32号住居跡 | 91 |
| 第85図 | 第32号住居跡出土遺物 | 92 |
| 第86図 | 第33号住居跡 | 93 |
| 第87図 | 第33号住居跡カマド | 94 |
| 第88図 | 第33号住居跡出土遺物 | 95 |
| 第89図 | 第34号住居跡 | 96 |
| 第90図 | 第34号住居跡出土遺物(1) | 97 |
| 第91図 | 第34号住居跡出土遺物(2) | 98 |
| 第92図 | 第35号住居跡(1) | 100 |
| 第93図 | 第35号住居跡(2) | 101 |
| 第94図 | 第35号住居跡出土遺物(1) | 102 |
| 第95図 | 第35号住居跡出土遺物(2) | 103 |
| 第96図 | 第35号住居跡出土遺物(3) | 104 |
| 第97図 | 第36号住居跡 | 105 |
| 第98図 | 第36号住居跡出土遺物 | 106 |
| 第99図 | 第37号住居跡 | 107 |
| 第100図 | 第37号住居跡カマド | 108 |
| 第101図 | 第37号住居跡出土遺物(1) | 109 |
| 第102図 | 第37号住居跡出土遺物(2) | 110 |
| 第103図 | 第38・39号住居跡 | 112 |
| 第104図 | 第38号住居跡出土遺物(1) | 113 |
| 第105図 | 第38号住居跡出土遺物(2) | 114 |
| 第106図 | 第38号住居跡出土遺物(3) | 115 |
| 第107図 | 第38号住居跡出土遺物(4) | 116 |
| 第108図 | 第39号住居跡出土遺物 | 118 |
| 第109図 | 第40号住居跡 | 118 |
| 第110図 | 第41号住居跡 | 119 |
| 第111図 | 第41号住居跡出土遺物 | 120 |
| 第112図 | 第42号住居跡 | 121 |
| 第113図 | 第42号住居跡出土遺物 | 122 |
| 第114図 | 第43号住居跡 | 123 |
| 第115図 | 第43号住居跡出土遺物(1) | 124 |
| 第116図 | 第43号住居跡出土遺物(2) | 125 |
| 第117図 | 第43号住居跡出土遺物(3) | 126 |
| 第118図 | 第43号住居跡出土遺物(4) | 127 |
| 第119図 | 第44号住居跡 | 131 |
| 第120図 | 第44号住居跡出土遺物(1) | 132 |
| 第121図 | 第44号住居跡出土遺物(2) | 133 |
| 第122図 | 第45号住居跡 | 135 |
| 第123図 | 第45号住居跡出土遺物 | 135 |
| 第124図 | 第46号住居跡 | 136 |
| 第125図 | 第46号住居跡出土遺物 | 136 |
| 第126図 | 第47号住居跡・カマド | 138 |
| 第127図 | 第47号住居跡出土遺物 | 139 |
| 第128図 | 第48・53号住居跡 | 140 |
| 第129図 | 第48号住居跡出土遺物(1) | 141 |
| 第130図 | 第48号住居跡出土遺物(2) | 142 |
| 第131図 | 第49号住居跡・遺物出土状況 | 144 |
| 第132図 | 第49号住居跡出土遺物(1) | 145 |
| 第133図 | 第49号住居跡出土遺物(2) | 146 |
| 第134図 | 第50号住居跡 | 148 |
| 第135図 | 第50号住居跡出土遺物 | 149 |
| 第136図 | 第51号住居跡 | 150 |
| 第137図 | 第51号住居跡出土遺物 | 150 |
| 第138図 | 第52号住居跡 | 152 |
| 第139図 | 第52号住居跡遺物出土状況 | 153 |
| 第140図 | 第52号住居跡出土遺物 | 154 |
| 第141図 | 第54号住居跡出土遺物 | 155 |
| 第142図 | 第55号住居跡 | 155 |
| 第143図 | 第55号住居跡出土遺物 | 156 |
| 第144図 | 第56号住居跡 | 158 |
| 第145図 | 第56号住居跡出土遺物(1) | 159 |
| 第146図 | 第56号住居跡出土遺物(2) | 160 |
| 第147図 | 第57号住居跡 | 162 |
| 第148図 | 第57号住居跡カマド | 163 |

| | | | | | |
|-------|------------------------|-----|-------|----------------------------------|---------|
| 第149図 | 第57号住居跡出土遺物(1) | 164 | 第184図 | 土壙(2) | 209 |
| 第150図 | 第57号住居跡出土遺物(2) | 165 | 第185図 | 土壙(3) | 211 |
| 第151図 | 第58号住居跡 | 167 | 第186図 | 土壙(4) | 213 |
| 第152図 | 第58号住居跡出土遺物 | 167 | 第187図 | 土師器焼成壙(1) | 216 |
| 第153図 | 第59号住居跡 | 169 | 第188図 | 土師器焼成壙(2) | 217 |
| 第154図 | 第59号住居跡出土遺物 | 170 | 第189図 | 土師器焼成壙(3) | 218 |
| 第155図 | 第60号住居跡 | 171 | 第190図 | 土壙出土遺物 | 220 |
| 第156図 | 第60号住居跡カマド | 172 | 第191図 | 溝跡(1) | 222 |
| 第157図 | 第60号住居跡遺物出土状況(1) | 173 | 第192図 | 溝跡(2) | 223 |
| 第158図 | 第60号住居跡遺物出土状況(2) | 174 | 第193図 | 溝跡(3) | 225 |
| 第159図 | 第60号住居跡出土遺物(1) | 175 | 第194図 | 溝跡(4) | 226 |
| 第160図 | 第60号住居跡出土遺物(2) | 176 | 第195図 | 溝跡(5) | 227 |
| 第161図 | 第60号住居跡出土遺物(3) | 177 | 第196図 | 溝跡(6) | 228 |
| 第162図 | 第60号住居跡出土遺物(4) | 178 | 第197図 | 溝跡出土遺物 | 230 |
| 第163図 | 第60号住居跡出土遺物(5) | 179 | 第198図 | 第1号道路跡見取り図 | 231 |
| 第164図 | 第60号住居跡出土遺物(6) | 180 | 第199図 | 第1号道路跡(東壁) | 231 |
| 第165図 | 第60号住居跡出土遺物(7) | 181 | 第200図 | 谷部整地層(1) | 233 |
| 第166図 | 第61号住居跡 | 185 | 第201図 | 谷部整地層(2) | 234 |
| 第167図 | 第61号住居跡出土遺物 | 186 | 第202図 | 第1号井戸跡・出土遺物 | 234 |
| 第168図 | 第62号住居跡・出土遺物 | 187 | 第203図 | ピット出土遺物 | 234 |
| 第169図 | 第63号住居跡 | 188 | 第204図 | グリッド出土遺物 | 238 |
| 第170図 | 第63号住居跡鍛冶炉跡(1) | 189 | 第205図 | 表採遺物 | 239 |
| 第171図 | 第63号住居跡鍛冶炉跡(2) | 190 | 第206図 | 縄文時代の遺物 | 240 |
| 第172図 | 第63号住居跡出土遺物(1) | 191 | 第207図 | 荒川附遺跡20次 I・II期の土器群 | 242 |
| 第173図 | 第63号住居跡出土遺物(2) | 192 | 第208図 | 荒川附遺跡20次 III・IV期の土器群 | 244 |
| 第174図 | 第63号住居跡出土遺物(3) | 193 | 第209図 | 荒川附遺跡20次 V期の土器群 | 246 |
| 第175図 | 第63号住居跡出土遺物(4) | 194 | 第210図 | 荒川附遺跡20次 VI期の土器群 | 247 |
| 第176図 | 第63号住居跡出土遺物(5) | 196 | 第211図 | 荒川附遺跡20次 VII・VIII期の土器群 | 248 |
| 第177図 | 第63号住居跡出土遺物(6) | 197 | 第212図 | 荒川附遺跡の集落変遷 | 250・251 |
| 第178図 | 第63号住居跡出土遺物(7) | 198 | 第213図 | 焼成壙の分布と武藏国内の非ロクロ土 師器焼成壙 | 253 |
| 第179図 | 第64号住居跡 | 202 | | | |
| 第180図 | 第64号住居跡出土遺物 | 203 | | | |
| 第181図 | 第65号住居跡 | 204 | | | |
| 第182図 | 第65号住居跡出土遺物 | 205 | | | |
| 第183図 | 土壙(1) | 207 | | | |

表 目 次

| | | | | | |
|------|-----------------|-----|------|----------------|-----|
| 第1表 | 第1号住居跡出土遺物観察表 | 23 | 第37表 | 第38号住居跡出土遺物観察表 | 116 |
| 第2表 | 第3号住居跡出土遺物観察表 | 24 | 第38表 | 第39号住居跡出土遺物観察表 | 118 |
| 第3表 | 第4号住居跡出土遺物観察表 | 27 | 第39表 | 第41号住居跡出土遺物観察表 | 120 |
| 第4表 | 第3・4号住居跡出土遺物観察表 | 27 | 第40表 | 第42号住居跡出土遺物観察表 | 122 |
| 第5表 | 第5号住居跡出土遺物観察表 | 28 | 第41表 | 第43号住居跡出土遺物観察表 | 128 |
| 第6表 | 第6号住居跡出土遺物観察表 | 30 | 第42表 | 第44号住居跡出土遺物観察表 | 134 |
| 第7表 | 第7号住居跡出土遺物観察表 | 32 | 第43表 | 第45号住居跡出土遺物観察表 | 135 |
| 第8表 | 第8号住居跡出土遺物観察表 | 33 | 第44表 | 第46号住居跡出土遺物観察表 | 137 |
| 第9表 | 第9号住居跡出土遺物観察表 | 35 | 第45表 | 第47号住居跡出土遺物観察表 | 139 |
| 第10表 | 第10号住居跡出土遺物観察表 | 40 | 第46表 | 第48号住居跡出土遺物観察表 | 142 |
| 第11表 | 第11号住居跡出土遺物観察表 | 43 | 第47表 | 第49号住居跡出土遺物観察表 | 147 |
| 第12表 | 第12号住居跡出土遺物観察表 | 43 | 第48表 | 第50号住居跡出土遺物観察表 | 148 |
| 第13表 | 第13号住居跡出土遺物観察表 | 47 | 第49表 | 第51号住居跡出土遺物観察表 | 151 |
| 第14表 | 第14号住居跡出土遺物観察表 | 48 | 第50表 | 第52号住居跡出土遺物観察表 | 153 |
| 第15表 | 第15号住居跡出土遺物観察表 | 49 | 第51表 | 第54号住居跡出土遺物観察表 | 155 |
| 第16表 | 第16号住居跡出土遺物観察表 | 51 | 第52表 | 第55号住居跡出土遺物観察表 | 156 |
| 第17表 | 第17号住居跡出土遺物観察表 | 53 | 第53表 | 第56号住居跡出土遺物観察表 | 161 |
| 第18表 | 第18号住居跡出土遺物観察表 | 56 | 第54表 | 第57号住居跡出土遺物観察表 | 166 |
| 第19表 | 第19号住居跡出土遺物観察表 | 58 | 第55表 | 第58号住居跡出土遺物観察表 | 168 |
| 第20表 | 第20号住居跡出土遺物観察表 | 59 | 第56表 | 第59号住居跡出土遺物観察表 | 169 |
| 第21表 | 第22号住居跡出土遺物観察表 | 64 | 第57表 | 第60号住居跡出土遺物観察表 | 182 |
| 第22表 | 第23号住居跡出土遺物観察表 | 67 | 第58表 | 第61号住居跡出土遺物観察表 | 186 |
| 第23表 | 第24号住居跡出土遺物観察表 | 72 | 第59表 | 第63号住居跡出土遺物観察表 | 193 |
| 第24表 | 第25号住居跡出土遺物観察表 | 74 | 第60表 | 第63号住居跡楕形溝観察表 | 198 |
| 第25表 | 第26号住居跡出土遺物観察表 | 77 | 第61表 | 第64号住居跡出土遺物観察表 | 201 |
| 第26表 | 第27号住居跡出土遺物観察表 | 80 | 第62表 | 第65号住居跡出土遺物観察表 | 205 |
| 第27表 | 第28号住居跡出土遺物観察表 | 83 | 第63表 | 土壙一覧表 | 214 |
| 第28表 | 第29号住居跡出土遺物観察表 | 86 | 第64表 | 土師器焼成壙一覧表 | 218 |
| 第29表 | 第30号住居跡出土遺物観察表 | 89 | 第65表 | 土壙出土遺物観察表 | 219 |
| 第30表 | 第31号住居跡出土遺物観察表 | 91 | 第66表 | 溝跡出土遺物観察表 | 229 |
| 第31表 | 第32号住居跡出土遺物観察表 | 92 | 第67表 | ピット出土遺物観察表 | 234 |
| 第32表 | 第33号住居跡出土遺物観察表 | 94 | 第68表 | グリッドピット一覧表 | 235 |
| 第33表 | 第34号住居跡出土遺物観察表 | 98 | 第69表 | グリッド出土遺物観察表 | 239 |
| 第34表 | 第35号住居跡出土遺物観察表 | 99 | 第70表 | 表採遺物観察表 | 239 |
| 第35表 | 第36号住居跡出土遺物観察表 | 106 | 第71表 | 写真図版遺物番号対応表 | 卷末 |
| 第36表 | 第37号住居跡出土遺物観察表 | 111 | | | |

写真図版目次

| | | |
|--------|---|--|
| 卷頭図版 1 | 発掘区全景(空中写真合成) | 調査区全景(B区) 南から |
| 卷頭図版 2 | 遺跡遠景(南から北) C区全景(空中写真) | 図版 3 調査区全景(C区) 北から 図版 4 調査区全景(D区) 北から 図版 5 調査区全景(D区) 南から |
| 卷頭図版 3 | B区全景(南から) C区全景(北から) | 第1号住居跡 |
| 卷頭図版 4 | 第60号住居跡出土遺物 第35号住居跡出土遺物 | 第1号住居跡遺物出土状況 第1号住居跡カマド遺物出土状況 |
| 卷頭図版 5 | 第63号住居跡出土鍛冶関連遺物 焼成粘土塊(第40号土壙) 焼成粘土塊(第16号土壙) 鍛造剥片(第63号住居跡) 勾玉・耳環・帶金具・土製紡錘車 | 第2号住居跡遺物出土状況 第3・4号住居跡 第4号住居跡カマド 第5号住居跡遺物出土状況 第6号住居跡 |
| 卷頭図版 6 | 第63号住居跡遺物出土状況 第63号住居跡鍛冶炉 第18号住居跡カマド 第23号住居跡カマド 第25号住居跡カマド | 図版 6 第7号住居跡 第7号住居跡遺物出土状況 第8号住居跡遺物出土状況 第9号住居跡 第9号住居跡掘り方 |
| 卷頭図版 7 | 第37号住居跡カマド 第60号住居跡遺物出土状況 第60号住居跡カマド 第2号土壙(土師器焼成壙) 第4号土壙断面(土師器焼成壙) 第11号土壙(土師器焼成壙) 第11号土壙底面 第16号土壙(土師器焼成壙) | 第9号住居跡遺物出土状況 第9号住居跡カマド遺物出土状況 第10号住居跡 図版 7 第10号住居跡遺物出土状況 第10号住居跡第1号カマド遺物出土状況 第10号住居跡第2号カマド遺物出土状況 第11号住居跡 第11号住居跡遺物出土状況 第11号住居跡カマド遺物出土状況 |
| 卷頭図版 8 | 第16号土壙断面 第16号土壙 第16号土壙断面 第18号土壙(土師器焼成壙) 第18号土壙土層断面 第40号土壙(土師器焼成壙) 第40号土壙炭化材出土状況 第47号土壙(土師器焼成壙) | 第12号住居跡遺物出土状況 図版 8 第12号住居跡貝層出土状況 第13号住居跡 第13号住居跡遺物出土状況 第13号住居跡カマド遺物出土状況 第14号住居跡 第14号住居跡遺物出土状況 第14号住居跡カマド |
| 図版 1 | 調査区全景(A区) 北から 調査区全景(A区) 南から | 第14号住居跡カマド 第15号住居跡 |
| 図版 2 | 調査区全景(B区) 北から | 図版 9 第16号住居跡遺物出土状況 |

| | | | |
|------|--|------|--|
| 図版10 | 第16号住居跡カマド 第17号住居跡 第17号住居跡遺物出土状況 第18号住居跡遺物出土状況 第18号住居跡 第18 b 号住居跡第3号カマド 第18 a 号住居跡第1号カマド 第19号住居跡 第19号住居跡遺物出土状況 第19号住居跡カマド 第20号住居跡遺物出土状況 第20号住居跡カマド • | 図版15 | 第29号住居跡カマド遺物出土状況 第29号住居跡カマド 第30号住居跡 第30号住居跡遺物出土状況 第31号住居跡 第31号住居跡遺物出土状況 第31号住居跡遺物出土状況 第32号住居跡遺物出土状況 第33号住居跡遺物出土状況 第33号住居跡カマド遺物出土状況 第34号住居跡遺物出土状況 第34号住居跡遺物出土状況 第35号住居跡遺物出土状況 第36号住居跡 第36 a 号住居跡 第37号住居跡 図版16 |
| 図版11 | 第21号住居跡 第21号住居跡第1号カマド 第22号住居跡 第22・23号住居跡 第22・23号住居跡遺物出土状況 第23号住居跡 第23号住居跡カマド 第23号住居跡カマド遺物出土状況 図版12 | 図版17 | 第37号住居跡遺物出土状況 第37号住居跡カマド遺物出土状況 第38号住居跡カマド遺物出土状況 第38・39号住居跡遺物出土状況 第39号住居跡 図版18 |
| 図版13 | 第23号住居跡カマド 第24号住居跡 第24号住居跡遺物出土状況 第25号住居跡 第25号住居跡遺物出土状況 第25号住居跡カマド 第25号住居跡カマド遺物出土状況 図版19 | 図版19 | 第39号住居跡カマド遺物出土状況 第40号住居跡 第41号住居跡遺物出土状況 第42号住居跡 第43号住居跡 第43号住居跡遺物出土状況 第43号住居跡遺物出土状況 図版20 |
| 図版14 | 第26号住居跡 第26号住居跡カマド 第27 a 号住居跡 第27号住居跡 第27号住居跡遺物出土状況 第27号住居跡カマド 第28・49・51・54号住居跡 第28・54号住居跡 第29号住居跡 第29号住居跡遺物出土状況 | 図版20 | 第43号住居跡カマド 第44号住居跡 第44号住居跡掘り方 第44号住居跡遺物出土状況 第44号住居跡遺物出土状況 第44号住居跡カマド 第45号住居跡遺物出土状況 第46号住居跡 第46号住居跡遺物出土状況 第47号住居跡 |

| | | |
|------|------------------|----------------------------|
| | 第47号住居跡遺物出土状況 | 第63号住居跡鉄床石出土状況 |
| | 第47号住居跡カマド遺物出土状況 | 第63号住居跡鍛冶炉掘り方・第1号土壙 |
| 図版21 | 第48号住居跡 | 第63号住居跡鍛冶炉 |
| | 第44~48・50・53号住居跡 | 第63号住居跡第1号土壙断面 |
| | 第48号住居跡遺物出土状況 | 第63号住居跡鋸出土状況 |
| | 第49号住居跡 | 第63号住居跡遺物出土状況 |
| | 第49号住居跡遺物出土状況 | 第64号住居跡遺物出土状況 |
| | 第49号住居跡カマド | 第64号住居跡遺物出土状況 |
| | 第50号住居跡遺物出土状況 | 第65号住居跡 |
| | 第51号住居跡 | 第65号住居跡遺物出土状況 |
| 図版22 | 第51号住居跡遺物出土状況 | 第2号土壙（土師器焼成壙） |
| | 第52号住居跡 | 第4号土壙（土師器焼成壙）遺物出土状況 |
| | 第52号住居跡遺物出土状況 | 第11号土壙（土師器焼成壙） |
| | 第55号住居跡 | 第13号土壙（土師器焼成壙） |
| | 第56 b号住居跡 | 図版30 第16号土壙（土師器焼成壙） |
| | 第56号住居跡 | 第16号土壙焼土検出状況 |
| | 第56 b号住居跡遺物出土状況 | 第16号土壙焼土断ち割り |
| 図版23 | 第56号住居跡遺物出土状況 | 第18号土壙（土師器焼成壙）焼土範囲 |
| | 第57号住居跡 | 第18号土壙焼土断ち割り |
| | 第57号住居跡遺物出土状況 | 第19号土壙 |
| | 第57号住居跡カマド | 図版31 第19号土壙断面 |
| 図版24 | 第58号住居跡 | 第24号土壙遺物出土状況 |
| | 第58号住居跡遺物出土状況 | 図版31 第25号土壙断面 |
| | 第59号住居跡遺物出土状況 | 第30号土壙 |
| | 第60号住居跡 | 第31号土壙 |
| | 第60号住居跡遺物出土状況 | 第33号土壙 |
| 図版25 | 第60号住居跡遺物出土状況 | 第35号土壙 |
| | 第60号住居跡カマド遺物出土状況 | 図版32 第38号土壙 |
| 図版26 | 第60号住居跡カマド遺物出土状況 | 第39号（土師器焼成壙）土壙 |
| | 第61号住居跡遺物出土状況 | 第40号（土師器焼成壙）土壙 |
| | 第62号住居跡 | 図版32 第40号土壙（土師器焼成壙）炭化材出土状況 |
| | 第63号住居跡 | 第42号土壙 |
| | 第63号住居跡遺物出土状況 | 第46号土壙（土師器焼成壙） |
| 図版27 | 第63号住居跡遺物出土状況 | 第47号土壙（土師器焼成壙） |
| | 第63号住居跡鍛冶炉 | 図版32 第47号土壙断面 |
| | 第63号住居跡鍛冶炉断面 | 第53号土壙 |
| | 第63号住居跡鍛冶炉断ち割り | |
| 図版28 | 第63号住居跡鍛冶炉断ち割り | |

| | | | |
|------|--------------|------|-------------|
| | 第58号土壤 | 図版42 | 第25号住居跡出土遺物 |
| | 第58号土壤遺物出土状況 | | 第26号住居跡出土遺物 |
| 図版33 | 第58号土壤遺物出土状況 | | 第27号住居跡出土遺物 |
| | 第1・2号溝跡 | | 第28号住居跡出土遺物 |
| | 第2号溝跡 | | 第29号住居跡出土遺物 |
| | 第3号溝跡 | | 第32号住居跡出土遺物 |
| | 第4号溝跡 | 図版43 | 第32号住居跡出土遺物 |
| | 第5・6号溝跡 | | 第33号住居跡出土遺物 |
| 図版34 | 第7号溝跡 | | 第35号住居跡出土遺物 |
| | 第8号溝跡 | 図版44 | 第35号住居跡出土遺物 |
| | 第11号溝跡 | 図版45 | 第35号住居跡出土遺物 |
| | 第12号溝跡 | | 第37号住居跡出土遺物 |
| | 第13号溝跡 | 図版46 | 第37号住居跡出土遺物 |
| | 第15号溝跡 | | 第38号住居跡出土遺物 |
| | 第18号溝跡 | 図版47 | 第38号住居跡出土遺物 |
| 図版35 | 第1号住居跡出土遺物 | | 第39号住居跡出土遺物 |
| | 第3号住居跡出土遺物 | | 第43号住居跡出土遺物 |
| 図版36 | 第3号住居跡出土遺物 | 図版48 | 第43号住居跡出土遺物 |
| | 第3・4号住居跡出土遺物 | 図版49 | 第43号住居跡出土遺物 |
| | 第9号住居跡出土遺物 | | 第44号住居跡出土遺物 |
| | 第10号住居跡出土遺物 | 図版50 | 第44号住居跡出土遺物 |
| | 第12号住居跡出土遺物 | 図版51 | 第44号住居跡出土遺物 |
| | 第13号住居跡出土遺物 | | 第46号住居跡出土遺物 |
| 図版37 | 第10号住居跡出土遺物 | | 第47号住居跡出土遺物 |
| | 第11号住居跡出土遺物 | | 第48号住居跡出土遺物 |
| | 第13号住居跡出土遺物 | | 第49号住居跡出土遺物 |
| | 第14号住居跡出土遺物 | 図版52 | 第49号住居跡出土遺物 |
| 図版38 | 第14号住居跡出土遺物 | 図版53 | 第49号住居跡出土遺物 |
| | 第16号住居跡出土遺物 | | 第50号住居跡出土遺物 |
| | 第17号住居跡出土遺物 | | 第52号住居跡出土遺物 |
| 図版39 | 第17号住居跡出土遺物 | | 第55号住居跡出土遺物 |
| | 第18号住居跡出土遺物 | | 第56号住居跡出土遺物 |
| | 第19号住居跡出土遺物 | 図版54 | 第56号住居跡出土遺物 |
| | 第20号住居跡出土遺物 | | 第57号住居跡出土遺物 |
| 図版40 | 第20号住居跡出土遺物 | | 第58号住居跡出土遺物 |
| | 第22号住居跡出土遺物 | | 第59号住居跡出土遺物 |
| 図版41 | 第24号住居跡出土遺物 | 図版55 | 第59号住居跡出土遺物 |
| | 第25号住居跡出土遺物 | | 第60号住居跡出土遺物 |

| | | | |
|------|-------------|------|-------------|
| 図版56 | 第60号住居跡出土遺物 | 図版70 | 第52号住居跡出土遺物 |
| 図版57 | 第60号住居跡出土遺物 | | 第57号住居跡出土遺物 |
| 図版58 | 第60号住居跡出土遺物 | | 第59号住居跡出土遺物 |
| | 第61号住居跡出土遺物 | | 第60号住居跡出土遺物 |
| | 第63号住居跡出土遺物 | 図版71 | 第61号住居跡出土遺物 |
| 図版59 | 第63号住居跡出土遺物 | | 第63号住居跡出土遺物 |
| | 第65号住居跡出土遺物 | | 第64号住居跡出土遺物 |
| | 第64号土壤出土遺物 | | 第65号住居跡出土遺物 |
| 図版60 | 第1号住居跡出土遺物 | | 第4号土壤出土遺物 |
| | 第9号住居跡出土遺物 | | 表採遺物 |
| | 第12号住居跡出土遺物 | 図版72 | 第9号住居跡出土遺物 |
| | 第14号住居跡出土遺物 | 図版73 | 第10号住居跡出土遺物 |
| 図版61 | 第16号住居跡出土遺物 | | 第20号住居跡出土遺物 |
| | 第19号住居跡出土遺物 | 図版74 | 第23号住居跡出土遺物 |
| | 第22号住居跡出土遺物 | | 第27号住居跡出土遺物 |
| | 第23号住居跡出土遺物 | 図版75 | 第29号住居跡出土遺物 |
| 図版62 | 第23号住居跡出土遺物 | 図版76 | 第37号住居跡出土遺物 |
| | 第24号住居跡出土遺物 | | 第46号住居跡出土遺物 |
| | 第25号住居跡出土遺物 | | 第47号住居跡出土遺物 |
| 図版63 | 第26号住居跡出土遺物 | 図版77 | 第48号住居跡出土遺物 |
| | 第29号住居跡出土遺物 | 図版78 | 第49号住居跡出土遺物 |
| | 第30号住居跡出土遺物 | | 第57号住居跡出土遺物 |
| 図版64 | 第30号住居跡出土遺物 | | 第60号住居跡出土遺物 |
| | 第31号住居跡出土遺物 | 図版79 | 第60号住居跡出土遺物 |
| | 第34号住居跡出土遺物 | | 第58号土壤出土遺物 |
| 図版65 | 第34号住居跡出土遺物 | 図版80 | 平瓦 凸面(1) |
| 図版66 | 第34号住居跡出土遺物 | | 平瓦 凸面(2) |
| | 第35号住居跡出土遺物 | 図版81 | 鉄製品(1) |
| | 第37号住居跡出土遺物 | | 鉄製品(2) |
| 図版67 | 第37号住居跡出土遺物 | 図版82 | 鉄製品(3) |
| | 第38号住居跡出土遺物 | | 鉄製品(4) |
| | 第41号住居跡出土遺物 | 図版83 | 鉄製品(5) |
| 図版68 | 第42号住居跡出土遺物 | | 羽口(1) |
| | 第44号住居跡出土遺物 | | 羽口(2) |
| | 第47号住居跡出土遺物 | | 羽口(3) |
| | 第48号住居跡出土遺物 | | 羽口(4) |
| 図版69 | 第50号住居跡出土遺物 | 図版84 | 鉄滓(1) |
| | 第52号住居跡出土遺物 | | 鉄滓(2) |

| | | |
|------|--------|----------|
| | 鉄滓 (3) | 耳環 |
| | 鉄滓 (4) | 取瓶 |
| | 鉄滓 (5) | 墨書き土器 |
| | 鉄床石 | 石製模造品 |
| 図版85 | 土玉 (1) | 石製品 (1) |
| | 土玉 (2) | 石製品 (2) |
| 図版86 | 土玉 (3) | 石製品 (3) |
| | 土錘 | 石製品 (4) |
| 図版87 | 中・近世遺物 | ヘラ記号 |
| | 砥石 | イシガイ |
| 図版88 | 紡錘車 | 縄文土器 (1) |
| | 丸玉 | 縄文土器 (2) |
| | 勾玉 | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

昭和47年以降の東北縦貫自動車道の開通により、一般国道122号線の交通量は一段と増加し、特に蓮田市内においては市の中心部を通過することから渋滞が著しく、交通量緩和の対策が要望されていた。

埼玉県では、このような状況に対処するため、一般国道122号蓮田岩槻バイパスの建設を計画した。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね調整を図ってきたところである。

昭和50年10月29日付け道建第543号をもって「一般国道122号（蓮田市）建設予定地内の埋蔵文化財の所在について」、道路建設課長（当時）から文化財保護課長（当時）へ照会がなされた。文化財保護課では遺跡地図と照会した結果、昭和51年2月4日付け教文第960号をもって概ね下記のとおり回答した。

①建設予定地内には現在7箇所の周知の遺跡が所在する。

②詳細については、さらに現地踏査を実施する必要があること。

その後、文化財保護課と道路建設課では現地確認を含めた調査を行なながら、これらの遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、路線変更が困難であるためにやむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決定した。

この決定を受けて、道路建設課長から昭和54年4月19日付け、道建第120号をもって「一般国道122号（蓮田市地内）道路改良事業区域内における埋蔵文化財発掘調査について」協議がなされた。文化財保護課では、昭和54年10月1日付け教文第704号により、調査の期間、範囲、経費と文化財保護課が直営で実施することを回答した。

法定手続きを終了した後、昭和54年11月から調

査着手が可能な地点から順次発掘調査を実施した。また昭和55年度からは、増大する公共事業に対処するため設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査が引き継がれた。

本書で報告する調査箇所の埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成12年5月10日付け道建第054号で、道路建設課長より文化財保護課長あてに照会があった。文化財保護課では状況が整った箇所から順次確認調査を実施し、その結果をもとに平成13年7月16日付け教文第580号で次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

| 名称(No.) | 種別 | 時代 | 所在地 |
|----------------------|-----|------------------|----------------|
| 荒川附遺跡 (No.82-020) | 集落跡 | 旧石器・縄文 ・奈良・平安 | 蓮田市関山 3・4丁目 |

2 取扱いについて

埋蔵文化財が所在する範囲について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には記録保存のための発掘調査を実施すること。

文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事土屋義彦から平成14年2月20日付け道街第856号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成14年2月28日付け教文第3-1031号で行った。また、文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知は以下のとおりである。

平成14年3月8日付け教文第2-123号
(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

荒川附遺跡第20次調査は、平成14年3月1日から平成15年1月31日まで実施した。調査面積は6310m²である。発掘調査は工事施工の関係で4分割して実施した（調査順にA区～D区と仮称した）。

A区は調査区北西寄りの部分で、調査面積1110m²である。A区の調査は平成14年3月1日～平成14年5月10日まで実施した。3月、事務手続きと事務所設置を終え、囲柵工事ならびに表土掘削を実施した。4月、遺構確認、基準点測量を行い、調査に取り掛かった。狭長な調査区ながら15軒の竪穴住居跡他の遺構が検出された。遺構の掘り下げ、土層断面図・平面図等の作成、遺構の写真撮影等の記録を保存した。また、航空写真撮影後埋戻しを行い5月10日までにA区の発掘調査は終了した。

B区は調査区南西部に相当する。調査面積は1590m²である。調査は平成14年4月22日～平成14年6月30日まで実施した。A区調査中の4月下旬から5月上旬にかけて表土掘削を行い、その後、基準点測量を経て調査を開始した。調査区南端部は低地に移行するため、遺構は少ないと予想されていたが、調査の結果、集落が連続することが判明した。この谷部は湧水が激しく、調査は難航した。

古墳時代中期～平安時代の竪穴住居跡25軒、土器焼成壙9基等多数の遺構と遺物が検出され、急ピ

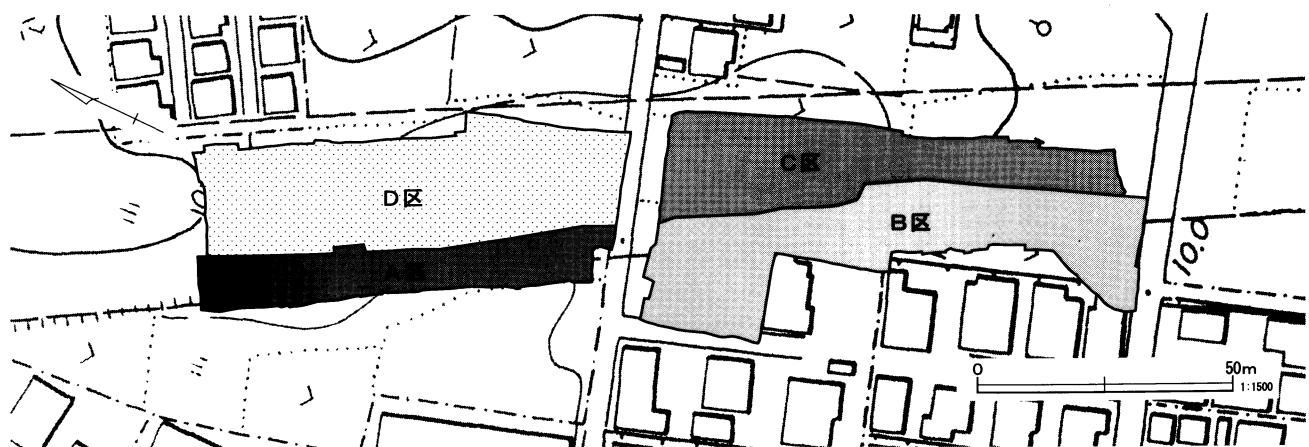
ッヂで調査を進めた。6月22日（日）、現地説明会を開催し、調査成果を一般市民の方々に公開した。

平面図・断面図、写真撮影、航空写真撮影等必要な調査記録を作成した。6月下旬埋戻し作業を完了し、調査を終了した。

C区は調査区南東部に相当する位置にある。調査面積は1690m²、平成14年6月24日～平成14年10月31日まで調査を実施した。6月下旬～7月、囲柵作業を行い、表土掘削、遺構確認作業に取り掛かる。調査は調査区北側の平坦地を中心に行なった。8月から9月、順次谷部の調査に移行した。最深部では地表面下3mにも達し、湧水が激しくB区同様調査は難航した。古墳時代～奈良時代の竪穴住居跡18軒（B区と同一遺構4軒含む）、土器焼成壙4基等が発見された。10月、航空写真撮影と埋戻し作業を終えて調査は完了した。

D区は調査区北東部に相当する一角である。D区の調査は平成14年10月28日～平成15年1月31日まで実施した。調査面積は1920m²である。

10月下旬～11月、囲柵作業と表土掘削・基準点測量を実施し、引き続き調査に取り掛かった。竪穴住居跡12軒、土壙15基などが発見された。特に、鍛冶工房の発見は注目される成果である。調査記録を作成し、平成15年1月9日航空写真を撮影した。



第1図 調査区分割図

その後、埋戻し作業や事務所の撤収などを行い荒川附遺跡第20次調査は全て終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理報告書作成事業は、平成18年4月10日～平成19年3月23日まで実施した。遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。

接合後、遺物実測を実施した。甕・壺などの大型品、暗文など複雑な文様が施された土器を中心に機械実測（3スペース）を利用し素図を作成した。この素図をもとに実測図を完成させた。実測図は製図ペンで墨入れ（トレース）し、必要に応じて拓影を採った。実測図と拓影図を組み合わせてレイアウトし、遺物図版の版下を作成した。

遺構図面は図面整理と修正を経て第2原図を作成した。第2原図はスキャナーでコンピューターに取

り込んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレース・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に復元作業を実施し、写真撮影を実施した。調査時に撮影した写真を選択し、遺物写真とともに焼き付け、トリミング指示などを行い、写真図版を作成した。

これらのデータを基に原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。

印刷業者の決定、原稿・版下等の入稿後、3回の校正を経て3月下旬報告書を刊行した。図面類・写真類・遺物は整理分類して、収納作業を実施した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成13年度（発掘調査）

| | | |
|-----------|-------|---------------|
| 理事長 | 中野 健一 | 調査部 |
| 常務理事兼管理部長 | 大館 健 | 調査部長 |
| 管理部 | | 調査部副部長 |
| 管理幹 | 持田 紀男 | 主席調査員（調査第二担当） |
| | | 昼間 孝志 |

平成14年度（発掘調査）

| | | |
|-----------|-------|---------------|
| 理事長 | 桐川 卓雄 | 調査部 |
| 常務理事兼管理部長 | 大館 健 | 調査部長 |
| 管理部 | | 調査部副部長 |
| 管理幹 | 持田 紀男 | 主席調査員（調査第二担当） |
| | | 統括調査員 |
| | | 調査員 |

平成18年度（整理・報告書刊行）

| | | |
|-----------|-------|-----------|
| 理事長 | 福田 陽充 | 調査部 |
| 常務理事兼総務部長 | 岸本 洋一 | 調査部長 |
| 総務部 | | 調査部副部長 |
| 総務部副部長 | 昼間 孝志 | 兼資料活用部副部長 |
| 総務課長 | 高橋 義和 | 整理第二課長 |
| | | 今泉 泰之 |
| | | 小野 美代子 |
| | | 富田 和夫 |

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

荒川附遺跡は埼玉県東部の蓮田市関山3丁目から4丁目に所在する。JR宇都宮線蓮田駅からは北約1kmの位置にある。

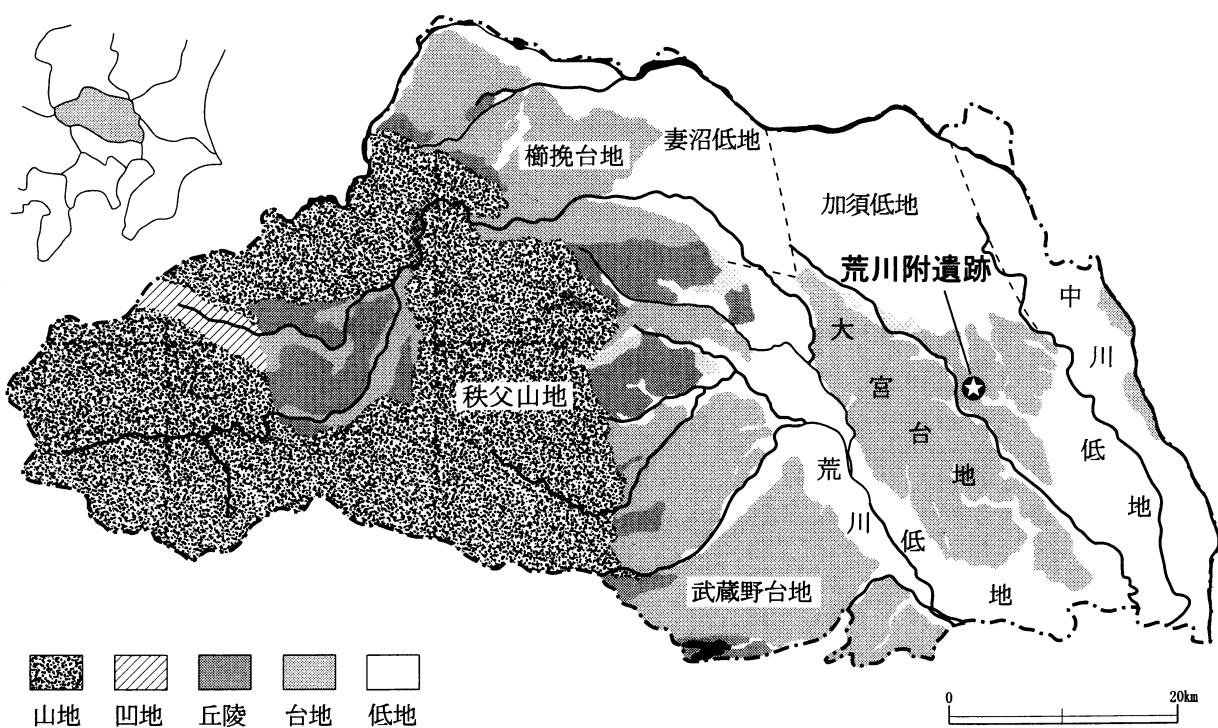
荒川附遺跡の立地する大宮台地は関東平野の中央に位置し、中川低地によって下総台地と隔てられ、さらに荒川低地によって武藏野台地と区分されている（第2図）。

大宮台地は北西—南東方向に伸びる台地で、全体的には約8万年前以降に利根川—荒川水系によって形成された、いわゆる武藏野面に対比される。大宮台地は中央部を北西—南東方向に流れる星川～綾瀬川を境として、南西側の連続した台地と、北東側の散在する台地群に区分される。南西側は2つに、北東側は4つの支台に分けられる。

荒川附遺跡は北東側の支台群のうちの一つである、蓮田支台に立地している。蓮田支台は岩槻支台と連

続するため、蓮田岩槻支台とも呼ばれる細長い台地で、東を元荒川、西を綾瀬川に挟まれる。蓮田市高虫付近から始まり、井沼、閑戸を経て蓮田駅付近まで続く。標高は13～16m程度でおよそ平坦である。蓮田駅からさいたま市平林寺付近の間で台地は急に狭く低くなり、ここを境に南を岩槻支台と呼称している。台地はさいたま市尾ヶ崎付近まで延びる。荒川附遺跡は蓮田支台の南東端に位置している。

荒川附遺跡は元荒川に面する台地縁辺に立地し、元荒川までは直線距離で100m程度である。遺跡は標高13mの台地上に位置するが、地形的には元荒川へ向かって下る緩やかな斜面地である。遺跡範囲の東端がほぼ段丘崖と重なり、遺跡南東は標高9mの元荒川の低地域にまで及ぶことが判明している。遺跡全体の比高差は4m以上認められ、元荒川を意識して遺跡が形成されたことが窺える。



第2図 遺跡の位置と埼玉県の地形

2. 歴史的環境

荒川附遺跡(1)の位置する蓮田台地周辺には、旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡が残されている。旧石器は荒川附遺跡のほか宿浦遺跡(30)で礫群、天神前遺跡(32)、伊奈町の大山遺跡(18)で石器集中区が確認されている。

縄文時代に入ると、草創期～早期の遺跡が急激にその数を増し、馬込新屋敷遺跡(5)、馬込大原遺跡(6)、宿下遺跡(31)、天神前遺跡などで早期後半の炉穴が検出されている。前期は海進の影響により関山貝塚(23)、黒浜貝塚(29)などの貝塚が発達したほか、帆立遺跡(4)、椿山遺跡(28)、宿上遺跡(7)、宿下遺跡、天神前遺跡、十二番耕地遺跡(19)が台地縁辺を主に分布する。中期の遺跡は台地上にさらに広がり、代表的なものでは馬込八番遺跡(26)、宿下遺跡、椿山遺跡において住居跡が検出されている。

後晩期では南に位置する久台遺跡(3)、さら遺跡(25)をはじめとして、大宮台地南東部に遺跡の集中することが知られている。八幡溜遺跡(27)のほか、さいたま市真福寺貝塚、裏慈恩寺遺跡などがある。久台遺跡や正福院貝塚(56)は、雅楽谷遺跡(8)で見つかったものと同種の環状盛土遺構の存在が指摘されている。

弥生時代前期に遡る遺跡は今のところ発見例はない。弥生時代中期の遺跡は元荒川・綾瀬川に面した台地縁辺に、遺跡が点々と形成された状況が窺われる。蓮田市内では宿下遺跡から須和田期後半の再葬墓が2基発見され、副葬品として管玉が出土した。また、さいたま市岩槻区南遺跡(横川他1971)や諏訪山遺跡(横川他前掲書)から須和田期の土器が発見されている。中期後半(宮ノ台期)には馬込遺跡(40)、掛貝塚(53)が元荒川沿いに、平林寺遺跡(41)、西原遺跡(49)が綾瀬川流域に分布し、馬込・掛貝塚・西原遺跡では集落の一部が発見されているが、集落規模は小規模に留まっていたようだ。

弥生後期前半段階の遺跡様相は不明確である。周辺地域で遺跡が増加するのは後期後半以降で、とく

に後期終末～古墳時代初頭頃大宮台地上に多数の集落が営まれるようになり、蓮田市内では椿山遺跡(29)、さら遺跡、馬込八番遺跡、馬込新屋敷遺跡、馬込大原遺跡、宿上遺跡(7)等で集落が、久台遺跡からは方形周溝墓が検出されている(註1)。その他、さいたま市平林寺遺跡、木曾良遺跡、吉野原遺跡(63)、高台山遺跡(48)、伊奈町薬師堂根遺跡(11)、戸崎前遺跡(12)、大山遺跡(18)、上尾市三番耕地遺跡(20)、尾山台遺跡(44)などが調査されており、広範に集落が展開した様子が窺われる。この時期は外来系土器が搬入されたり、その影響を強く受けた土器が作られるのが特徴で、蓮田市さら遺跡と馬込八番遺跡からは手焙(てあぶり)形土器、さいたま市岩槻区の平林寺遺跡からは東海西部地方の影響を受けた壺や畿内周辺の叩き技法を持つ甕が出土している。また、さいたま市岩槻区の木曾良遺跡は集落を取り巻く溝(堀)が発見され、「環濠集落」として著名である(村田他1998)。

古墳時代中期には遺跡数が激減する。蓮田市閨戸吹上遺跡で住居跡1軒、白岡町神山遺跡(9)から和泉期の住居跡が2軒検出された他には、荒川附遺跡で集落が検出されている程度である。伊奈町大山遺跡からは和泉期の住居跡が検出されている。荒川附遺跡と元荒川を挟んだ対岸の椿山遺跡からは、5世紀末を前後する中期古墳4基と後期古墳1基が調査された。

古墳時代後期では荒川附遺跡が中核的な集落で、6世紀前半以降、平安時代に至るまで連綿と集落が維持される。他にはさら遺跡で住居跡1軒、殿の下遺跡(36)から住居跡3軒、白岡町神山遺跡から7世紀前半の住居跡が2軒検出されている。綾瀬川流域でも非常に少なく、伊奈町大山遺跡で住居跡が9軒発見された程度である。

後期古墳としては荒川附遺跡北方に十三塚古墳(22)が位置する。直径24mの円墳で凝灰質砂岩切石積みの横穴式石室を備え、蓮田地域における7世



周辺遺跡一覧表

| | | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------------|--------------|-------------|
| 1 荒川附遺跡 | 13 原遺跡 | 25 さら遺跡 | 37 御殿場遺跡 | 49 西原遺跡 | 61 谷津下 I 遺跡 |
| 2 堂山公園遺跡 | 14 北遺跡 | 26 馬込八番遺跡 | 38 宮の前遺跡 | 50 黒浜新井遺跡 | 62 八番耕地遺跡 |
| 3 久台遺跡 | 15 丸山遺跡 | 27 八幡溜遺跡 | 39 黒浜堀ノ内遺跡 | 51 寺前平方遺跡 | 63 吉野原遺跡 |
| 4 帆立遺跡 | 16 赤羽遺跡 | 28 椿山遺跡 | 40 馬込遺跡 | 52 笹山遺跡 | 53 掛貝塚 |
| 5 馬込新屋敷遺跡 | 17 伊奈氏屋敷跡 | 29 黒浜貝塚 | 41 平林寺遺跡 | 54 不動山貝塚 | 55 タタラ山遺跡 |
| 6 馬込大原遺跡 | 18 大山遺跡 | 30 宿浦遺跡 | 42 愛宕山遺跡 | 56 正福院貝塚 | 57 綾瀬遺跡 |
| 7 宿上遺跡 | 19 十二番耕地遺跡 | 31 宿下遺跡 | 43 秩父山遺跡 | 58 上閨戸(栗崎)貝塚 | 59 小貝戸貝塚 |
| 8 雅楽谷遺跡 | 20 三番耕地遺跡 | 32 天神前遺跡 | 44 尾山台遺跡 | 60 大針貝塚 | |
| 9 神山遺跡 | 21 御林遺跡 | 33 黒浜耕地遺跡 | 45 宿前 I 遺跡 | | |
| 10 閨戸足利遺跡 | 22 十三塚古墳 | 34 江ヶ崎貝塚 | 46 二十一番耕地遺跡 | | |
| 11 薬師堂根遺跡 | 23 関山貝塚 | 35 閨戸吹上遺跡 | 47 二十一番 II 耕地遺跡 | | |
| 12 戸崎前遺跡 | 24 坂堂貝塚 | 36 殿の下遺跡 | 48 高台山遺跡 | | |

第3図 周辺遺跡分布図

紀前半の代表的な古墳である。元荒川対岸の椿山古墳群には前述したように後期（6世紀後半）に降る古墳が1基確認されている。また、元荒川右岸のさら遺跡からは3基の円墳が調査されている。1・3号墳は凝灰質砂岩切石積みの横穴式石室がつくられており、7世紀の築造と推定される。集落の動向と軌を一にするともいえるが、周辺地域に有力な群集墳はない。元荒川下流域ではさいたま市岩槻区につかのこし古墳と竹たば古墳が存在したことが知られており（岩槻市 1983）、元荒川を上流に辿ると、菖蒲町神ノ木Ⅱ遺跡で古墳時代中期～後期にかけての古墳群が調査されている（註2）。

奈良・平安時代に入ると集落は増加する。元荒川流域では荒川附遺跡が最大規模で、古墳時代以来の中核集落であることは疑いない。荒川附遺跡は奈良時代が主体で、平安時代にはやや集落が衰退するようだ。9世紀後半に至ると、対岸の椿山遺跡に主体が移るように見受けられる。椿山遺跡は現在までに平安時代の住居跡76軒、掘立柱建物跡1棟、製鉄関連の生産跡23基、土壙12基が調査されている（田中他 2005）。遺跡の中心時期は9世紀後半～10世紀にかけてである。御林遺跡（21）は事実上椿山遺跡の一部で、平安時代の住居跡が5軒調査され、「武藏」銘の紡錘車が出土している。御殿場遺跡（37）も御林遺跡同様、椿山遺跡に隣接する遺跡で、9世紀後半の住居跡1軒が調査された。元荒川左岸の白岡町タカラ山遺跡（55）や中妻遺跡からは鉄滓や羽口が出土している。志辺遺跡からは須恵器片とともに多量の鉄滓が採集されるという。また、白岡町山遺跡からは古代の炭焼き窯が発見されるなど、タカラ山遺跡周辺は、椿山遺跡同様古代の一大製鉄関連遺跡群の存在が予想される（註3）。元荒川右岸では宮ノ前遺跡（38）、久台遺跡、さら遺跡から住居跡が検出され、荒川附遺跡以外は小規模な集落が点々と形成されたようである。下流のさいたま市岩槻区では、府内三丁目遺跡（青木 2002）があり、

9～10世紀の集落が調査されている。

綾瀬川支流の原市沼川流域に目を転じると、伊奈町大山遺跡、薬師堂根遺跡（11）、戸崎前遺跡（12）、向原遺跡（橋本 2000）、丸山遺跡（15）、赤羽遺跡（16）、上尾市秩父山遺跡（43）、宿前I遺跡（45）などで該期の集落が検出されている。これらの中でも戸崎前遺跡と大山遺跡が中心的な集落と考えられ、8世紀前半から中頃以降集落が形成される。大山遺跡では9世紀から10世紀にかけて操業したと推定される4群20基の製鉄炉（豎形炉）とそれに伴う炭焼き窯、工房跡、多数の住居跡が調査されており、鉄生産に特化した手工業生産遺跡として注目される。

中世以降では、岩槻城をはじめ、多数の城館跡が築城されている。荒川附遺跡北方に位置する閨戸足利遺跡（10）がある。同遺跡からは掘立柱建物跡13棟、井戸跡13基、溝跡34条、土壙4基などが検出され、中世後期～近世にかけての館跡と考えられている。市内には中世～近世初頭と推測される黒浜堀の内遺跡があり、館跡に伴う土壙が残る（田中他 1999）。隣接する黒浜耕地遺跡（33）や宿下遺跡から館に関連するであろう溝跡が調査されている。また、江ヶ崎貝塚（34）に隣接する江ヶ崎城跡は鎌倉時代末～室町期の城館跡といわれ、発掘調査の結果東西60m、南北67m、土壙と内郭をもつことが判明したという（蓮田市 2002）。さら遺跡や久台遺跡では区画溝と建物跡が検出され「屋敷」の存在示すものとされている（木戸 1984）、帆立遺跡（4）、馬込新屋敷遺跡（5）、馬込大原遺跡からは溝跡や土壙が検出され、陶磁器や板碑などが出土した。

綾瀬川水系では、戸崎前遺跡、薬師堂根遺跡、相野谷遺跡、伊奈氏屋敷跡、東町二丁目遺跡、大山遺跡などから中・近世の遺構と遺物が発見されている。戸崎前遺跡からは一辺70mの堀跡が、薬師堂根遺跡からは区画溝を伴う建物跡・墓壙などが発見された。戸崎前遺跡からは近世末期の地下式壙が発見され、多量の陶磁器が出土した。

註

註1 本年度報告予定（事業団報告書第339集）。

註2 本年度当事業団で調査を実施した。

註3 白岡町教育委員会 奥野麦生氏に御教示いただいた。

引用・参考文献

- 青木文彦 2002 『府内三丁目遺跡Ⅰ』埼玉県岩槻市遺跡調査会
新屋雅明 1995 『堂山公園・久台』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第168集
岩槻市 1983 『岩槻市史』考古資料編
大塚孝司 1984 『江ヶ崎貝塚、荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書第6集
大塚孝司 1988 『椿山遺跡－5次調査－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第12集
大塚孝司 1992 『帆立山遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第18集
柿沼幹夫・関 義則2001「岩槻市域における弥生時代の遺跡と土器」『木曾良・上野六丁目・西原・村国道下』岩槻市文化財調査報告書第22集 岩槻市教育委員会
金子直行 1982 『大山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第17集
金子直行他 1987 『宿上貝塚・御林遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第16集
木戸春夫 1984 『閏戸足利』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第40集
木戸春夫 1992 『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第112集
小宮雪晴 1998 『宿下遺跡－第20調査地点－宿上遺跡－第12調査地点－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第32集
庄野靖寿 1974 『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第3集
田中和之 1991 『天神前遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集 蓼田市教育委員会
田中和之・小宮雪晴 1999 『十三塚古墳 黒浜耕地遺跡－第1調査地点－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第33集
田中和之・小宮雪晴 2004 『宿上遺跡－第14調査地点－県指定史跡黒浜貝塚－詳細確認調査（3）－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第38集
田中和之・小宮雪晴 2005 『椿山遺跡－第6調査地点－－第7調査地点－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第41集
田中和之・小宮雪晴 2006 『県指定史跡黒浜貝塚 椿山遺跡-詳細確認調査総合報告書-』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第42集
寺内正明・田中和之 1991 『宿上遺跡－第2地点－宿下遺跡－第12地点－天神前遺跡－第19地点－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第16集
寺内正明 1994 『ささら遺跡－第3調査地点－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第22集
寺内正明 1994 『殿の下遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第23集
寺内正明 1994 『馬込八番遺跡－第5調査地点－』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第24集
野中松夫 1981 『的場 八番 荒川附遺跡』蓮田市文化財調査報告書 第2集 蓼田市教育委員会
野中松夫 1982 『馬込七番第1・第2遺跡』蓮田市文化財調査報告書 第3集 蓼田市教育委員会
橋本 勉 1984 『久台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第36集
橋本 勉 1985 『ささら（II）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第47集
橋本 勉 1990 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第93集
橋本 勉 2000 『向原・相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第233集
蓮田市 1999 『蓮田市史』考古資料編Ⅱ古代・中世資料編 蓼田市教育委員会
蓮田市 2002 『蓮田市史』通史編 蓼田市教育委員会
藤原高志 1983 『さらら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集
村田健二他 1998 『木曾良遺跡の研究』（1）－弥生時代の環濠集落を中心に－』『研究紀要』第14号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
横川好富 1971 『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査報告第8集 埼玉県遺跡調査会
横川好富 1972 『加倉・西原・馬込・平林寺』東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 埼玉県遺跡調査会
渡辺清志 2005 『雅楽谷遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第307集
ここに記した以外はまとめの引用参考文献を参照願いたい。

III 遺跡の概要

荒川附遺跡は大宮台地、蓮田岩槻支台上に立地する。蓮田岩槻支台は西を綾瀬川、東を元荒川によって開析された南北に伸びる狭長な台地で、遺跡は元荒川に向かって下る緩斜面に位置する。遺跡の標高は9.5m～13.5m前後、元荒川河道まで約100mである。微地形を観察すると、遺跡の南側の新荒川橋から蓮田中央小学校付近には元荒川から入り江状に入り込む谷地形が形成されており、遺跡南端部では東方向と共に、谷に向かって南方向にも傾斜している。最近の蓮田市教育委員会の調査成果や、当事業団による県道上尾蓮田線関係の調査によって、元荒川及び谷地形に移行する斜面低地部にも遺構が濃密に分布することが判明しつつあり、元荒川の存在が遺跡の形成に大きな役割を果たしていたと想定することができる。

第4図には今回の調査区内6箇所に設定した旧石器の確認調査区（A～F区）の土層を示した。上面は遺構確認面で、ほぼソフトローム層に対応する。A～C区はほぼ平坦であるが、D～F区に掛けて南から北、西から東に向かって急激に下方傾斜していることがわかる。第4図第2層はソフトローム層、第3・4層はハードローム層と考えられる。

第5層はB.B.I（第1黒色帯）、第6・7層は第1黒色帯と第2黒色帯に対比されよう。第8層はいわゆる水付きロームと考えられ、立川ローム第X層対応層と推定される。ちなみに、旧石器時代の石器群は検出されなかった。

過去、荒川附遺跡の発掘調査は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と蓮田市教育委員会・蓮田市遺跡調査会の三者によって実施してきた。

蓮田市教育委員会・蓮田市遺跡調査会の調査は平成18年度までに19次にわたって実施された。堅穴住居跡111軒の他、土壙、溝跡など多数の遺構が検出されている（註1）。

当事業団の調査は昭和58年度・昭和62年度・平

成元年度の3ヵ年、一般国道122号蓮田岩槻バイパス予定地の県道大宮・栗橋線を挟んだ南北の地域を対象に断続的に実施した（事業団第1～3次調査と仮称）。その成果は平成3年度（1992年）、事業団報告書第112集「荒川附遺跡」として刊行された（木戸1992）。

堅穴住居跡97軒、堅穴状遺構2基、円形環状遺構1基、土壙65基、溝跡22条が発見され、縄文時代の住居跡1軒、古墳時代中期（和泉期）5軒、古墳時代後期（鬼高期）52軒、奈良時代11軒、平安時代1軒、時期不明28軒の住居跡が時代を違えて累々と形成されたことが判明した。その他、旧石器時代のナイフ形石器が発見されており、旧石器時代から生活の舞台として利用されていたことがわかる。

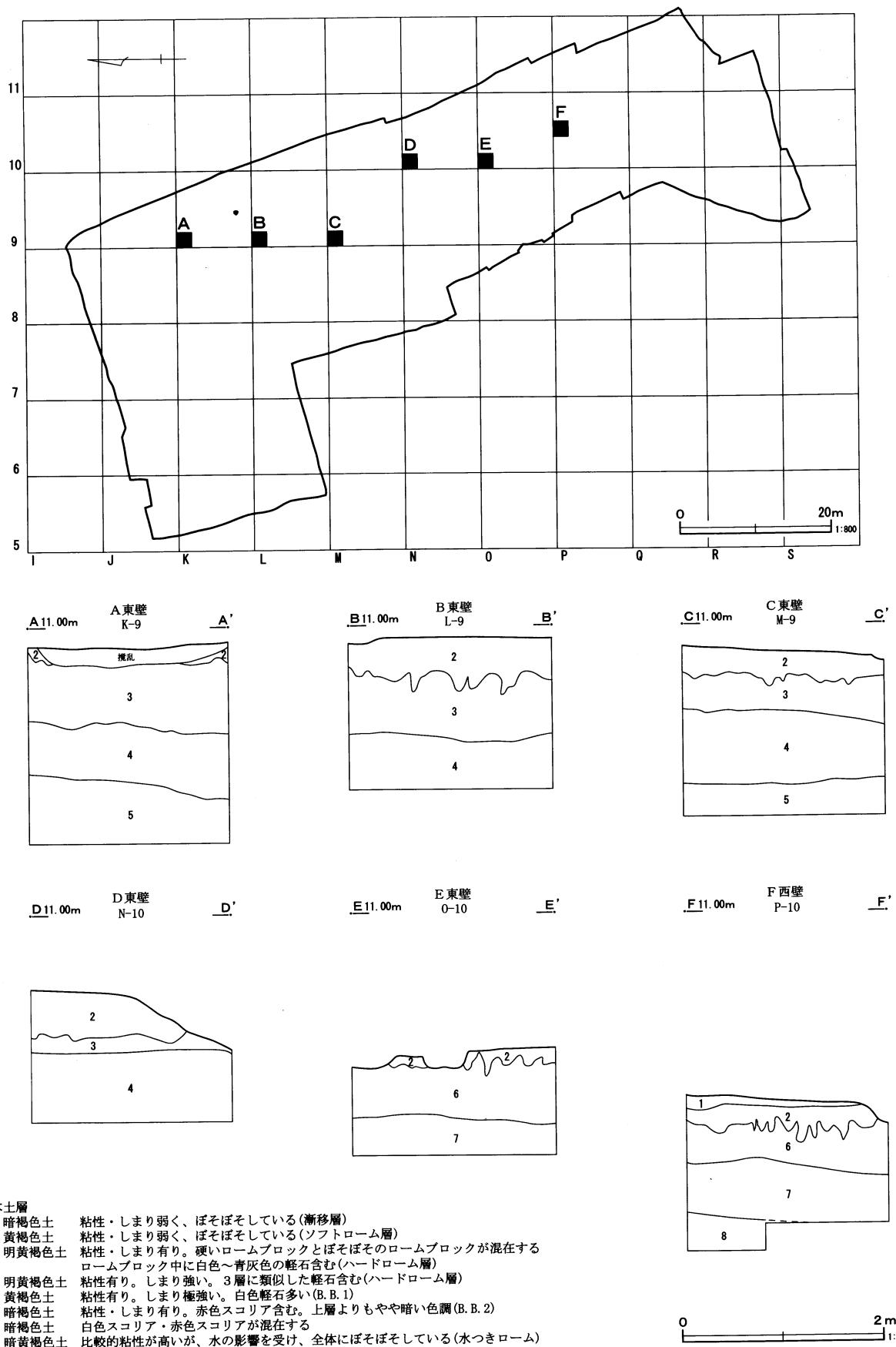
縄文時代の住居跡は晚期安行式期のものが1軒発見されているが、あまり明確なものではない。

次に生活の舞台となるのは古墳時代中期である。5世紀前半～後半頃（和泉期）の住居跡が5軒調査区中央付近に形成された。古墳時代後期、6世紀前半には県道大宮栗橋線以南のほぼ全域に拡大し、11軒の住居跡が営まれた。

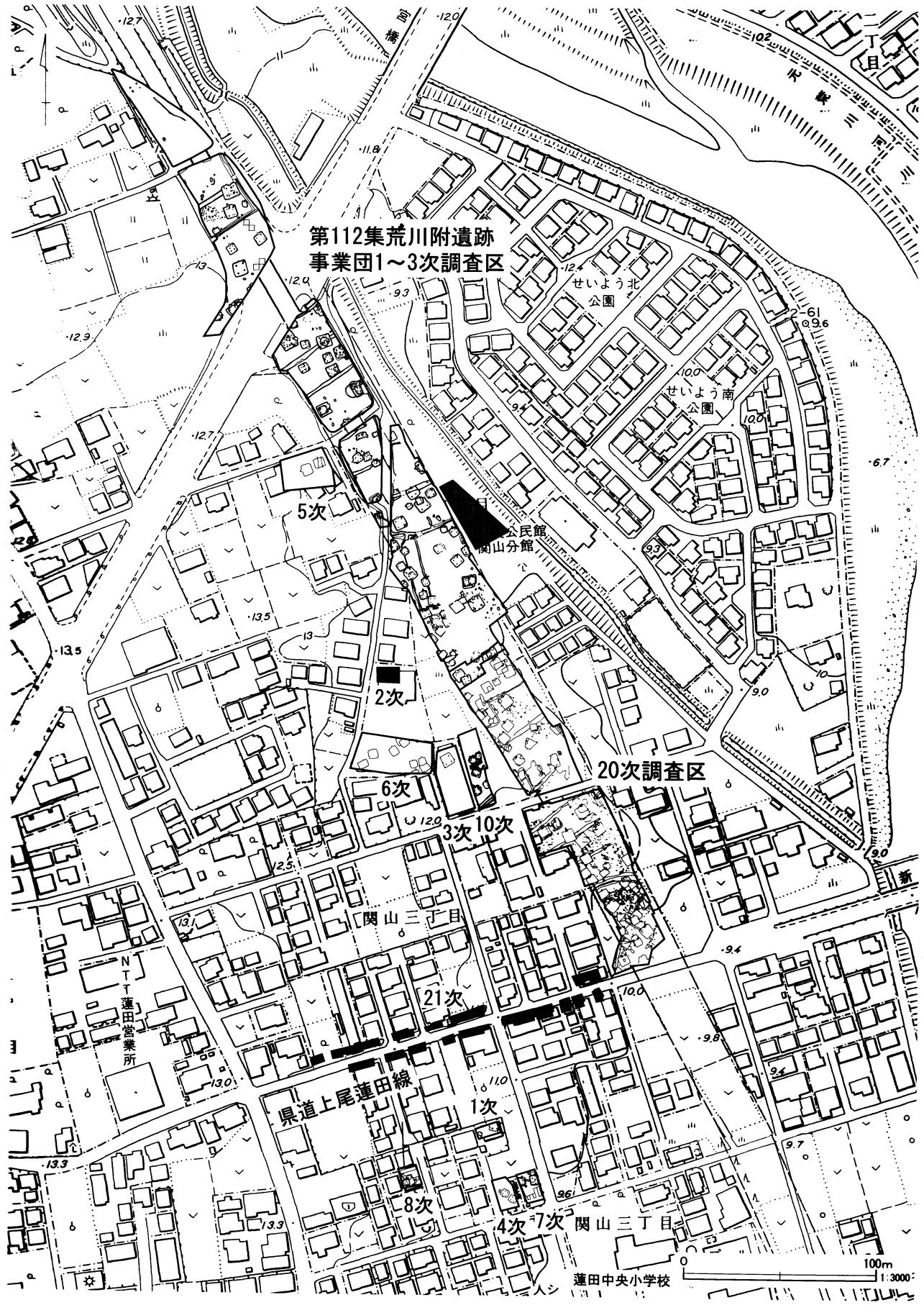
およそ7世紀前半にかけては14軒の住居跡が、7世紀後半でも27軒の住居跡が形成され、荒川附遺跡は集落のピークを迎えた。8世紀前半に11軒、8世紀後半には住居跡はなく、平安時代では9世紀中頃の住居跡が1軒検出されたのみである。

本書で報告する第20次調査は、一般国道122号蓮田岩槻バイパス建設に伴うもので、事業団第1～3次調査区の南側隣接部分、県道上尾蓮田線と交わる間を対象に実施した。調査面積6,310m²、検出された遺構は堅穴住居跡65軒、土壙62基（うち、土器焼成壙13基）、溝跡22条、井戸跡1基、道路跡1箇所、整地層1箇所である。

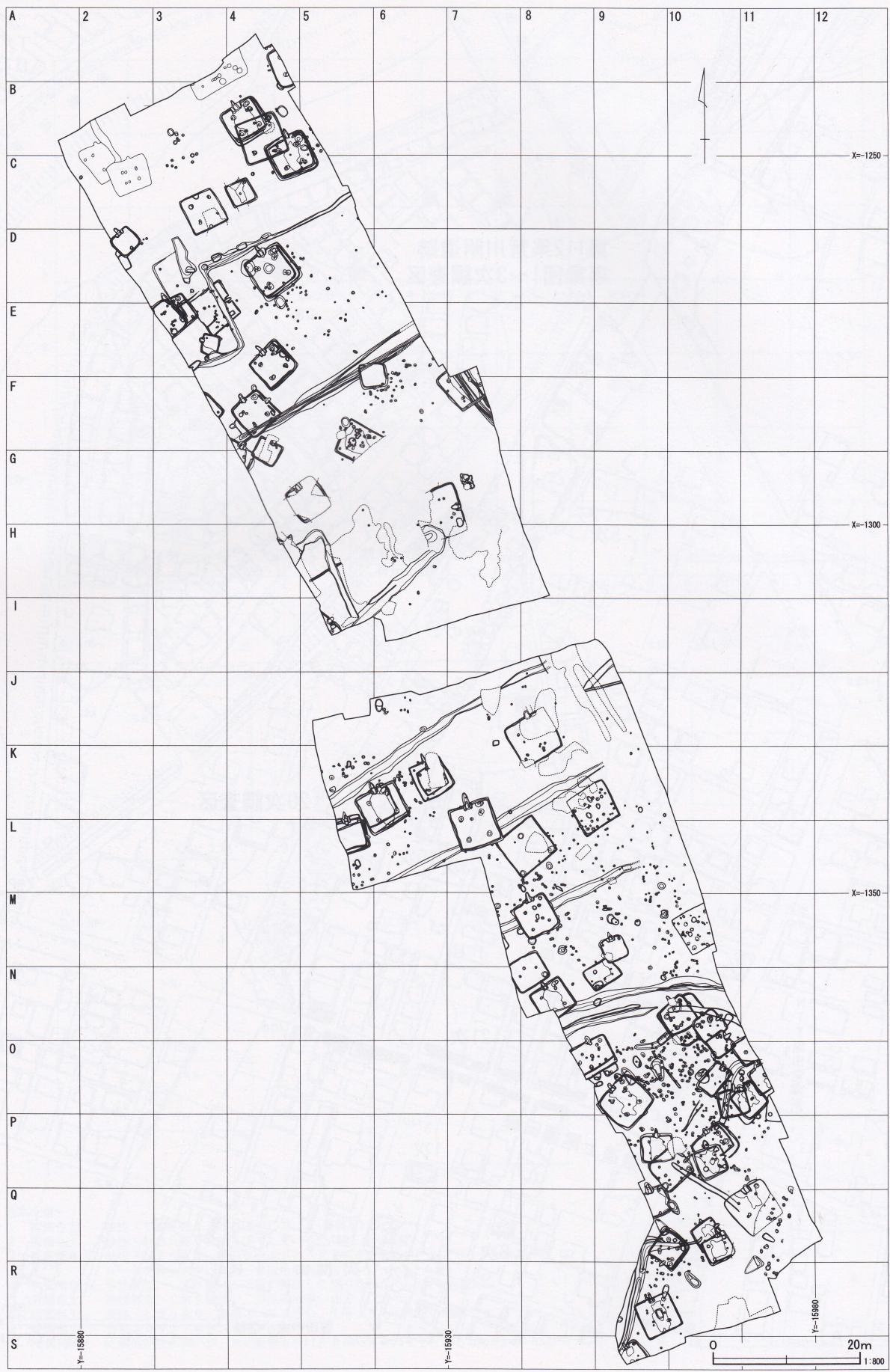
第20次調査の集落の嚆矢は古墳時代中期である。古墳時代中期和泉期の住居跡が7軒、古墳時代後期



第4図 基本層序



第5図 荒川附遺跡と周辺の地形



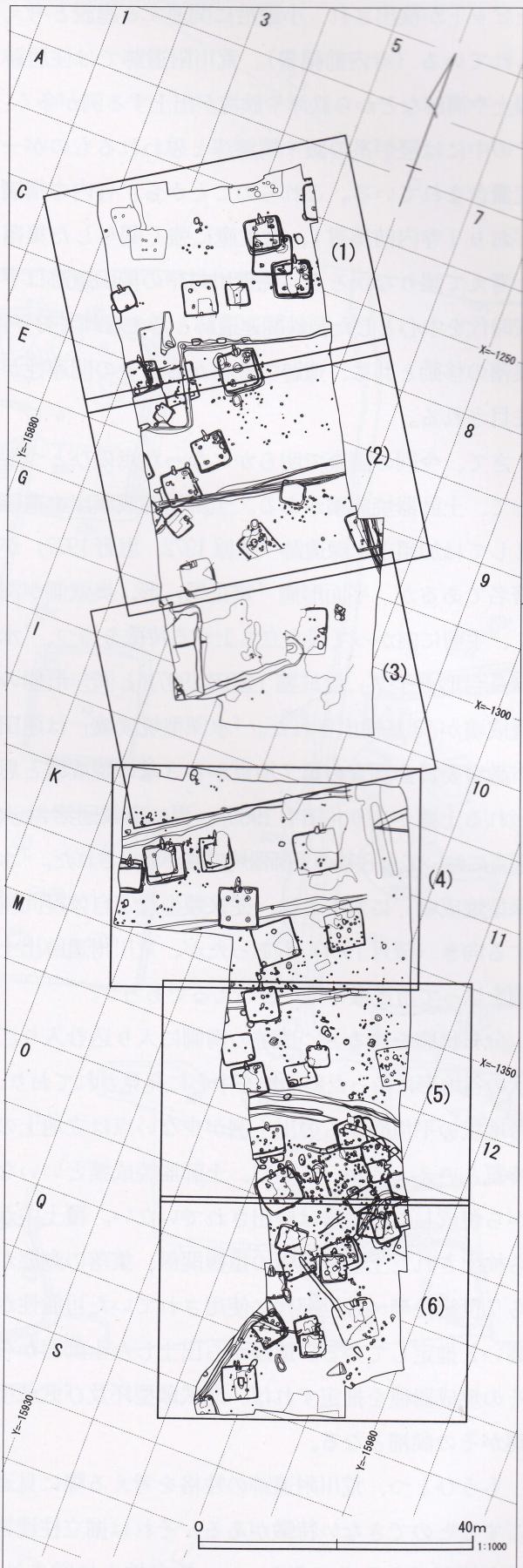
第6図 荒川附遺跡全体図

の住居跡が31軒、奈良時代の住居跡が21軒、平安時代の住居跡が2軒、時期不明4軒という内訳となる。古墳時代後期では、鬼高期初頭（6世紀前半）の住居跡が4軒、6世紀後半の住居跡が5軒、7世紀前半の住居跡が6軒、7世紀中葉～後半の住居跡が16軒である。古墳時代中期から集落が開始し、古墳時代後期に最盛期を迎える、奈良時代にやや減少、平安時代には衰退するという流れは、事業団1～3次調査と非常に良く似た動向を辿る。また、古墳時代後期といつても7世紀中頃から後半にピークがあること、奈良時代でも8世紀前半に主体があることから、集落のピークは7世紀後半～8世紀前半にかけての時期と捉える方が実態に即した言い方であろう。

確実に8世紀後半以降に位置付けられる住居跡は3軒（8世紀後半1軒、9世紀中頃～後半2軒）に留まる。こうした点から見ると、奈良時代中心の荒川附遺跡から、平安時代になると元荒川対岸の椿山遺跡に集落が移動するという見方（寺内1989）は大局的には説得力のある説といえよう。但し、第21次調査や蓮田市教育委員会調査分の中に8世紀後半段階の住居跡が含まれており、具体的な様相はそれらを踏まえた上で評価すべきかもしれない。

集落の性格を考える上で特筆すべき遺構として第63号住居跡がある。第63号住居跡は鍛冶炉と鉄床石、白色粘土貼りの土壙を備えた鍛冶工房であった。床面上には多量の鍛造剥片が散布しており、住居跡の一隅には椀形滓と鞴羽口がまとめて捨てられたかの様な状況で出土した。鉄製品（未製品）も一定量含まれ、その中には小型の鉄鋸が1点検出された。鉄鋸の出土量は比較的少なく、注目できる資料といえる。時期的には7世紀末～8世紀初頭頃と考えられる。

事業団第1～3次第81号住居跡もほぼ同時期の鍛冶工房である（木戸1992）。また、事業団調査（第21次）で鍛冶工房1軒、蓮田市教委第6次15号住居跡からも鉄塊と鉄滓に伴い、底面が被熱焼土化し



第7図 全体図区割り図

たピットが検出され、小鍛冶に関連する施設と考えられている（寺内前掲書）。荒川附遺跡では住居跡覆土や溝跡などから鉄滓や鉄塊が出土する例が多く、その中には竪炉系の製・精鍊滓と思われるものが一定量含まれている。これらのことから、寺内の指摘どおり（寺内前掲書）、鉄生産に強く関与した集落と考えて誤りなかろう。元荒川対岸の椿山遺跡は平安時代を中心とした製鉄関連遺跡と考えられており、集落の移動と共に、遺跡の性格からもその関連性が注目される。

さて、今回の調査で明らかになった点のひとつとして、土師器焼成壙がある。土師器焼成壙出土遺跡としては加須市水深遺跡（栗原 1972、塩野 1977）が著名であるが、平面形態「無花果」形、奥壁側が深く、手前に向かって浅く立ち上がる特徴を持つ、「水深長台形タイプ」焼成壙（富田 1997）と同一形態の焼成壙が13基検出された。「水深型焼成壙」は蓮田市教育委員会調査の第7地点から3基の焼成壙と思われる土壙があり（田中 1989）、更に事業団第21次調査においても3基の土師器焼成壙が検出された。「水深型焼成壙」に対しては、従来類型設定自体疑問視する向き（望月 1997）もあったが、荒川附遺跡出土例を以って市民権を得たといえるであろう。

分布状態を見ると、遺跡の南側に入り込む入り江状の谷地形に沿った斜面地を中心に発見されており、台地状の平坦面からの出土例が少ない点は立地上の特質といえようか。しかし、土師器焼成壙といいながら焼成した土師器は検出されていない。覆土中から検出された土器や遺構の重複関係、集落の動態から7世紀後半～8世紀代に使用されていた可能性が高いと推定している。遺跡から出土した土師器からその焼成器種を推定すれば、北武藏型壺及び武藏型甕がその候補となる。

もうひとつ、荒川附遺跡の性格を考える際に見過ごすことのできない特徴がある。それは掘立柱建物跡が皆無である点である。ローム台地上に営まれ、掘立柱建物跡の検出にさほどの困難性は認められず、

調査時点でも注意を払ってきたが、今のところ古代の掘立柱建物跡は1棟も検出されていない。本遺跡とほぼ同時期の7世紀後半～8世紀前半の遺構が多数検出された行田市築道下遺跡では、多数の掘立柱建物跡が発見されており、そのあり方は対照的ですらある。おそらく築道下遺跡も同じ埼玉郡に所属する遺跡である。前述したように「手工業生産」遺跡としての性格を示す現象と理解できようか。

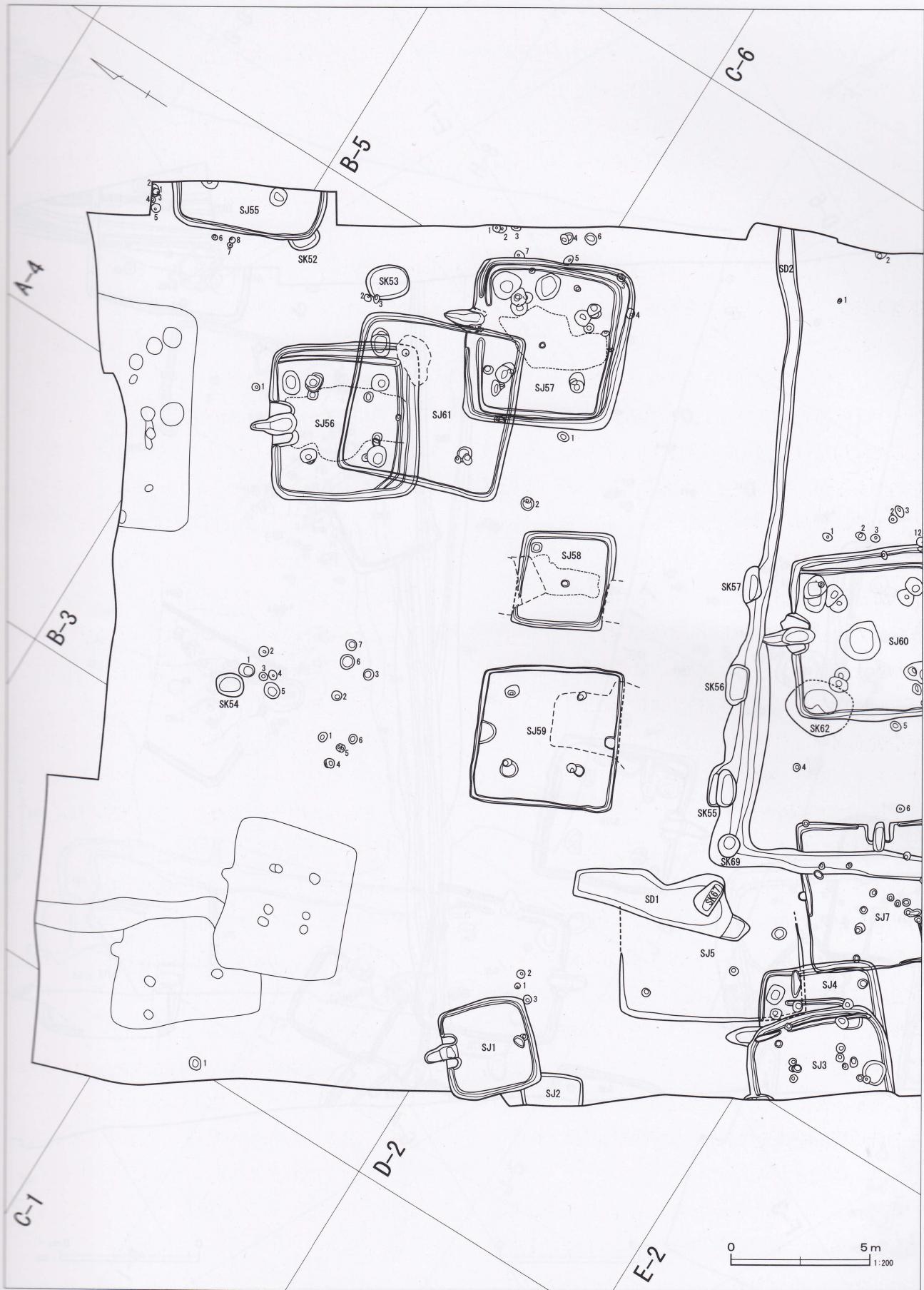
このように、荒川附遺跡の性格を考えるとき、通常の農耕主体の集落というよりも、鉄生産や土器生産など手工業生産を強く指向した、「工人集落」的な様相が認められる。鉄生産に関して言えば対岸の椿山遺跡、白岡町たたら山遺跡群を含めて、古代埼玉郡の鉄生産を担った中核集落と位置づけられよう。今後の調査の進展が期待される。土師器生産では水深遺跡とともに古代埼玉郡における土師器生産を担った遺跡と評価できよう。

さて、出土遺物からみた荒川附遺跡の特徴は、東海産、特に湖西産須恵器が多量に出土する点で、事業団報告書第122集においても目立ったが、今回の報告でも同じ傾向が認められた。他にも上野産須恵器や常陸（新治）産須恵器、南関東系の盤状壺、東関東系の土師器など、他地域の土器が搬入されたことが確認され、流通の結節点にあったことが分かる。おそらく元荒川の水運を利用して、湖西産須恵器に代表される他地域産土器が持ち込まれ、荒川附産土師器や鉄製品が他遺跡に搬出されたのであろう。元荒川を利用した交易の拠点、川津的な性格の遺跡であったといえようか。

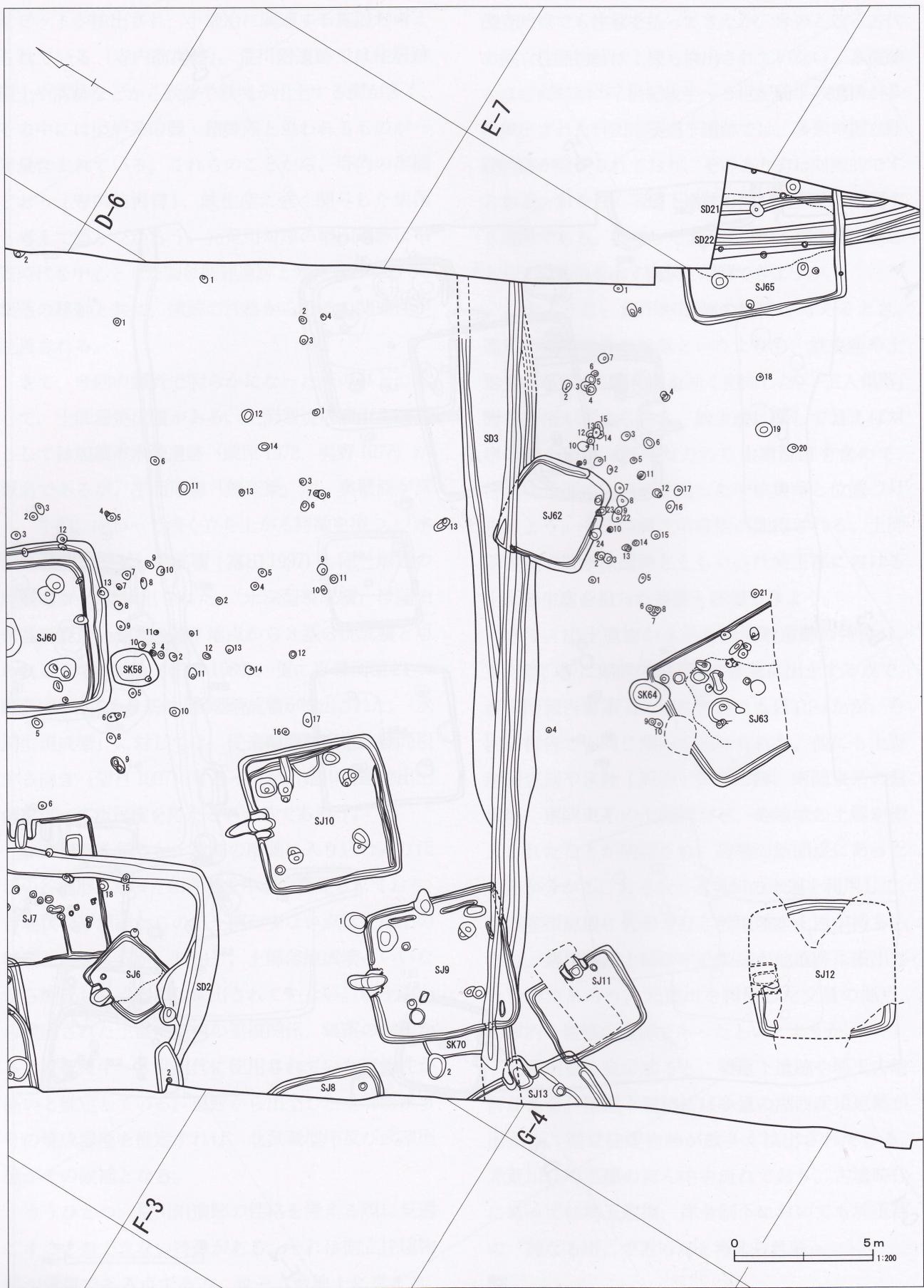
元荒川を上流に辿ると、築道下遺跡や埼玉古墳群がある。築道下遺跡には多量の湖西産須恵器が出土し、掘立柱建物跡が数多く検出されている。元荒川は埼玉郡の真ん中を流れしており、古墳時代にあっては埼玉政権、律令制下においても埼玉郡の「母なる川」であったと考えられる。

註

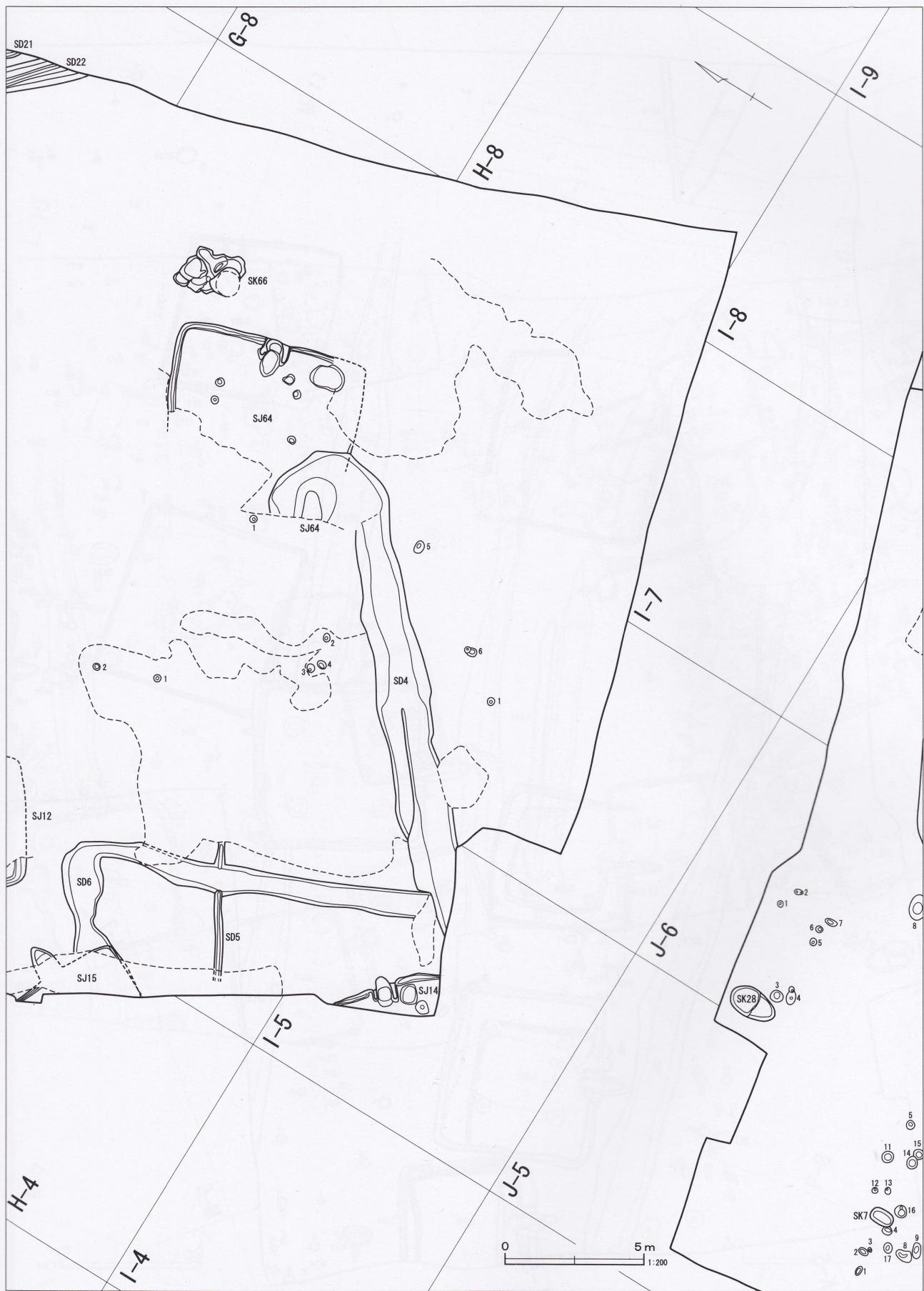
註1 蓮田市教育委員会田中和之氏のご教示による。



第8図 荒川附遺跡20次全体図 (1)



第9図 荒川附遺跡20次全体図(2)



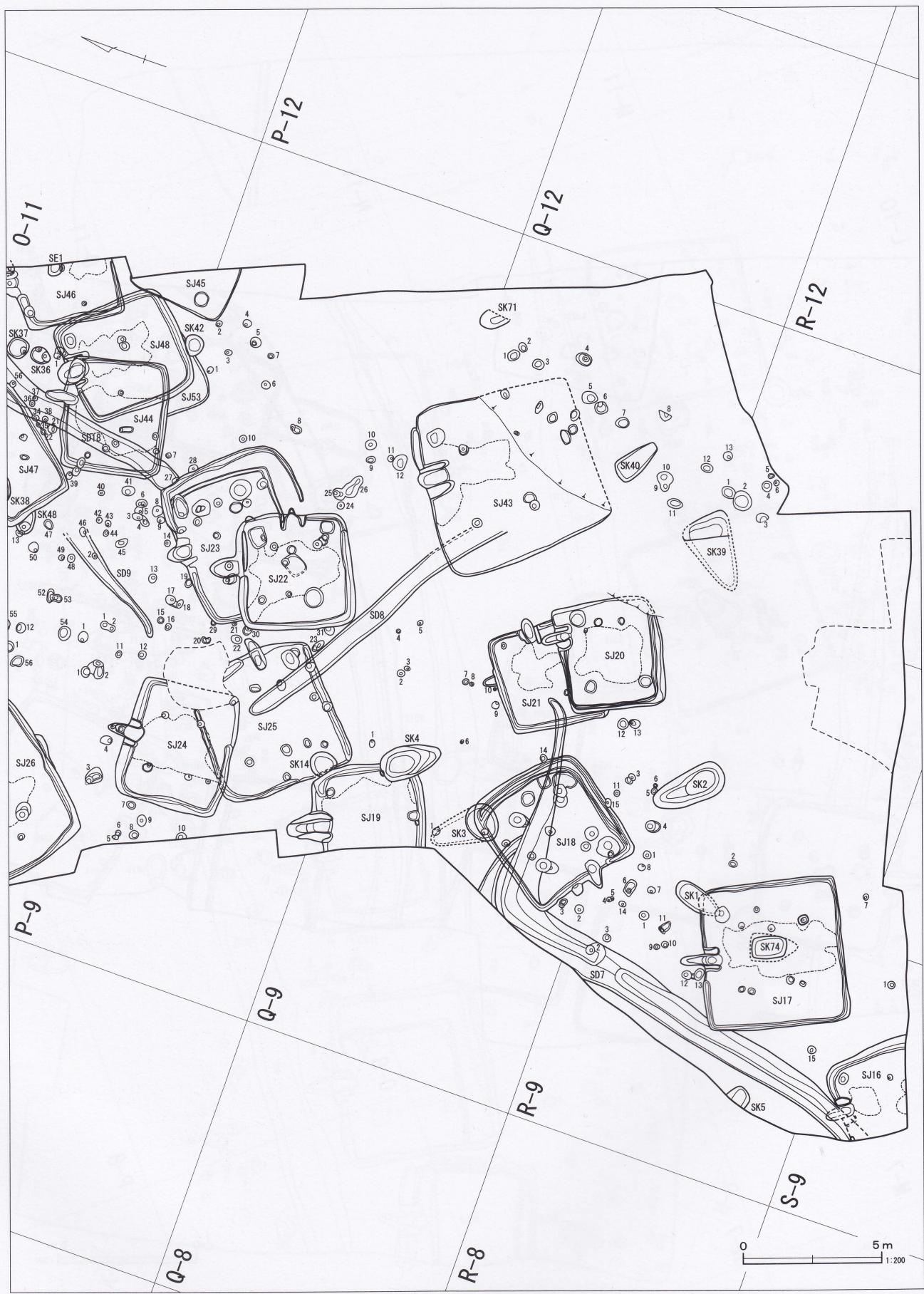
第10図 荒川附遺跡20次全体図(3)



第11図 荒川附遺跡20次全体図 (4)



第12図 荒川附遺跡20次全体図(5)



第13図 荒川附遺跡20次全体図(6)

IV 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡（第14図）

第1号住居跡はC・D-2グリッドに位置する。第2号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。平面形はほぼ正方形で、規模は一辺3.40×3.30m、深さ0.28mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

床面は概ね平坦であるが、中央部が緩やかに窪む。全体に硬く踏み固められていた。覆土は暗褐色土から黒褐色土で構成され、概ね自然堆積と推定された。

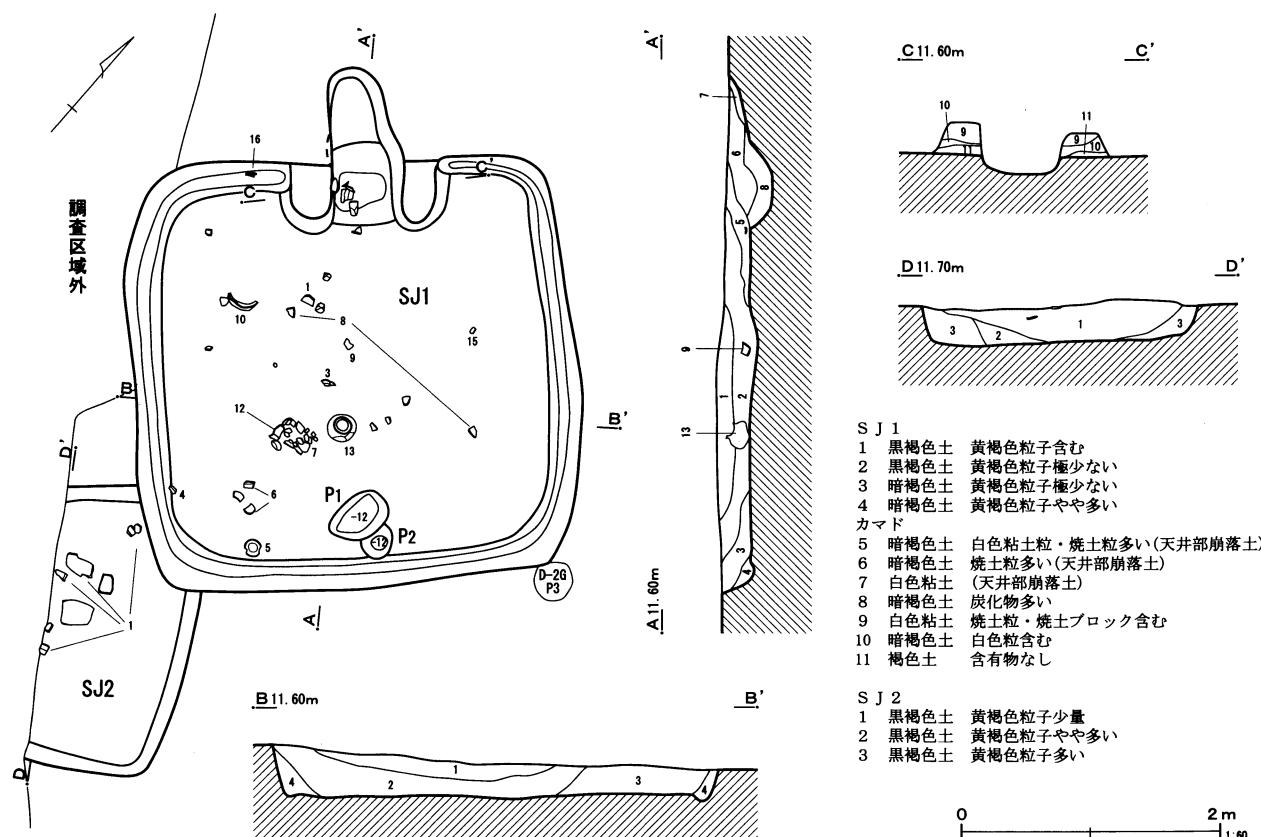
カマドは北西壁中央に設けられていた。全長1.20m、燃焼部は壁をわずかに切り込んで構築され、底面は皿状に窪む。煙道部は約60cm壁外に延びる。袖部と天井部は白色粘土を積み上げて構築されていた。

貯蔵穴はない。ピットは2本検出されたが、伴うものではなかろう。壁溝は深さ5cmほどで全周する。

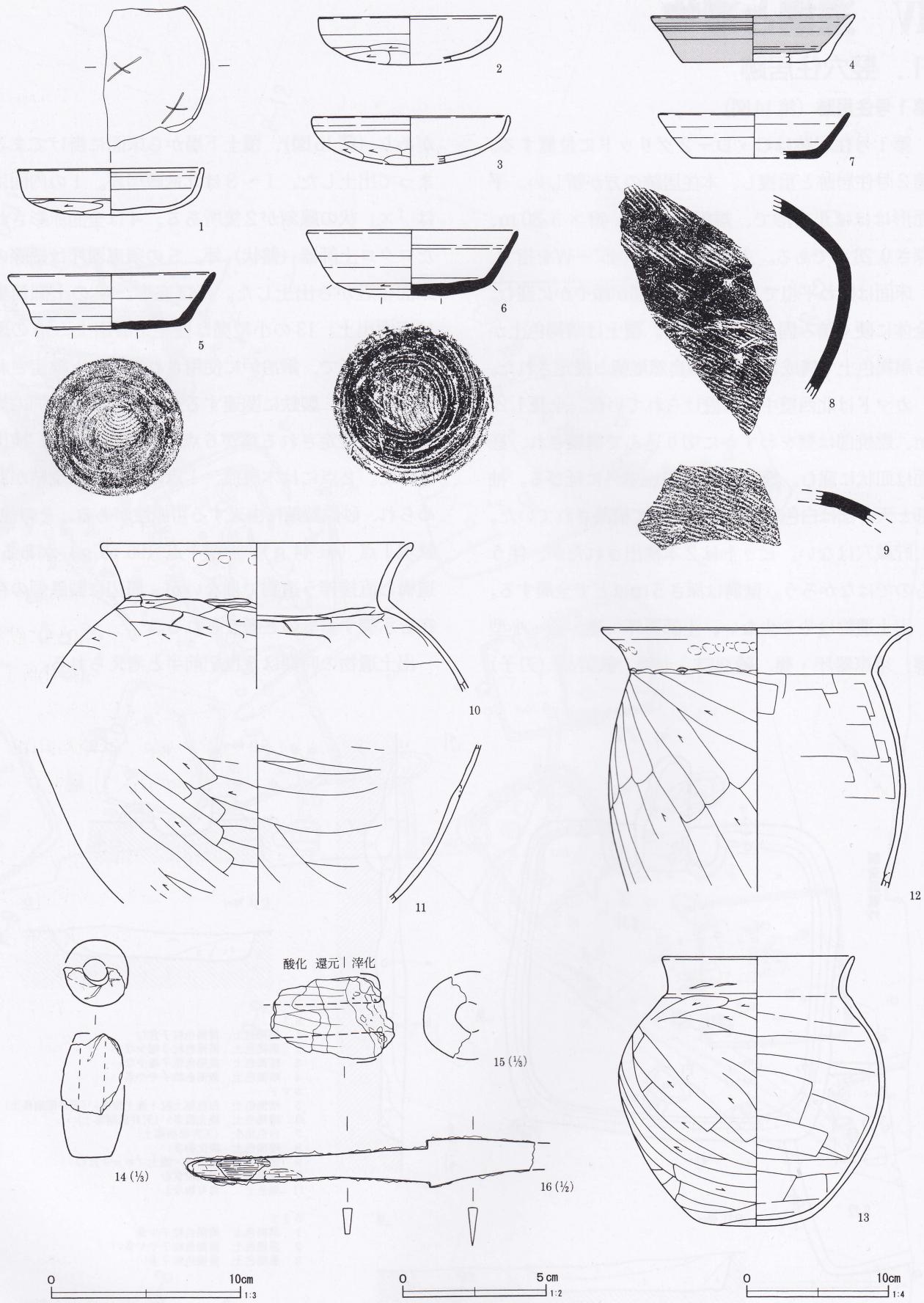
出土遺物はやや少ない。土師器壺・甕・壺・小型甕、須恵器壺・甕、鞴羽口、土錘、鉄製品（刀子）

があり（第15図）、覆土下層から床面に掛けてまとまって出土した。1～3は北武藏型壺。4は全面赤彩されたロクロ土師器（盤状）壺。5の須恵器壺は壁際の床面付近から出土した。ほぼ完形。12の土師器甕は床面出土。13の小型甕は覆土下層出土。15の羽口は小口径で、鍛冶炉に使用されたものと推定される。その他、製鉄に関連する遺物として製錬炉の炉内滓かと推定される滓が6点（計1002.41g）検出された。2点には木炭痕、1点には砂鉄の焼結が認められ、砂鉄製錬に由来する可能性がある。その他、鉄塊1点（46.44g）、炉壁1点（96.59g）がある。遺構に直接伴う遺物ではないが、周辺に製鉄炉の存在を示唆するものと考えられる。

出土遺物の時期は8世紀前半と考えられる。



第14図 第1・2号住居跡



第15図 第1号住居跡出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表（第15図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|------|---------------------------------|----------|------------|------------|------------|----|----|-------------------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (15.2) | 3.2 | — | 40 | C・I | 普通 | 淡褐 | No.19(床+9) 見込みに線刻「×」2ヶ所 |
| 2 | 土師器 | 壺 | (12.8) | 3.4 | — | 30 | C・I | 良好 | 褐 | 体部外面ヘラケズリ |
| 3 | 土師器 | 壺 | (13.8) | 3.3 | — | 35 | I | 普通 | 褐 | No.7(床+5) 底部手持ちヘラケズリ 雲母状微粒子 |
| 4 | 土師器 | 盤状壺 | (14.2) | 3.3 | (10.0) | 30 | D・E・G・H・I | 良好 | 橙褐 | No.14(床+6) ロクロ成形 底部ヘラケズリ 全面赤彩 |
| 5 | 須恵器 | 壺 | 14.4 | 3.9 | 9.9 | 90 | I・J | 普通 | 灰 | No.1(ほぼ床直) 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ 南北企産 |
| 6 | 土師器 | 壺 | 14.8 | 4.5 | 11.1 | 60 | B・E・J・L | 普通 | 灰褐 | No.2・4(床+4~13) 底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ 南北企産 |
| 7 | 須恵器 | 壺 | (13.4) | 3.2 | (9.0) | 30 | H・I・J | 不良 | 橙褐 | No.5(床直) 磨耗が激しく調整痕不明瞭(回転ヘラケズリ?) |
| 8 | 須恵器 | 長頸瓶? | — | — | — | 10 | E・G・I・J | 良好 | 灰 | No.12・18(床+3~6) 南北企産か SJ1-9と同一個体 |
| 9 | 須恵器 | 長頸瓶? | — | — | — | 10 | I・L | 良好 | 灰 | No.11(床+5) 外面平行叩き SJ1-8と同一個体 |
| 10 | 土師器 | 甕 | 21.5 | 10.3 | — | 10 | A・G・I | 普通 | 橙褐 | No.17(床+5) 胴部ヘラケズリ |
| 11 | 土師器 | 甕 | — | 11.3 | — | 5 | C・D・G・H・K | 普通 | 褐 | 胴部外面ヘラケズリ 内面ナデ 外面に煤付着 |
| 12 | 土師器 | 甕 | 21.7 | 18.6 | — | 90 | C・G・H・I | 良好 | 淡褐 | No.5(ほぼ床直) 口縁部外面ヨコナデ 指頭痕あり |
| 13 | 土師器 | 甕 | 13.4 | 18.9 | 8.4 | 90 | C・D・G・H・I | 良好 | 褐 | No.6(ほぼ床直) 胴部外面煤付着 丸平底 |
| 14 | 土製品 | 土錘 | 長さ4.2cm 最大径3.3cm 孔径1.3cm 残存率40% | — | — | — | — | — | — | 18.52g |
| 15 | 土製品 | 羽口 | No.13(床+3) | 長さ6.5cm | 中心部内径1.6cm | 中心部外径4.6cm | 先端部内径4.6cm | — | — | 52.45g |
| 16 | 鉄製品 | 刀子 | No.28(床+10) | 現長12.3cm | 刃幅1.6cm | 背幅0.3cm | 茎長8.5cm | — | — | — |

第2号住居跡（第14図）

第2号住居跡はD-2グリッドに位置する。住居西半は調査区外に延び、北東隅を第1号住居跡に切られていた。

平面形は方形と推定されるが、北西辺が歪むようである。規模は長軸長2.20m、短軸残存長1.13mと小型の竪穴で、深さは0.36mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面はやや凹凸が目立つ。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を基調としており、概ね自然堆積と思われた。

カマド（炉跡？）、貯蔵穴、ピット、壁溝等の施設は存在しない。

出土遺物は土師器有段口縁の大形壺が覆土中から発見されたのみである。

第16図1は土師器大型壺である。推定口径21.4cm、推定高53.0cm、底径10.0cm。残存率は約30%。胎土に角閃石・砂粒・赤色粒子を含む。焼成は良好で、色調は淡褐色。胴部外面は木口状工具によるナデ（刷毛目）とヘラケズリ。底部は木葉痕か。

時期は不明確であるが、有段部が退化していることから鬼高峰期初頭を前後する時期と推定される。

第3号住居跡（第17図）

第3号住居跡はD-3・E-2・3グリッドに位

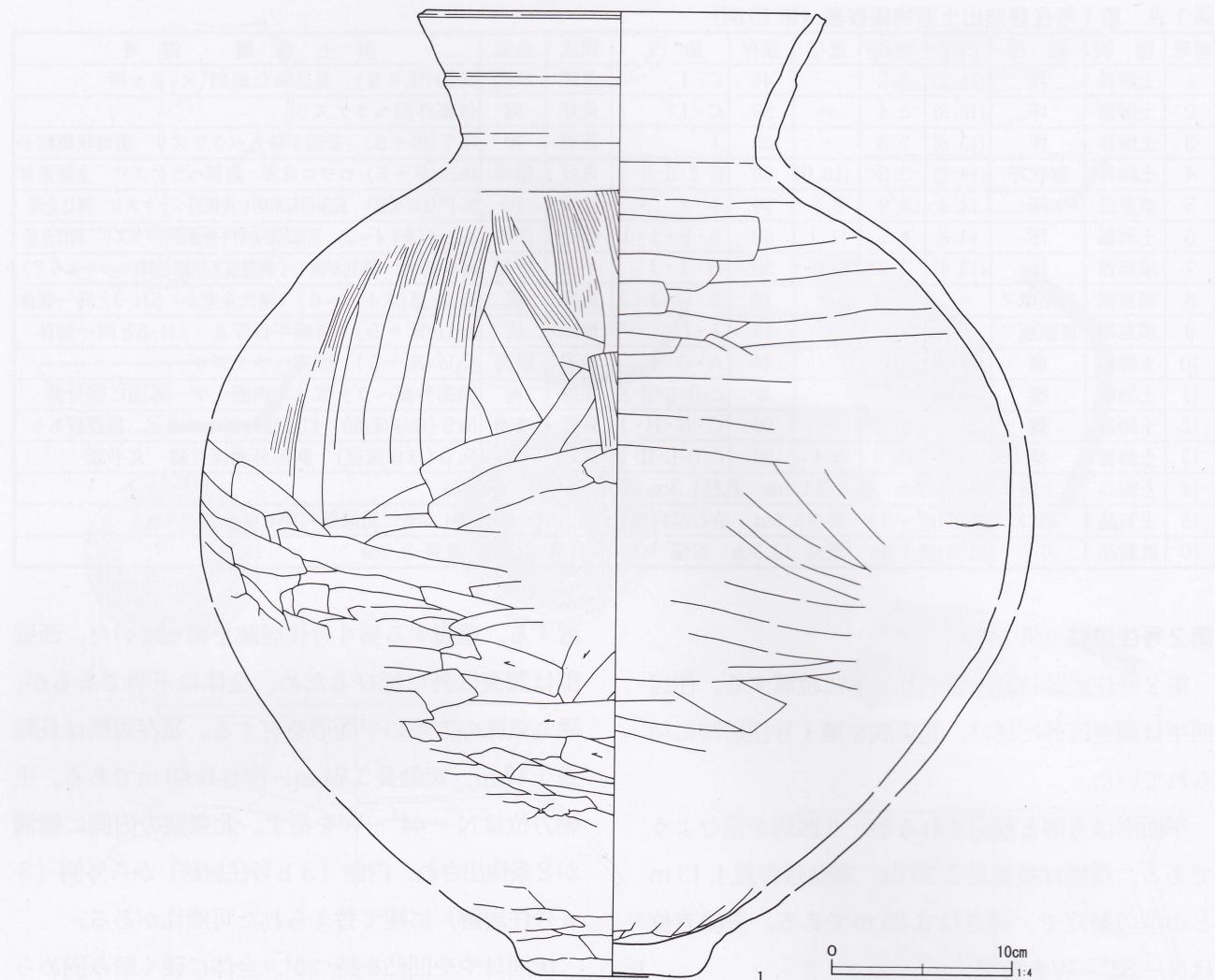
置する。重複する第4号住居跡を切っていた。西壁部は調査区外に延びるため、全体は不明であるが、隅丸気味の方形の平面形を有する。残存規模は長軸長5.17m、短軸長3.24m、深さ0.49mである。主軸方位はN-44°-Wを指す。北東壁の内側に壁溝が2条検出され、内側（3b号住居跡）から外側（3a号住居跡）に建て替えられた可能性がある。

床面はやや凹凸を持つが、全体に硬く踏み固められていた。覆土は暗褐色土から黒褐色土を基調としており、概ね自然堆積と推定された。

カマドは北西壁の調査区外との境に一部掛かる形で検出された。カマドの存在に気付くのが遅れたが、袖部の位置に白色粘土が存在したため、本来は白色粘土を積み上げて構築したと考えられる。全長0.60mで、燃焼部はほぼ壁内に収まる。底面は緩やかに窪み、灰層が形成されていた。煙道部は段を持って立ち上がるが、確認できた長さは短い。

貯蔵穴は検出されなかった。土壙は2基あり、第1号土壙は住居床面を切っていたため、住居よりも新しい可能性がある。第2号土壙は掘り方の一部を考えた方が良いかもしれない。

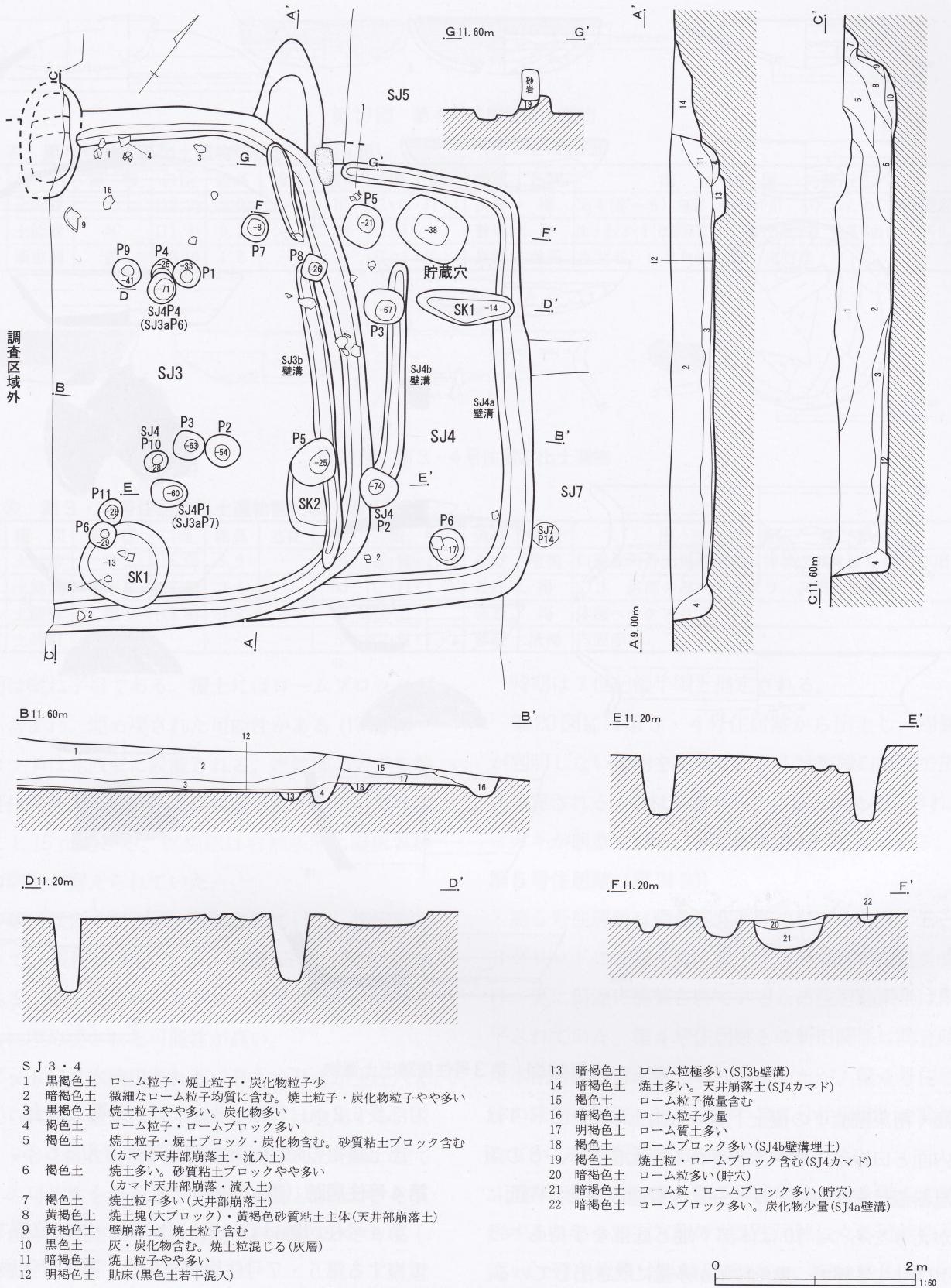
ピットは11本検出された。P1・P2が第3a号住居跡の主柱穴、P3・P4が建て替え前の第3b号住居跡主柱穴に対応しよう。



第16図 第2号住居跡出土遺物

第2表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|-----|--------|-------|--------|----|-----------|----|-----|------------------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (11.0) | 3.7 | — | 20 | C・E | 普通 | 褐 | No.6(床+20) 体部ヘラケズリ 磨滅により方向不明瞭 |
| 2 | 土師器 | 壺 | 12.2 | 3.9 | — | 90 | C・D・H・I | 良好 | 淡褐 | No.1(床+6) 無彩 ヘラケズリ一部ノッキング |
| 3 | 土師器 | 壺 | (13.0) | 3.7 | — | 40 | L | 良好 | 褐 | No.8(床+16) 赤彩 続比企型壺 体部外面ヘラケズリ |
| 4 | 土師器 | 壺 | (13.6) | 3.1 | — | 30 | I | 良好 | 淡褐 | No.7(床+13) 口縁外面～内面に赤彩 続比企型壺 |
| 5 | 土師器 | 皿 | (16.6) | 3.7 | — | 40 | L | 良好 | 橙褐 | No.2(床+7) 体部ヘラケズリ |
| 6 | 須恵器 | 蓋 | — | — | — | 90 | E・I・J | 良好 | 灰 | ツマミ径3.9cm ロクロ右回転 南比企産 |
| 7 | 須恵器 | 蓋 | — | 2.4 | — | 25 | B・I | 普通 | 灰 | SJ3・4 末野産 天井部回転ヘラケズリ後ナデ |
| 8 | 須恵器 | 蓋 | (19.8) | 3.0 | — | 25 | B | 普通 | 灰 | SJ3・4 末野産 天井部回転ヘラケズリ後ナデ |
| 9 | 須恵器 | 蓋 | (20.0) | 4.4 | — | 55 | C・G・K・L | 普通 | 明黄灰 | No.4(床+5) 末野産 ツマミ径4.5cm ロクロ右回転 末野産 |
| 10 | 須恵器 | 壺 | (12.8) | 3.1 | (9.0) | 30 | G・I・K | 良好 | 灰 | ロクロ右回転 体部下端及び底部手持ちヘラケズリ 秋間産か |
| 11 | 須恵器 | 壺 | (15.5) | 3.4 | 10.4 | 40 | I・J | 普通 | 灰 | SJ3・4 底部中心に糸切り痕残る ロクロ左回転 南比企産 |
| 12 | 須恵器 | 壺 | — | 3.2 | (8.4) | 40 | G・I・J | 良好 | 灰 | ロクロ右回転 底部周辺ヘラケズリ 南比企産 |
| 13 | 須恵器 | 壺 | — | 1.1 | (8.6) | 30 | D・G・I・J | 良好 | 暗褐灰 | ロクロ右回転 底部全面ヘラケズリ 南比企産 |
| 14 | 土師器 | 壺 | (22.2) | (6.6) | — | 15 | C・E・H・I・K | 良好 | 褐 | 胴部外面ヘラケズリ 内面木口ナデ |
| 15 | 土師器 | 甕 | (24.0) | 4.3 | — | 10 | C・H・I・K | 良好 | 褐 | 胴部外面ヘラケズリ 内面木口ナデ |
| 16 | 土師器 | 壺 | — | 3.1 | (7.4) | 10 | I | 普通 | 褐 | No.5(床+5) 体部下端底部ともにヘラケズリ |
| 17 | 土師器 | 甕 | — | 3.1 | 6.6 | 10 | C・I | 普通 | 褐 | 胴部外面底部ヘラケズリ 内面ナデ |
| 18 | 須恵器 | 長頸瓶 | — | 7.2 | — | 20 | G・I・K | 良好 | 灰 | 体部下端回転ヘラケズリ 湖西産か ロクロ右回転 |
| 19 | 須恵器 | 壺 | — | 4.6 | (15.8) | 20 | E・I・J・K | 良好 | 暗灰 | 短頸壺か 内底面に自然釉付着 南比企産 |

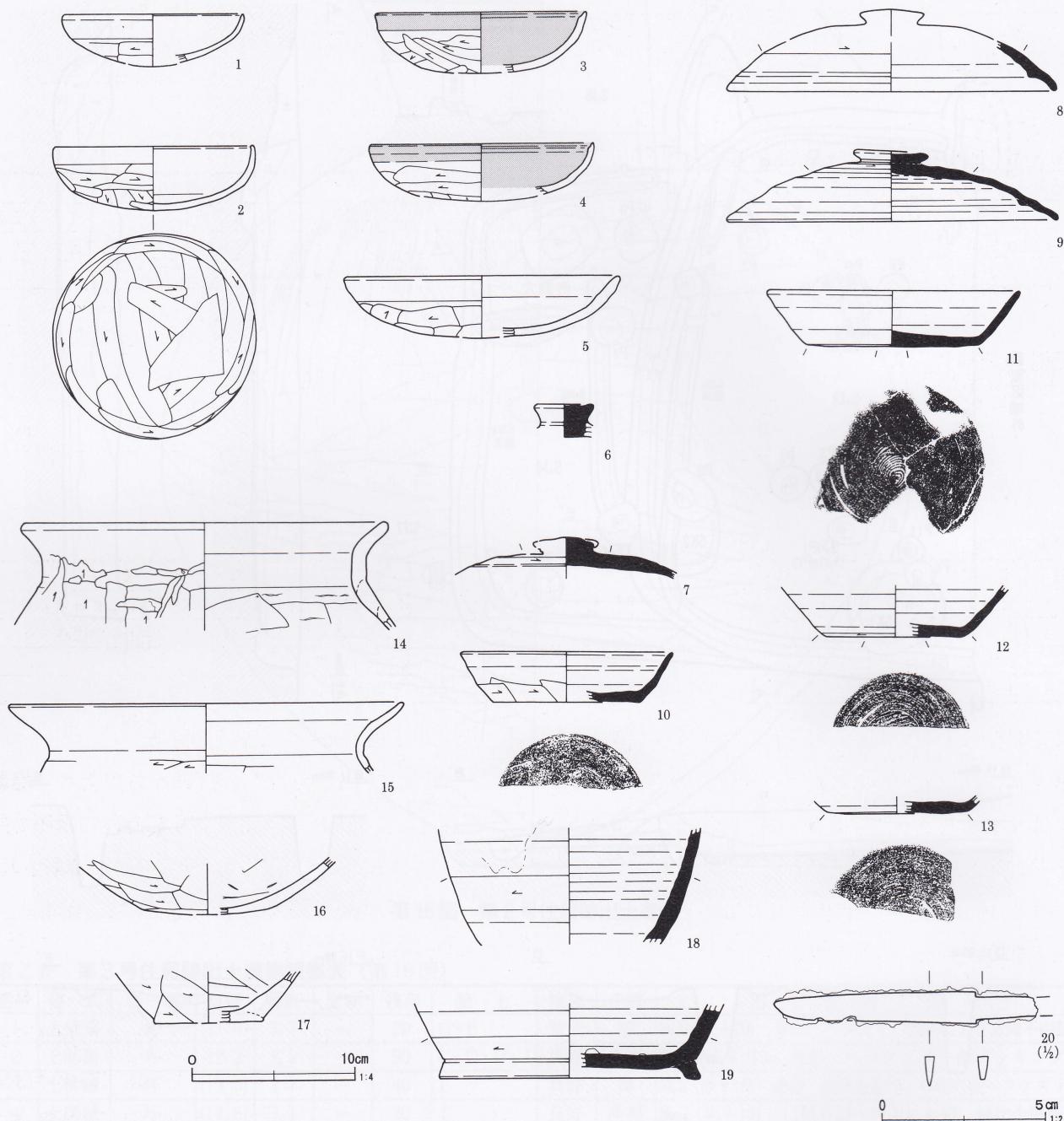


第17図 第3・4号住居跡

第3a号住居跡の壁溝は全周する。深さは5cm程度、第3b号住居跡のそれは約10cmである。

出土遺物は比較的少ない。小破片が多く、覆土中

から出土したものが大半である。土師器壺・皿・甕・壺、須恵器壺・蓋・長頸瓶・短頸壺、鉄製品がある(第18図)。1・2は北武藏型壺で、2は遺存率が



第18図 第3号住居跡出土遺物

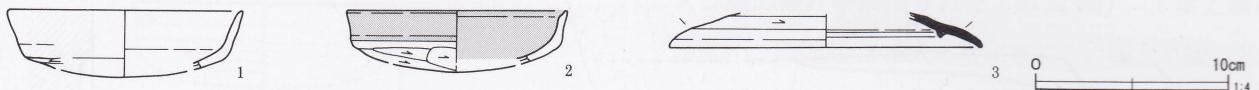
高く南東壁直下の覆土下層から出土した。3・4は内面と口縁部外面が赤彩される続比企型壺。6の須恵器蓋は南比企産、7～9は末野産の蓋で、内面にかえりをもつ。10は体部下端と底部を持ちヘラケズリする壺で、黒色粒子が多量に吹き出している。良質な胎土で、上野（秋間）産と考えておきたい。11～13は南比企産の須恵器。18は湖西産と推定される長頸瓶胴部片。19は短頸壺か。南比企産。20は両闌式の鉄製刀子で、茎部を欠く。残存長8.1cm、

刃部長6.2cm。背幅0.3cm。カマド覆土出土。
出土遺物の時期は8世紀前半と考えられる。

第4号住居跡（第17図）

第4号住居跡はD・E-3グリッドに位置する。重複する第5・7号住居跡を切り、第3号住居跡に切られていた。

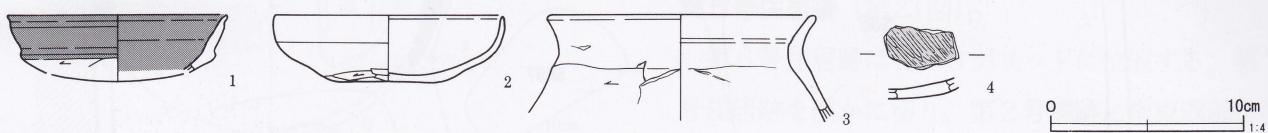
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長4.43m、短軸長1.85m、深さ0.25mである。主軸方位はN-38°-Wを指す。



第19図 第4号住居跡出土遺物

第3表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|----|--------|-----|----|----|---------|----|----|------------------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (12.2) | 3.0 | — | 10 | C・G・H・I | 良好 | 褐 | No.4(床+6) 無彩 模倣壺系 小片のため口径不安定 |
| 2 | 土師器 | 壺 | (11.4) | 3.2 | — | 20 | G・I | 普通 | 褐 | No.3 SJ3・4(ほぼ床直) 口縁内外面赤彩 体部外面ヘラケズリ |
| 3 | 須恵器 | 蓋 | (16.0) | 1.8 | — | 10 | C・I・K | 良好 | 黄灰 | カマド ロクロ右回転 末野産 |



第20図 第3・4号住居跡出土遺物

第4表 第3・4号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|----|--------|-----|----|----|---------|----|----|------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (16.0) | 3.9 | — | 20 | C・H・I・K | 良好 | 橙褐 | 口縁部内外面黒色処理 棒状工具による段の作出 |
| 2 | 土師器 | 壺 | (11.8) | 3.4 | — | 50 | C・H・I・K | 良好 | 褐 | SJ3 底部のみヘラケズリ 調整やや粗雑 |
| 3 | 土師器 | 甕 | (13.4) | 5.4 | — | 10 | B・L | 普通 | 褐 | 体部ヘラケズリ |
| 4 | 土師器 | 壺 | — | — | — | 5 | G・H・I・J | 普通 | 淡褐 | 内面赤彩 |

床面は概ね平坦である。覆土にはロームブロックが多く含まれ、埋め戻された可能性がある(I7層)。

カマドは北西壁に設置される。燃焼部の大半を第3号住居跡に壊され、遺存状態は悪い。煙道部は壁外に1.15m延びる。燃焼部は右袖基部に凝灰質砂岩の切石が据えられていた。

貯蔵穴はカマド右脇に設置されていた。楕円形プランで、規模は長径72cm、短径55cm、深さ38cmである。埋土にはロームブロックが目立ち、住居とともに埋め戻された可能性が高い。

ピットは6本検出された。P1～P4が主柱穴と考えられる。壁溝は残存部においては全周する。P2とP3の間に壁溝状の溝が検出されたため、建て替えの可能性を考え第4b号住居跡としたが、SK1も含めて間仕切り溝の可能性を考慮すべきかもしれない。

出土遺物は少なく、全て小片である。土師器壺と須恵器蓋がある(第19図)。1は模倣壺系で、ケズリによって稜を作り出している。2は続比企型壺で、赤彩が施されている。3は末野産のかえり蓋。

時期は7世紀後半頃と推定される。

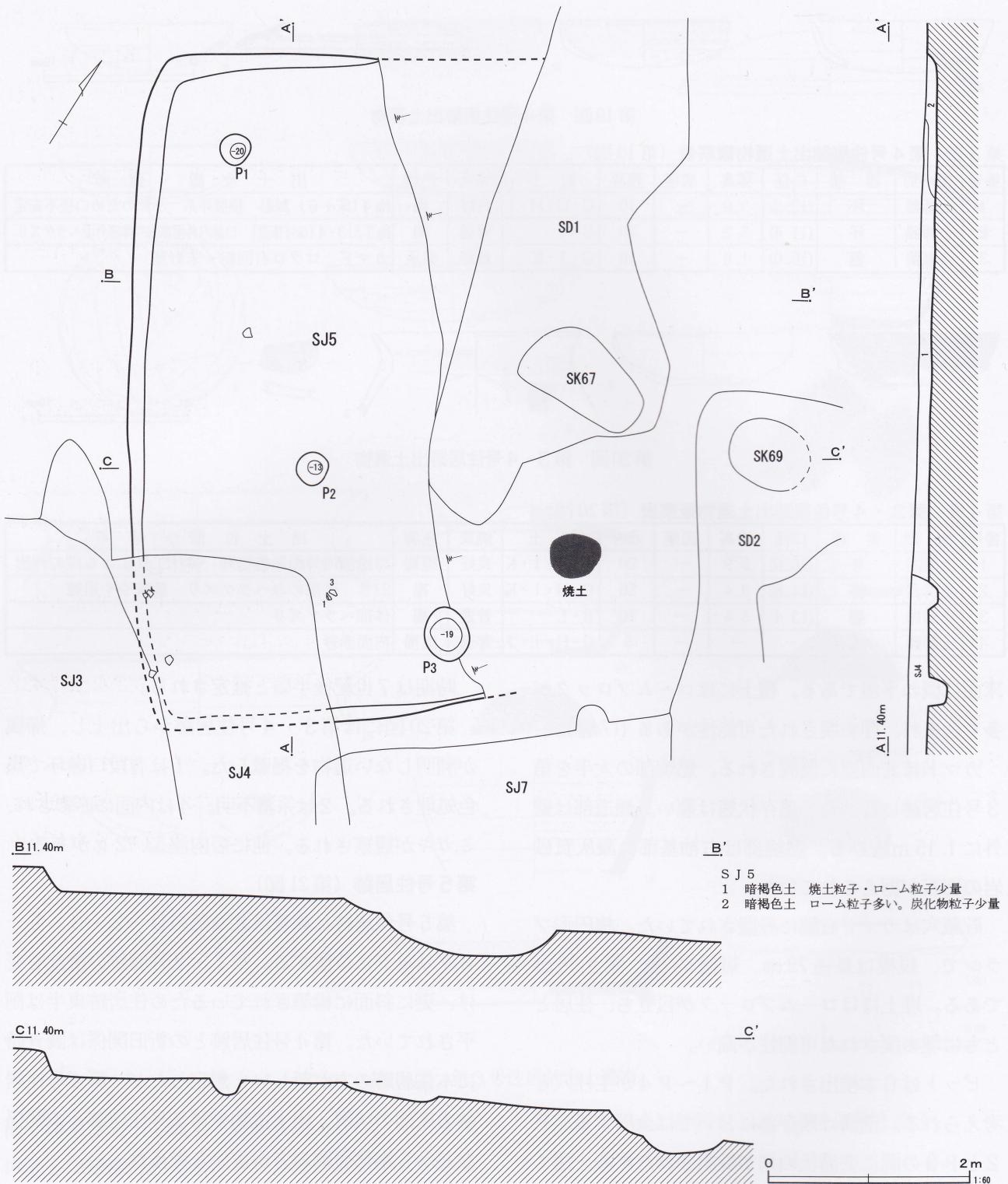
第20図には第3・4号住居跡から出土し、帰属が判明しない遺物を掲載した。1は有段口縁壺で黒色処理される。2は系譜不明。4は内面に赤彩され、ミガキが観察される。他に炉内滓53.72gがある。

第5号住居跡 (第21図)

第5号住居跡は調査区北西部のD-2・3、E-3グリッドに位置する。第1・2号溝跡の攪乱を受け、更に斜面に構築されているため住居跡東半は削平されていた。第4号住居跡との新旧関係は調査時に本住居跡の方が新しいと想定したが、第4号住居跡の床面の状況、出土遺物や第7号住居跡との関係などから本住居跡の方が古いと考えた。

遺存状態は悪いが、第7号住居跡と軸を揃えて隣接することから、方形の大型住居跡になる可能性が高い。残存規模は長軸長6.60m、短軸長3.30m、深さ0.25mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面は概ね平坦であるが、硬く踏み固められた形跡は認められなかった。床面が削平された部分に被熱焼土面が1箇所検出されたが、炉跡にしては深す



第21図 第5号住居跡

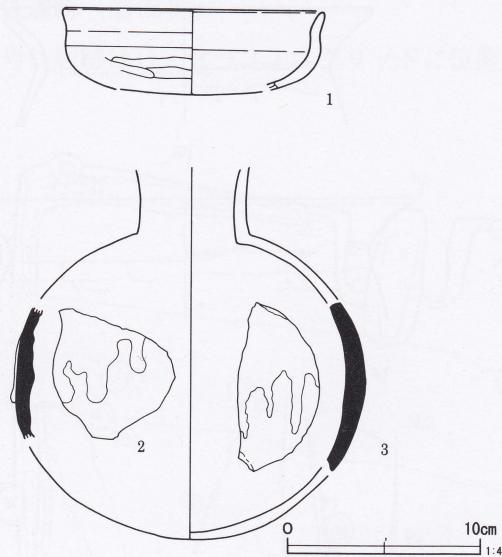
第5表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|-------|--------|-----|----|----|----|----|----|---------------------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (13.4) | 4.1 | — | 30 | H | 普通 | 褐 | No.3(床+7) 口縁部ヨコナデ 体部弱い手持ヘラケズリ |
| 2 | 須恵器 | フラスコ瓶 | — | 6.9 | — | 5 | G | 良好 | 暗灰 | No.4(床+10) フラスコ瓶成形時の底部 湖西産 SJ5-3と同一個体 |
| 3 | 須恵器 | フラスコ瓶 | — | 8.8 | — | 5 | G | 良好 | 暗灰 | No.4(床+10) フラスコ瓶閉塞部 湖西産 SJ5-2と同一個体 |

ぎるため、性格は不明である。

覆土はローム混じりの暗褐色土を基調としていた

が、埋め戻したと断定できるような状況ではなかつた。



第22図 第5号住居跡出土遺物

カマド・貯蔵穴等の施設は検出されなかった。第2号溝跡中に存在する69号土壙をカマド掘り方ではないかと想定したが、深過ぎるため確証は得られなかつた。

ピットは2本あるが、主柱穴とはならない。想定される位置の床面を掘り下げて確認に努めたが検出できなかつた。壁溝は存在しない。

出土遺物は非常に少なく、土師器坏と須恵器フラ

スコ瓶の破片が検出された(第22図)。1は土師器模倣坏。口径は13cm大と推定される。覆土下層。2・3は須恵器フラスコ瓶の胴部片で同一個体と思われる。2は成形段階の底部、3は閉塞部である。第4号住居跡に帰属する可能性が高いと考える。他に、鉄塊が26.61g出土した。

時期は不明確であるが、土師器坏から6世紀後半代に遡ると考えておきたい。

第6号住居跡(第23図)

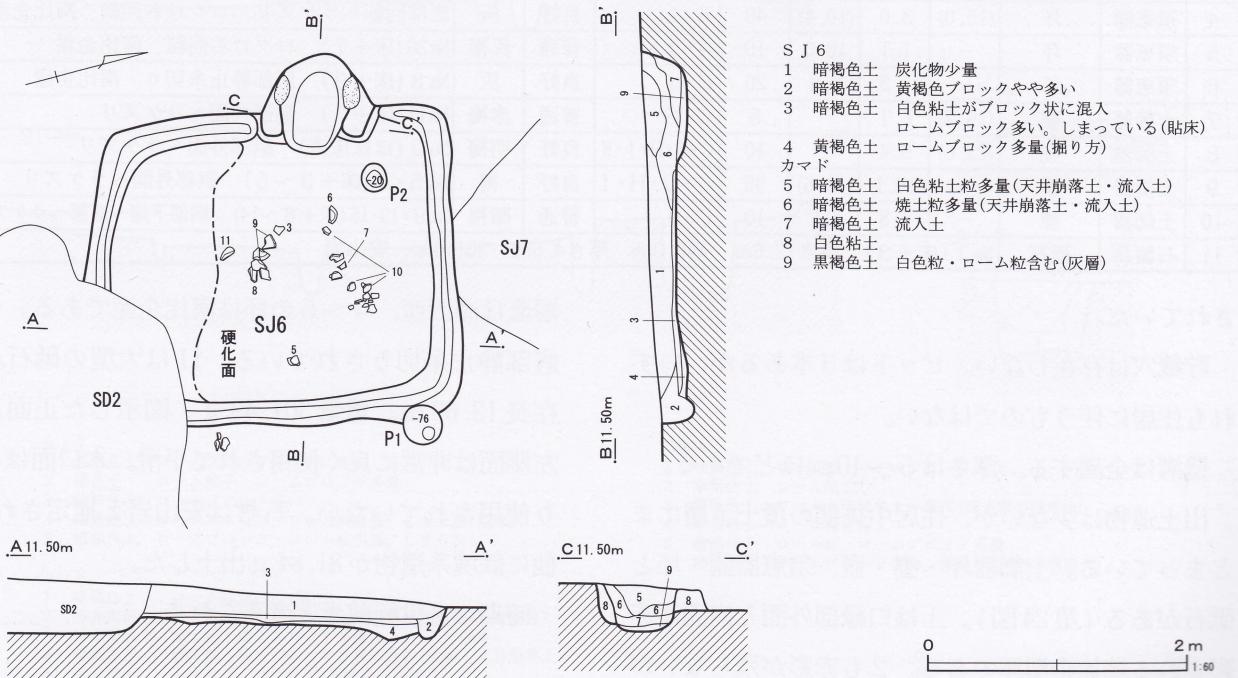
第6号住居跡はE-3グリッドに位置する。第7号住居跡を僅かに切り、第2号溝跡に南東隅部を切られていた。

平面形は方形、規模は長軸長2.89m、短軸長2.43m、深さ0.29mである。小型、西カマドの住居跡で主軸方位はN-73°-Wを指す。

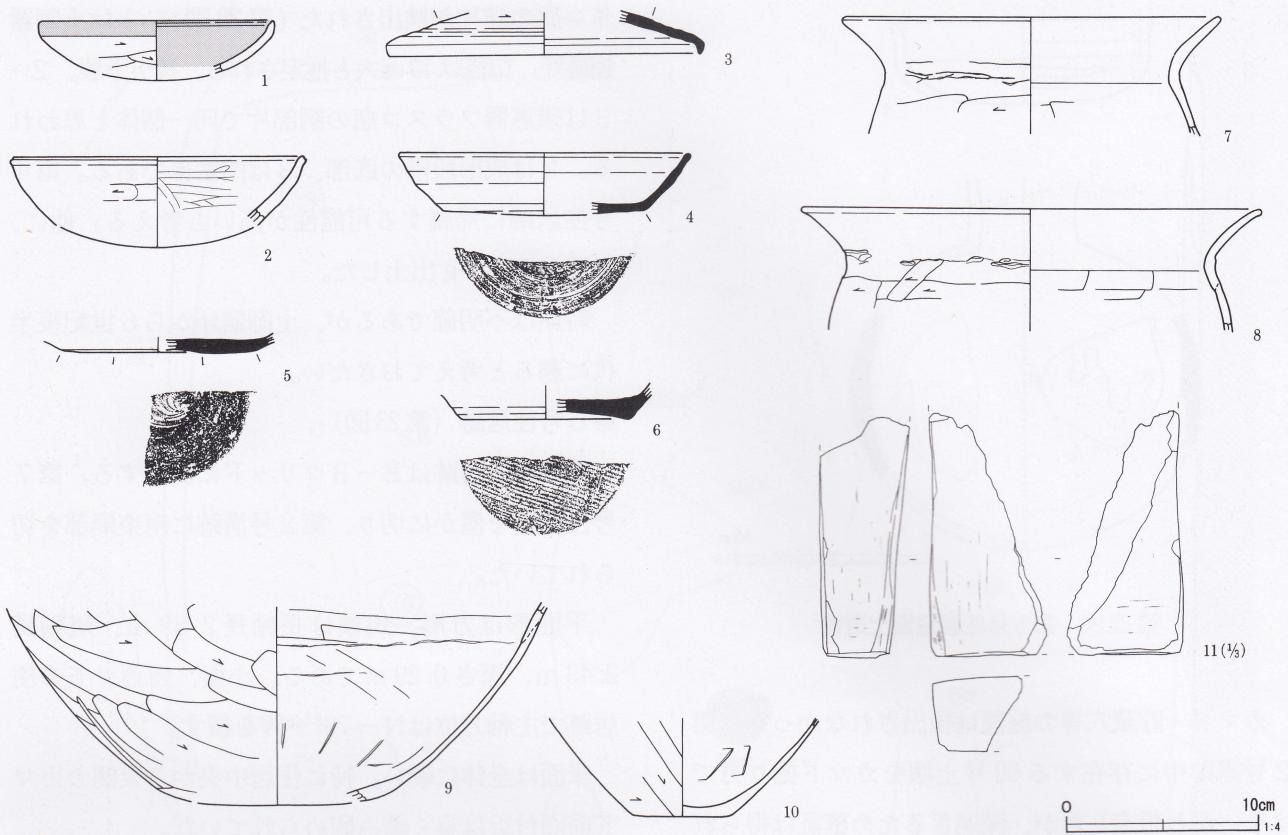
床面は全体に硬い。特に住居中央から東側のカマド前面付近は良く踏み固められていた。

覆土は炭化物混じりの暗褐色土で大きな土層変化は認められなかつた。

カマドは西壁に設けられていた。全長78cm、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。袖の範囲はあまり明確なものではなかつたが、白色粘土が使用



第23図 第6号住居跡



第24図 第6号住居跡出土遺物

第6表 第6号住居跡出土遺物観察表（第24図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎 土 | 焼成 | 色調 | 出 土 位 置 ・ 備 考 |
|----|-----|----|-----------|----------|--------|---------|-----------|-----|----|---------------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (12.0) | 2.7 | — | 10 | H・I・J | 良好 | 明褐 | 続比企型壺 口縁外面及び内面赤彩 |
| 2 | 土師器 | 壺 | (15.0) | 3.5 | — | 10 | I | 普通 | 褐 | 口唇部沈線状 体部内面ミガキ |
| 3 | 須恵器 | 蓋 | 16.0 | 2.2 | — | 10 | G・J | 普通 | 灰白 | No.7(床+17) ロクロ右回転 南北企産 |
| 4 | 須恵器 | 壺 | (15.0) | 3.0 | (10.4) | 40 | B・L | 良好 | 灰 | 底部回転ヘラケズリ ロクロ右回転 南北企産 |
| 5 | 須恵器 | 壺 | — | 1.1 | 10.0 | 10 | G・J・L | 普通 | 灰褐 | No.20(床+7) ロクロ右回転 南北企産 |
| 6 | 須恵器 | 壺 | — | 1.3 | 8.8 | 20 | G・J | 良好 | 灰 | No.8(床+9) 底部静止糸切り 南北企産 |
| 7 | 土師器 | 甕 | (19.2) | 6.1 | — | 5 | C・G | 普通 | 赤褐 | No.11(床+3) 胴部外面ヘラケズリ |
| 8 | 土師器 | 甕 | (23.6) | 6.4 | — | 10 | C・G・H・I・K | 良好 | 明褐 | No.2(ほぼ床直) 胴部外面ヘラケズリ |
| 9 | 土師器 | 甕 | — | 10.1 | (12.6) | 35 | C・G・H・I | 良好 | 褐 | No.5・6(床+3~5) 胴部外面ヘラケズリ |
| 10 | 土師器 | 甕 | — | 5.8 | 5.2 | 10 | C・I | 普通 | 暗褐 | No.9・13・15(床+8~14) 胴部下端~底部ヘラケズリ |
| 11 | 石製品 | 砥石 | No.1(床+3) | 長さ12.6cm | 幅6.0cm | 厚さ4.6cm | 301.49g | 安山岩 | | |

されていた。

貯蔵穴は存在しない。ピットは3本あるが、いずれも住居に伴うものではない。

壁溝は全周する。深さは5~10 cmほどである。

出土遺物は少ないが、住居中央部の覆土下層にまとまっている。土師器壺・甕・壺、須恵器蓋・壺と砥石がある（第24図）。1は口縁部外面と内面に赤彩される続比企型壺である。2も赤彩が残らないが口唇部に沈線が巡り同類の可能性がある。3の須恵

器蓋は湖西産、4~6の壺は南北企産である。6は底部静止糸切りされている。11は大型の砥石。残存長 12.60 cm。重量 301.49 g。図示した正面及び左側面は非常に良く使用されて平滑。木口面はあまり使用されていない。石材は安山岩と推定される。他に鉄塊系遺物が81.84 g出土した。

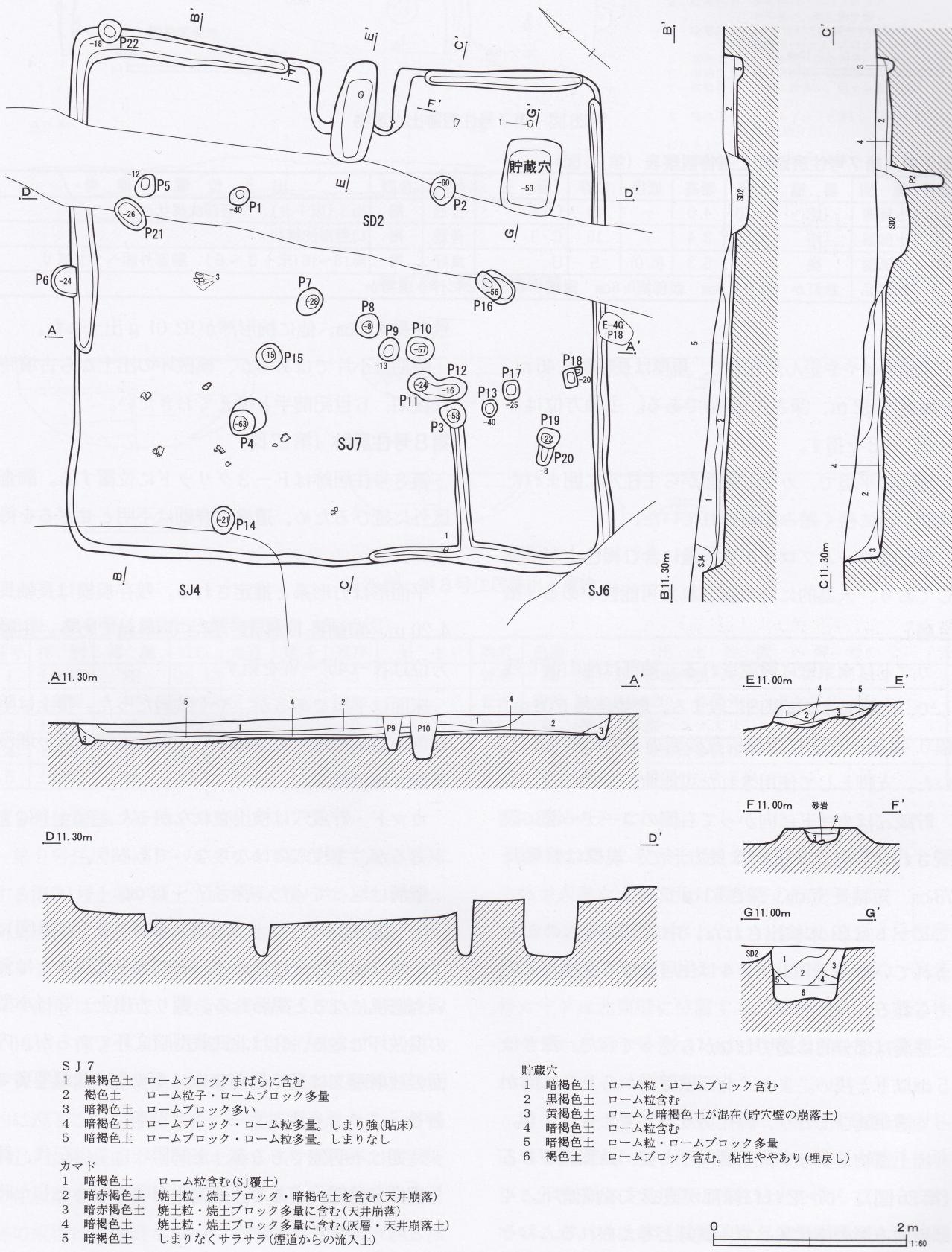
時期は8世紀前半と考えられる。

第7号住居跡（第25図）

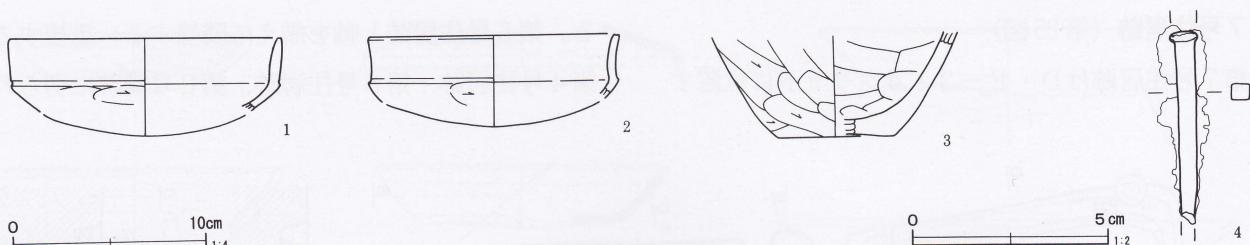
第7号住居跡はD・E-3・4グリッドに位置す

る。第5号住居跡と軸を揃えて隣接する。重複する

第4号住居跡・第6号住居跡、第2号溝跡に切られ



第25図 第7号住居跡



第26図 第7号住居跡出土遺物

第7表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|-----|---------|----------|---------------|----|-----|----|----|---------------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | 14.0 | 4.0 | — | 10 | C・E | 普通 | 褐 | No.1(床+9) 口唇部沈線状 |
| 2 | 土師器 | 壺 | (13.0) | 3.4 | — | 10 | C・I | 普通 | 褐 | 口唇部沈線状 |
| 3 | 土師器 | 甕 | — | 5.3 | (6.0) | 5 | G | 良好 | 褐 | No.13~16(床+3~6) 胴部外面ヘラケズリ |
| 4 | 鉄製品 | 鉄釘か | 残長4.9cm | 頭部幅0.6cm | 重複するSD2に伴う遺物か | | | | | |

ていた。

平面形はやや歪んだ方形で、規模は長軸長5.46m、短軸長5.12m、深さ0.38mである。主軸方位はN-51°-Eを指す。

床面は平坦で、カマド前面から主柱穴に囲まれた範囲が特に硬く踏み固められていた。

覆土はロームブロックを多量に含む褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある(第2層)。

カマドは南東壁に設置される。袖部は地山掘り残しで、燃焼部はほぼ壁内に収まる。燃焼部長1.08m、幅0.42m、底面には凝灰質砂岩の小塊が残されていた。支脚として使用された可能性があろう。

貯蔵穴はカマドに向かって右側のコーナー部に設置されていた。平面形は長方形で、規模は長軸長78cm、短軸長57cm、深さ53cmである。

ピットは21本検出された。中世以降のものが含まれているが、P1~P4は住居に伴う主柱穴と考えられる。

壁溝は部分的に途切れながら巡っていた。深さは5cm以下と浅い。また、北西壁壁溝からP3に向かって溝が延びており、間仕切り溝と考えられよう。

出土遺物は少ない。土師器壺・甕、鉄製品がある(第26図)。1・2は口縁部が直立する模倣壺。4は断面方形の棒状製品で、鉄釘と考えられる。おそらく重複する第2号溝跡等に帰属するものであろう。

残存長4.9cm。他に楕円形済が92.01g出土した。

時期は小片ではあるが、模倣壺の出土から古墳時代後期、6世紀前半と考えておきたい。

第8号住居跡(第27図)

第8号住居跡はF-3グリッドに位置する。調査区外に延びるため、遺構の詳細は不明とせざるを得ない。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長4.20m、短軸長1.24m、深さ0.39mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。

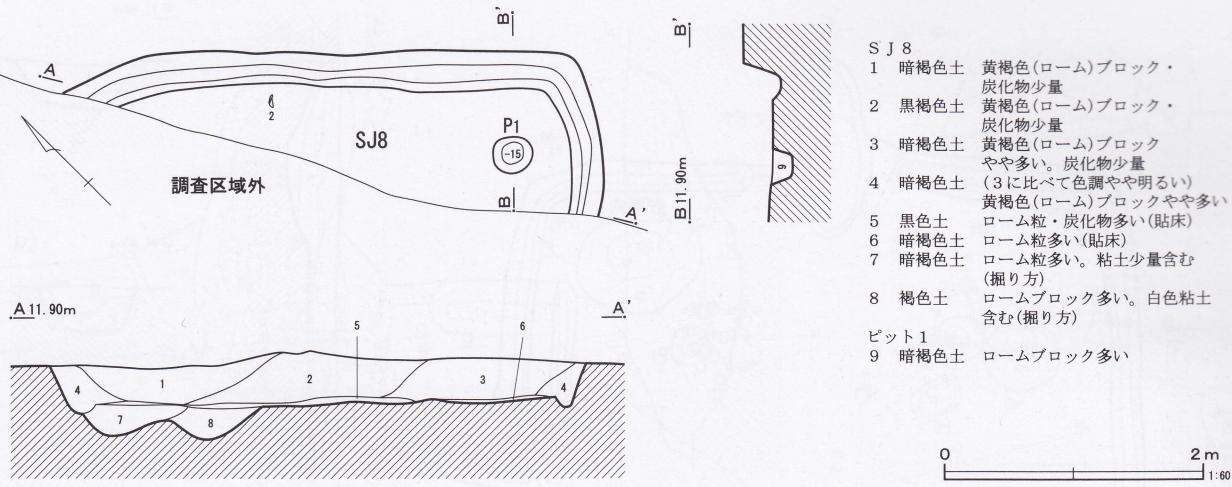
床面は平坦であるが、やや軟弱だった。覆土は暗褐色から黒褐色土を主体とし、自然堆積に近い埋没状況と思われる。

カマド・貯蔵穴は検出されなかった。ピットは1本あるが、主柱穴にはならないであろう。

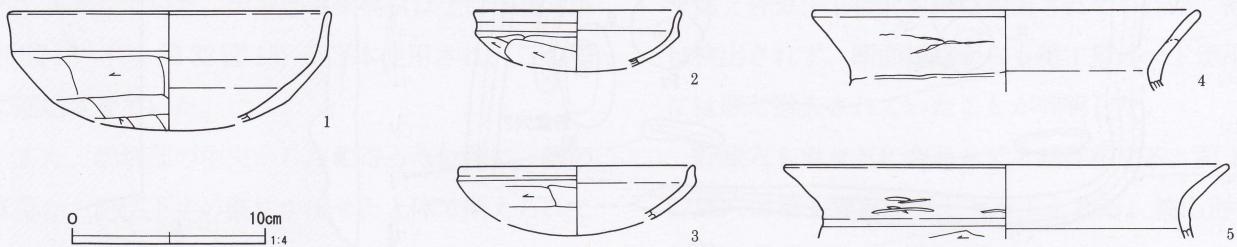
壁溝は巡っていた。深さ7~12cm。

出土遺物は少ない。土師器壺・甕がある(第28図)。1の壺は模倣壺とは異なる。底部は平底風または弱い丸底風になると思われる。掘り方出土。2は小型の模倣壺である。3は北武藏型暗文壺であるが、内面の放射暗文は良く見えない。4・5は武藏型甕である。

時期は不明確であるが、土師器壺は7世紀代、鉢と甕は8世紀代である。8世紀中頃を中心とした時期と考えておきたい。



第27図 第8号住居跡



第28図 第8号住居跡出土遺物

第8表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎 土 | 焼成 | 色調 | 出 土 位 置 ・ 備 考 |
|----|-----|----|--------|-----|----|----|---------|----|----|----------------------|
| 1 | 土師器 | 壺 | (16.4) | 5.7 | — | 20 | C・G | 普通 | 褐 | 掘り方 体部外面ヘラケズリ |
| 2 | 土師器 | 壺 | (10.5) | 2.9 | — | 20 | I | 普通 | 橙褐 | No.1(床+26) 体部外面ヘラケズリ |
| 3 | 土師器 | 壺 | (12.0) | 2.9 | — | 10 | C・I・K | 良好 | 褐 | 覆土 体部ヘラケズリ |
| 4 | 土師器 | 甕 | (20.0) | 4.1 | — | 10 | C・H・I | 良好 | 褐 | 覆土 口縁部接合痕残る |
| 5 | 土師器 | 甕 | (23.0) | 3.8 | — | 10 | C・G・H・I | 良好 | 明褐 | 覆土 口縁部ヘラキズ痕 |

第9号住居跡 (第29・30図)

第9号住居跡はF-4グリッドに位置する。重複する第70号土壙が覆土上面を薄く覆っていた。また、南東壁付近を第3号溝跡に、北コーナー部をF-4グリッドP1に削平されていた。

平面形は方形で、規模は長軸長5.25m、短軸長5.16m、深さ0.30mである。主軸方位はN-41°-Wを指す。北東壁と南東壁の内側には壁溝が部分的に巡ることが確認され、一度拡張されたことが判明した。拡張前の住居跡を第9b号住居跡、拡張後の住居跡を第9a号住居跡とすると、第9b号住居跡の規模は長軸長4.68m、短軸長4.62mとなる。

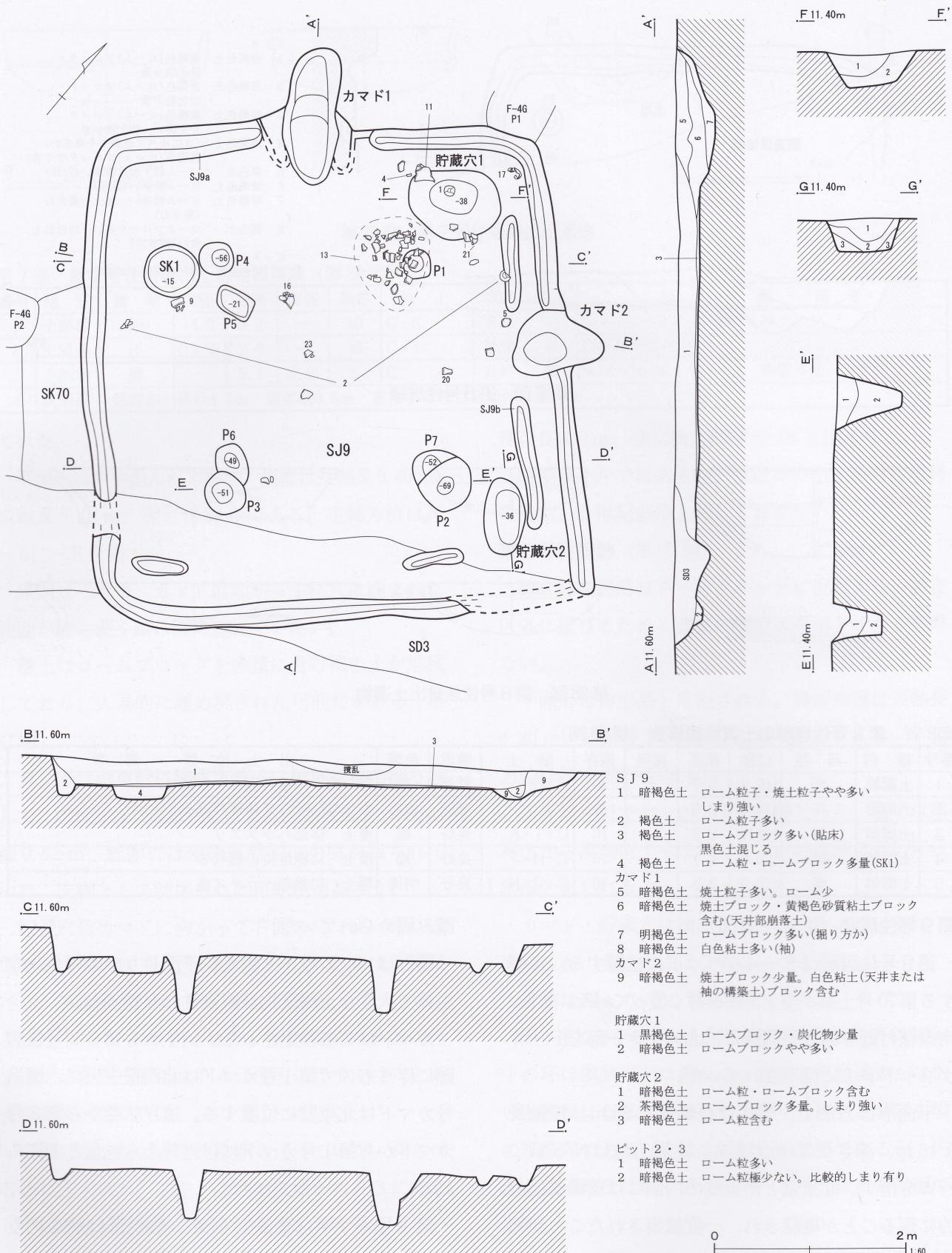
床面は細かい凹凸が顕著であるが、全体的に硬く

踏み固められていた。

覆土はローム粒子と焼土粒子混じりの暗褐色土が主体で大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは2基検出された。いずれも第9a号住居跡に伴うもので第1号カマドは北西壁中央に、第2号カマドは北東壁に位置する。遺存状態から第2号カマドから第1号カマドに付け替えられたと考えられる。

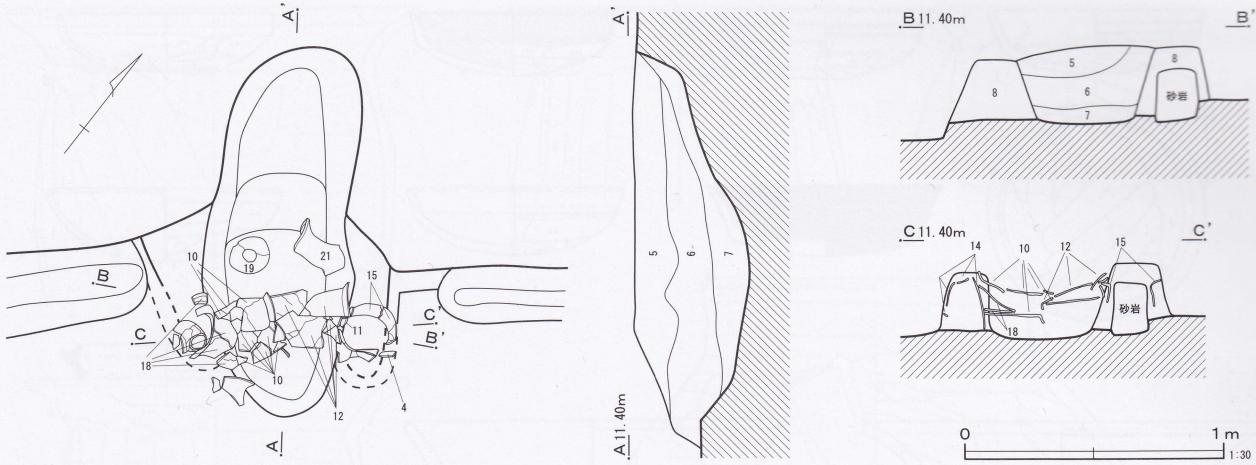
第1号カマドは全長1.44m、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。煙道部は一段高く壁外に延びる。袖部及び天井部は白色粘土を積んでつくられているが、袖には凝灰質砂岩と土師器甕が、天井部には土師器甕をソケット状に連結したものを補強材



第29図 第9号住居跡

として使用していた(第30図)。砂岩の切石は右袖の芯として埋設され、その周りに底部を欠いた土師

器甕(第32図15)を正位に被せていた。左袖には口縁部を欠いた土師器甕(第31図14)を逆位に据



第30図 第9号住居跡第1号カマド

えて芯としていた。天井部の架構材は土師器甕（第31図12・10、第32図18）が3本使用され、この順に連結させていた。

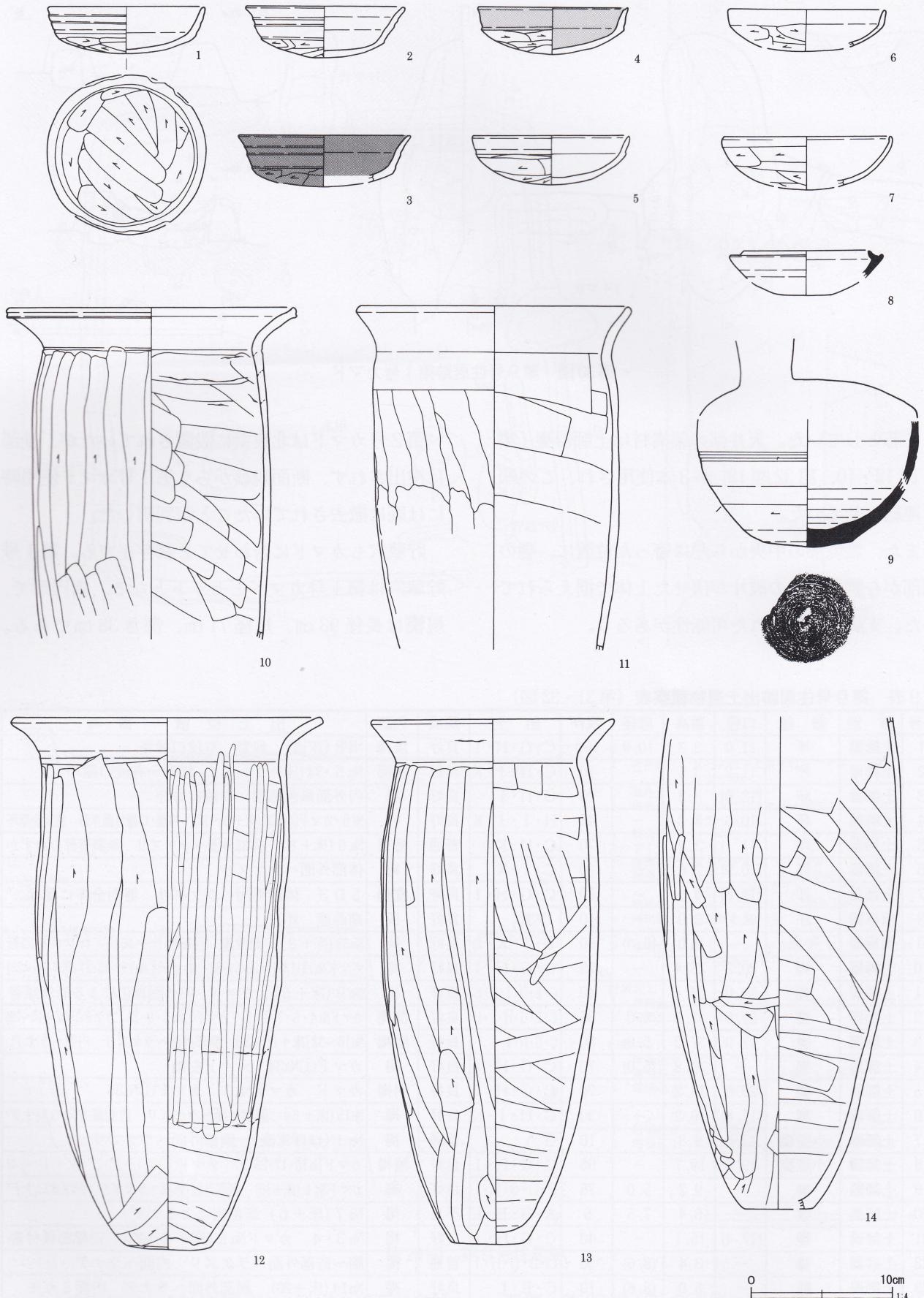
また、燃焼部の中央から左に寄った位置に、甕の底部から胴部下半の破片が伏せた上体で据えられていた。支脚に転用された可能性があろう。

第2号カマドは北東壁に設置されていたが、袖部は検出されず、断面観察からも第1号カマド使用時には既に撤去されていたことが判明した。

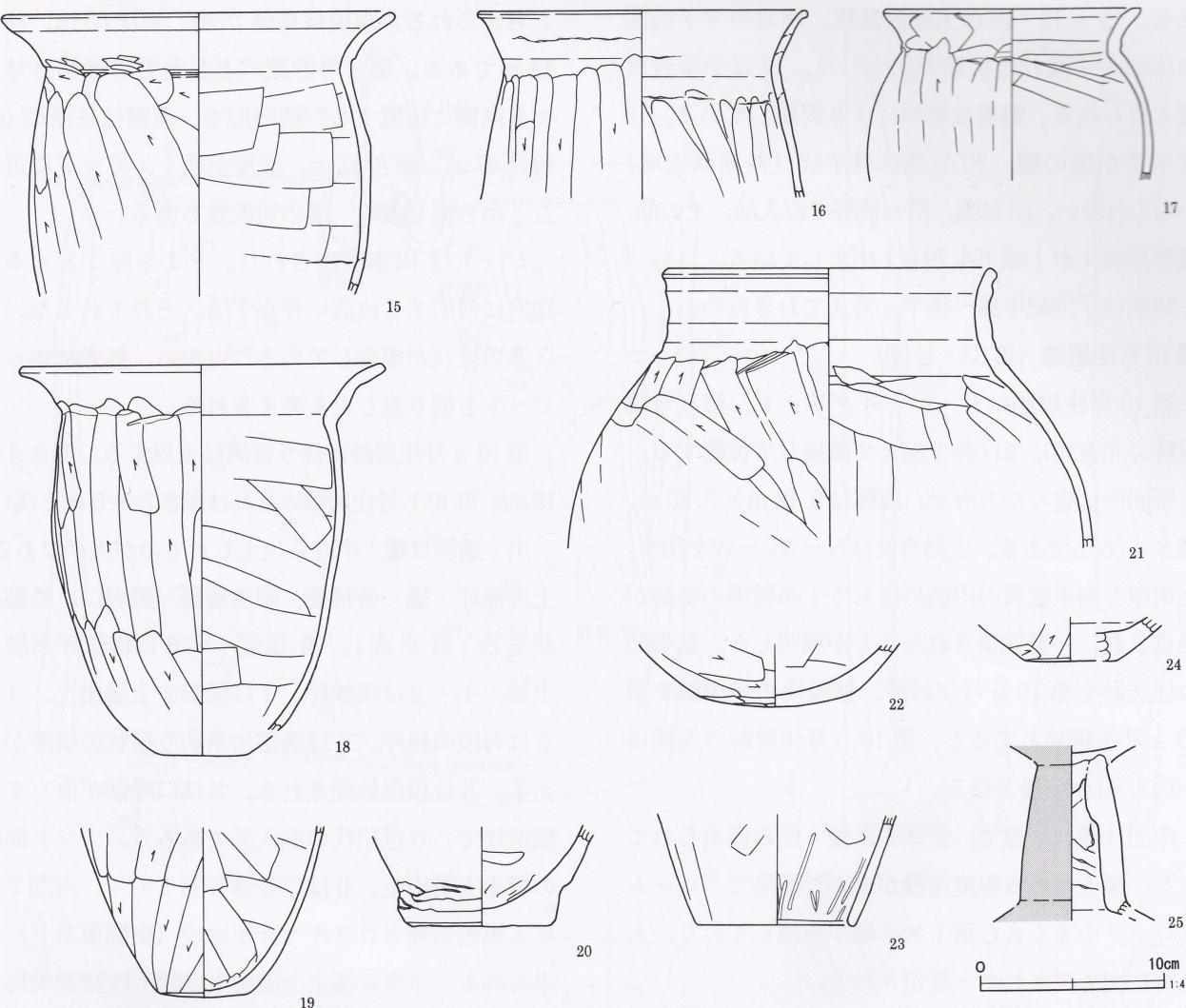
貯蔵穴もカマドに合わせて2基存在する。第1号貯蔵穴は第1号カマドとセットとなる。楕円形で、規模は長径93cm、短径71cm、深さ38cmである。

第9表 第9号住居跡出土遺物観察表（第31・32図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|-----|--------|------|-------|-----|-------------|----|----|--|
| 1 | 土師器 | 壺 | 11.0 | 3.3 | 10.0 | 100 | C・G・H・I | 良好 | 淡褐 | No.8(床直) 無彩 有段口縁壺 |
| 2 | 土師器 | 壺 | 11.2 | 3.6 | — | 70 | C・H・I・K | 良好 | 淡褐 | No.5・34(床+1~8) 無彩 有段口縁壺 |
| 3 | 土師器 | 壺 | (12.0) | 3.3 | — | 20 | C・H・I | 良好 | 褐 | 内外面黒色処理 有段口縁壺 |
| 4 | 土師器 | 壺 | 10.6 | 3.3 | — | 45 | H・I・J・K | 良好 | 褐 | No.9・カマド①No.30(床+5~10) 内面・口縁外面赤彩 繩比企型壺 |
| 5 | 土師器 | 壺 | (11.1) | 3.5 | — | 70 | C・H・K | 普通 | 橙褐 | No.6(床+8) 体部外面ヘラケズリ 無調整部分わずか |
| 6 | 土師器 | 壺 | (10.9) | 2.6 | — | 20 | C・I・K | 良好 | 褐 | 体部外面ヘラケズリ |
| 7 | 土師器 | 壺 | (11.8) | 3.6 | — | 20 | C・G・H・I | 良好 | 橙褐 | S D 3 体部外面ヘラケズリ 器面全体に磨耗 |
| 8 | 須恵器 | 壺 | (8.9) | 2.0 | — | 10 | I・K | 良好 | 灰 | 湖西産 壺H |
| 9 | 須恵器 | 平瓶 | — | 9.0 | (6.3) | 50 | E・I・K・L | 良好 | 灰 | No.33(床+8) 湖西産 回転ヘラケズリ ロクロ右回転 |
| 10 | 土師器 | 甕 | 20.2 | 23.4 | — | 75 | C・G・H・I | 良好 | 褐 | カマドNo.12・13・17・28・31・32 カマド①No.11~13・21(床+14~26) |
| 11 | 土師器 | 甕 | 19.0 | 24.1 | — | 40 | C・E・H・I・K・L | 良好 | 褐 | No.9(床+5) カマド 内外面風化による磨耗顕著 |
| 12 | 土師器 | 甕 | 21.5 | 37.5 | 6.0 | 95 | C・E・G・H・I・L | 良好 | 橙褐 | カマドNo.4・6・7・10・21 カマド①No.5・9・23 カマド①(床+16~28) |
| 13 | 土師器 | 甕 | 17.0 | 37.2 | 5.0 | 80 | C・G・H・I・L | 良好 | 暗褐 | No.16~32(床+0~3) 胴部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ |
| 14 | 土師器 | 甕 | — | 34.8 | (5.0) | 70 | C・G・H・I | 良好 | 褐 | カマド①No.34 カマド左袖 |
| 15 | 土師器 | 甕 | 20.8 | 15.2 | — | 70 | C・G・H・I | 良好 | 明褐 | カマド カマドNo.3 カマド①No.35 |
| 16 | 土師器 | 甕 | (17.8) | 10.2 | — | 30 | C・H・I・K | 良好 | 褐 | No.15(床+5) 胴部外面ヘラケズリ 内面縦方向の指ナデ |
| 17 | 土師器 | 小型甕 | 13.8 | 9.3 | — | 10 | G | 普通 | 褐 | No.1(ほぼ床直) 胴部外面ヘラケズリ |
| 18 | 土師器 | 小型甕 | 19.4 | 19.7 | — | 95 | C・G・H・I | 良好 | 橙褐 | カマドNo.16・17・25・27 カマド①No.13・18・26・27(床+1~24) |
| 19 | 土師器 | 甕 | — | 9.2 | 5.0 | 75 | C・D・G・H・I | 良好 | 褐 | カマドNo.1(床+10) 胴部外面・底部ヘラケズリ 内面木口ナデ |
| 20 | 土師器 | 甕 | — | 5.4 | 7.5 | 5 | A・B・E・L | 不良 | 褐 | No.7(床+6) 底部指によるナデ |
| 21 | 土師器 | 甕 | (17.4) | 15.1 | — | 40 | C・G・H・I | 良好 | 褐 | No.3・4 カマドNo.2(床+4~23) 口縁部煤付着 |
| 22 | 土師器 | 甕 | — | 3.4 | (8.6) | 50 | C・D・G・H・I | 普通 | 褐 | 胴～底部外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ |
| 23 | 土師器 | 甕 | — | 6.0 | (8.6) | 10 | C・E・L | 良好 | 褐 | No.14(床+20) 胴部外面ヘラナデ 内面ミガキ |
| 24 | 土師器 | 甕 | — | 2.5 | (4.8) | 30 | C・D・H・I・K | 普通 | 褐 | 胴部外面ヘラケズリ 内面ナデ |
| 25 | 土師器 | 高壺 | — | 8.7 | — | 90 | G・H・I・K | 良好 | 橙褐 | 外面赤彩 雲母状微粒子 |



第31図 第9号住居跡出土遺物（1）



第32図 第9号住居跡出土遺物（2）

第2号貯蔵穴は2号カマド南側に位置する。楕円形で規模は長径78cm、短径43cm、深さ36cmである。覆土はロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された状況が観察された。カマド付け替えに伴って貯蔵穴も作り替えられたと考えられる。

ピットは7本検出された。P5以外は主柱穴と考えられる。但し、P7とP2、P6とP3は重複しており、住居跡の拡張に伴って、P7→P2、P6→P3にそれぞれ柱穴を掘り直したと推定される。

土壙は1基ある(SKI)が、深さ15cmと浅く、性格は不明である。

第9a号住居跡の壁溝は全周する。深さ4~18cm。第9b号住居跡のそれは部分的に検出されたのみである。深さ8cm以下と浅い。

出土遺物は第1号カマドとその周辺を中心によつまっている。土師器壺・高壺・甕・壺・瓶、須恵器壺・平瓶がある(第31・32図)。1~3は有段口縁壺。1は第1号貯蔵穴上面から出土した。完形品。2は覆土下層出土。3は続比企型の模倣壺。口唇部内面に沈線、内面と口縁部外面に赤彩される。第1号カマド内と貯蔵穴脇の破片が接合。5は模倣壺、覆土下層出土。6は模倣壺だが、ケズリで稜を作り出すタイプ。7は北武藏型壺。第3号溝から出土しており、住居跡に伴う保証はない。8はいわゆる壺H身で、湖西産と考えられる。9は接合しない破片を図上で合成したが、平瓶と推定される。胴部沈線、胴部下端~底部は回転ヘラケズリ。内面の片寄った位置に降灰がある。砂っぽい胎土で湖西産と考えら

れる。10～16・19は土師器長甕。13はカマド前面の床面から潰れた状態で出土した。17は小型台付甕と思われる。器表は被熱により剥離している。18はやや小型の甕。20の甕は異系統（非武藏地域）かもしれない。23は瓶。25は高坏で混入品。その他、椀形滓破片が1点（54.79g）出土している。

時期は7世紀中葉～後半と考えておきたい。

第10号住居跡（第33・34図）

第10号住居跡はE・F-4グリッド、第9号住居跡の北東側にほぼ軸を揃えて隣接して位置する。

平面形は整った方形で、規模は5.12m×5.25m、深さ0.56mである。主軸方位はN-45°-Wを指す。北東壁と南東壁溝の内側にはもう1条壁溝の痕跡が発見され、一度拡張されたことが判明した。拡張前の住居跡を第10b号住居跡、拡張後の住居跡を第10a号住居跡とすると、第10b号住居跡の規模は一辺4.80m前後となる。

床面は概ね平坦で、全体的に硬く踏み固められていた。覆土はある程度埋没が進んだ段階で、ロームブロックを多く含む第1・2層が堆積しており、人為的に埋め戻されたと推定される。

カマドは2基検出された。第1号カマドは第10a号住居跡に伴うもので、北西壁中央に設置されていた。全長1.83m、燃焼部はほぼ壁内に収まり、煙道部は約0.90m壁外に延びている。燃焼部底面は皿状に窪み、中央やや奥付近は被熱面が形成されていた。袖はローム混じりの暗褐色土と白色粘土を順に積んで構築されていたが、左右の袖部内壁面に沿って凝灰質砂岩の切石が据えられていた。砂岩切石の内壁面は強く被熱していた。

第2号カマドは拡張前の第10b号住居跡に伴うものと考えられ、北東壁中央部床面下に掘込みのみ検出された。埋土には焼土ブロックが多量に含まれていた。遺構の拡張に伴い埋め戻されたと推定される。

貯蔵穴は2基ある。第1号貯蔵穴は第1号カマドに向かって右脇に位置し、第1号カマドに伴うもの

と考えられる。規模は長径75cm、短径68cm、深さ42cmである。第2号貯蔵穴としたものは第2号カマド南側に位置する。楕円形で、規模は長径62cm、短径47cm、深さ17cm。深度が浅く、カマドに近いことから掘り方の一部の可能性もある。

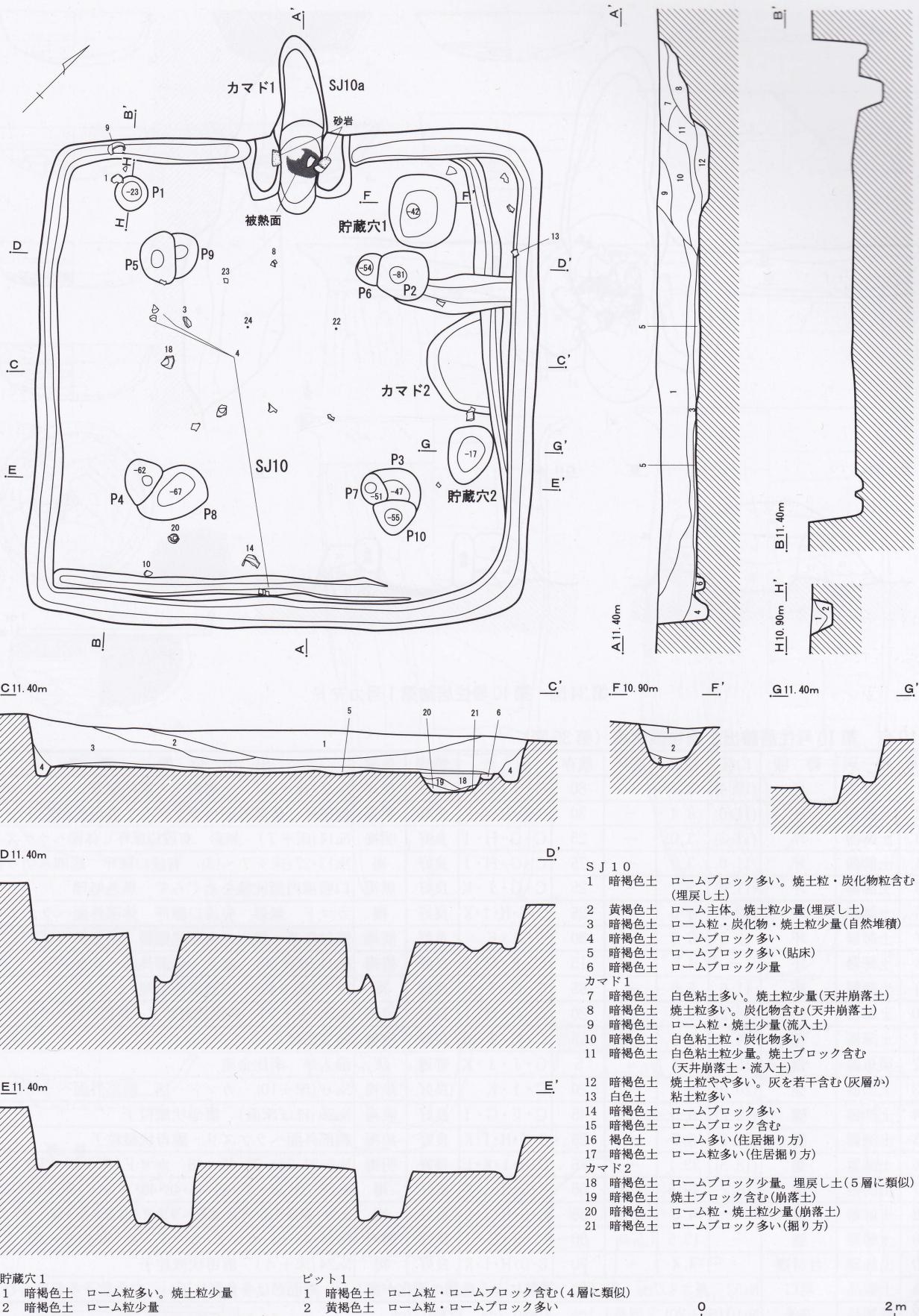
ピットは10本検出された。P1を除くと4本主柱穴に対応する位置に存在する。それぞれ2ないし3本の柱穴が複合していることから、拡張に伴ってピットも掘り直したと考えられる。

第10a号住居跡に伴う壁溝は全周する。深さ4～12cm。第10b号住居跡のそれは深さ2～6cmと浅い。

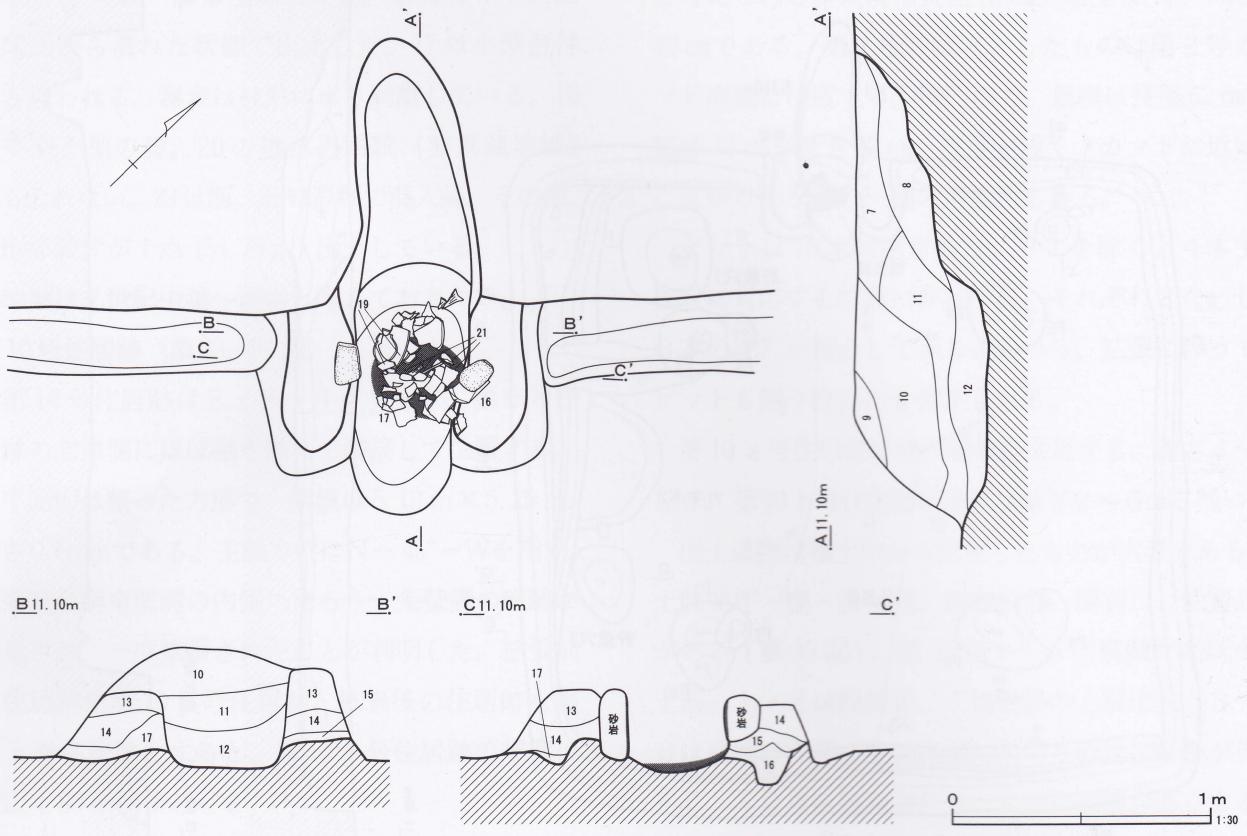
出土遺物は覆土中から出土したものが大半である。土師器坏・甕・台付甕、須恵器蓋、鞴羽口、鉄製品がある（第35図）。第35図1～8は模倣坏系統の土器。1・2は模倣坏。1は壁際の上層出土。3～6は有段口縁坏。4は底部に糸切り痕状の痕跡が見える。5は黒色処理される。8は口縁部が直立する模倣坏で、6世紀代の混入品であろう。カマド前面の覆土上層出土。9は口縁部外面ミガキ、内面ミガキと黒色処理される坏で非在地産（東関東系？）と思われる。壁際の覆土上層出土。10・11は深椀形の暗文坏。内面の放射暗文はまばらである。12の須恵器蓋は混入か。13～19は甕。17はカマド埋土の上面から出土した。底部が大きく木葉痕を留める。胴部外面は粗いミガキが加わる。非在地産と思われる（東関東系であろうか）。18は底部が大きくヘラナデ調整甕、20はヘラミガキ調整される台付甕で、やはり東関東系譜か。21は鞴羽口。両端を欠いている。図上の右側が先端に近い部分で、灰白色に還元している。その左が白色、更に褐色へと色調変化する。外面の整形は長軸方向のケズリの後、なでおり、断面形は多角形に近い。22は刀子、23は茎部を欠くが、短頸管被平造五角形鱗と思われる。24は角棒状鉄製品。鱗の茎部か。いずれの鉄製品も覆土出土。

その他に図示しなかったが椀形滓が3点、397g出土している。

確実に伴う遺物がなく時期決定は難しいが、第9



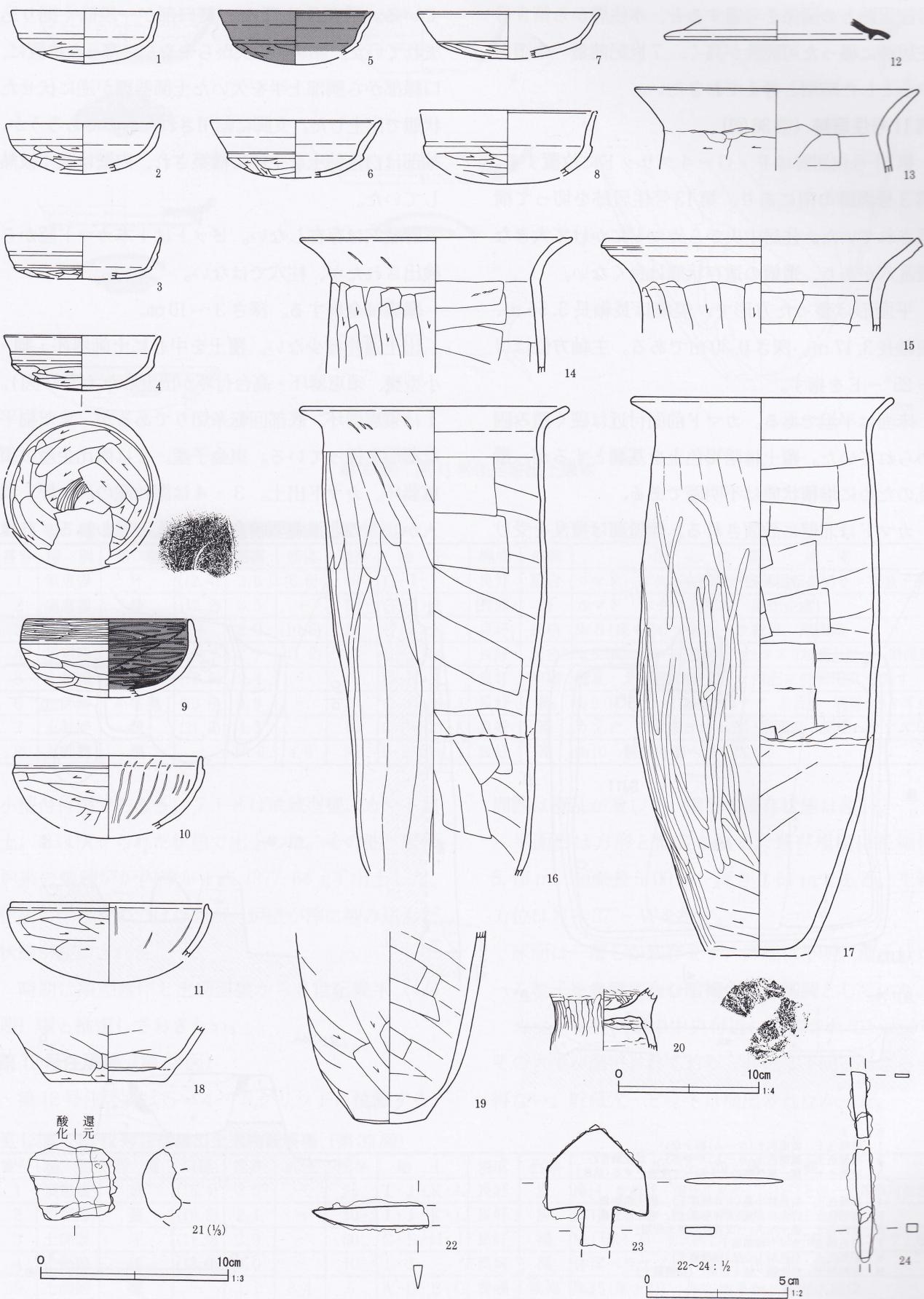
第33図 第10号住居跡



第34図 第10号住居跡第1号カマド

第10表 第10号住居跡出土遺物観察表（第35図）

| 番号 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 出土位置・備考 |
|----|-----|-----|-------------|-------------|---------|----------------|------------|-----------|----|---|
| 1 | 土師器 | 壺 | (10.4) | 3.7 | — | 80 | G・I・K | 良好 | 淡褐 | No.2(床+26) 上層出土 磨耗顯著 |
| 2 | 土師器 | 壺 | (11.0) | 3.4 | — | 30 | C・D・H・I・K | 良好 | 明褐 | 模倣壺 体部外面ヘラケズリ 雲母状微粒子 |
| 3 | 土師器 | 壺 | (11.2) | 3.0 | — | 25 | C・G・H・I | 良好 | 明褐 | No.14(床+7) 無彩 有段口縁壺 体部ヘラケズリ |
| 4 | 土師器 | 壺 | 11.0 | 3.9 | — | 75 | C・G・H・I | 良好 | 褐 | No.13・27(床+7~13) 有段口縁壺 底部糸切り痕 |
| 5 | 土師器 | 壺 | (11.0) | 3.2 | — | 25 | C・G・I・K | 良好 | 黒褐 | 口唇部内面沈線をめぐらす 黒色処理 |
| 6 | 土師器 | 壺 | (12.0) | 4.0 | — | 25 | C・G・H・I・K | 良好 | 褐 | カマド 無彩 有段口縁壺 体部外面ヘラケズリ |
| 7 | 土師器 | 壺 | 12.6 | 3.7 | — | 80 | G・I・K | 良好 | 淡褐 | 模倣壺系 風化の為磨耗顯著 胎土粉っぽい |
| 8 | 土師器 | 壺 | — | 4.6 | — | 15 | C・E・G・I | 良好 | 橙褐 | No.11(床+30) 混入 体部外面ヘラケズリ |
| 9 | 土師器 | 壺 | 11.6 | 5.5 | — | 85 | C・D・I・K | 良好 | 褐 | No.1(床+42) 内面黑色処理・ミガキ |
| 10 | 土師器 | 壺 | (13.2) | 5.2 | — | 20 | C・G・H・I | 良好 | 橙褐 | No.25(床+7) 内面放射暗文 体部外面ヘラケズリ |
| 11 | 土師器 | 壺 | 14.0 | 3.8 | — | 15 | C・H・I・K | 良好 | 橙褐 | 暗文まばら |
| 12 | 須恵器 | 蓋 | (15.6) | 1.4 | — | 5 | G・I・J・K | 普通 | 灰 | 混入か 南北企産 |
| 13 | 土師器 | 甕 | (20.0) | 5.9 | — | 20 | C・I・K | 良好 | 淡褐 | No.6(床+10) カマド一括 胴部外面ヘラケズリ |
| 14 | 土師器 | 甕 | (19.2) | 9.5 | — | 45 | C・E・G・I | 良好 | 淡褐 | No.26(ほぼ床直) 雲母状微粒子 |
| 15 | 土師器 | 甕 | (22.2) | 6.7 | — | 25 | C・G・H・I・K | 良好 | 淡褐 | 胴部外面ヘラケズリ 雲母状微粒子 |
| 16 | 土師器 | 甕 | (18.8) | 33.1 | — | 75 | C・H・I・K・L | 良好 | 明褐 | No.6・31・34~37・45~48 カマド(床+10~34) |
| 17 | 土師器 | 甕 | 18.2 | 39.5 | (7.3) | 65 | E・G・H・I・K | 良好 | 褐 | No.28・29・38~43・45・46・48・49・カマド(床+18~36) |
| 18 | 土師器 | 甕 | — | 4.0 | 8.0 | 65 | E・G・H・I・L | 良好 | 褐 | No.19 胴部外面・内面・底部ヘラナデ 体部外面下端ヘラケズリ |
| 19 | 土師器 | 甕 | — | 13.5 | 5.0 | 50 | C・E・G・I | 良好 | 暗褐 | No.41・45・51・カマド・カマド一括(床+20~27) |
| 20 | 土師器 | 台付甕 | — | 4.4 | — | 70 | E・G・H・I・K | 良好 | 褐 | No.24(床+4) 雲母状微粒子 |
| 21 | 土製品 | 羽口 | No.52 | 長さ4.7cm | 31.53g | 被熱による色調の変化が激しい | 断面形は多角形に近い | 白色粒子多量に含む | | |
| 22 | 鉄製品 | 刀子 | No.10(床+20) | 現長4.1cm | 刃幅0.7cm | 背幅0.3cm | | | | |
| 23 | 鉄製品 | 鉄鎌 | No.12(床+3) | 現長4.1cm | 刃幅3.5cm | 背幅0.2cm | 五角形鎌 | 平造り | | |
| 24 | 鉄製品 | 棒状品 | No.15(ほぼ床直) | 現長2.3+3.9cm | 幅0.5cm | 鉄鎌の可能性もあり | | | | |



第35図 第10号住居跡出土遺物